

# 福島県文化財センター白河館

# 研究紀要

## 第23号

X線CTを用いた福島県内の動物形土製品の研究

鹿又 喜隆・鹿納 晴尚  
勝川 若奈・鶴見 諒平…………… 1

レプリカ法による福島県前田遺跡出土の縄文土器圧痕の同定（2）

佐々木 由香・小久保 竜也  
杉本 亘・蒲生 侑佳  
富高 直人・黒住 耐二  
三浦 武司・中野 幸大  
本間 宏…………… 9

関東系土師器の初期資料と在地社会の再編

菅原 祥夫……………29

会津若松市一ノ堰B遺跡出土人面付土器の未報告資料の紹介

鶴見 諒平……………43

塩沢上原A・B遺跡出土の三角柱状土製品

河西 久子……………53

ふくしまのおひなさまをつくろうー県内文化財を題材とした体験学習への取り組みー

青木 愛子……………57

2025 年

公益財団法人福島県文化振興財団

## 序 文

福島県文化財センター白河館(愛称「まほろん」)は、福島県教育委員会が行った遺跡発掘調査による出土品や記録類を一括管理し、これを活用した展示・講座・体験学習・研修・情報発信を行う施設として、2001年にオープンいたしました。

幸いにも、多くの皆様に支えられ、本年度は開館24年目を迎えることができました。まもなく開館25周年となることから、一層文化財の普及に取り組んで参る所存です。

本号は、福島県の伝統行事を活用した体験活動室の月替わりメニューの開発経緯、収蔵資料の非破壊構造調査の成果など当館が行っている活動について紹介しております。

また、前号に引き続き、レプリカ法による前田遺跡出土土器に残された種実等の圧痕の同定結果報告についても掲載しております。

本書が福島県の文化財に関する研究と、文化財の保護への一助となれば幸いに存じます。最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、御指導、御協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

2025年3月吉日

公益財団法人福島県文化振興財団

福島県文化財センター白河館

館 長 石川 日出志



# X線CTを用いた福島県内の動物形土製品の研究

鹿又 喜隆

鹿納 晴尚

勝川 若奈

鶴見 諒平

(東北大学大学院文学研究科) (東北大学総合学術博物館)

## 要 旨

X線CT装置を使用し、福島県郡山市荒小路遺跡出土の動物形土製品5点と、磐梯町角間遺跡出土の動物形土製品1点を分析した。分析では、各資料について surface rendering で6面の投影像を作成し、肉眼観察の所見も加味して表面的な諸痕跡を把握した。次に、surface rendering の透過表示および volume rendering によりモノクロの透過図を正面、側面、上面などから図化し、記録を残した。併せて、実資料の詳細な観察を通して、内部構造との対応関係を把握した。そして、surface rendering section による疑似カラー断面図を作成した。本研究の対象資料の特徴は、①動物の目、耳、鼻、口が表現される割合が高いこと、②尻穴の施される割合が高いことである。粘土の整形法では、頭と体、尾、表皮を区別することは無く、基本的に四足が別粘土を貼り付けて、成形されている。既に分析を行った宮城県石巻市沼津貝塚や青森県弘前市十腰内遺跡で確認されたような「コア」は認められず、1例のみ「コア」と呼ぶことが可能な別物体が体内の中央に認められた。このような分析結果から、動物形土製品の内部構造は地域や遺跡によって違いがある可能性が浮上した。一方で、意識的な尻からの穿孔が高い割合で認められる等の共通点も確認できた。尻穴については、前報で「依代」としての魂を導くための機能を強化することを目的として施されたと推定している(鹿又・鹿納・イワノワ2024)。こうした共通性の広がりとは、当時の動物儀礼や観念の地域圏を反映している可能性が高い。

## キーワード

動物形土製品、縄文時代、X線CT、内部構造、動物儀礼、コア

## 1 はじめに

縄文時代の動物形土製品は半世紀以上にわたり研究が続けられているが、その特徴の把握と機能の解釈には一定の成果がある。特に、機能面について民族学的な解釈や考古学的コンテクストによる理解が進められたが、一定の限界が垣間見える。そうした現状において、X線CTを用いた内部構造の理解が動物形土製品の機能についての理解を促してくれる可能性が見えてきた(鹿又・鹿納・イワノワ2024)。具体的に言えば、宮城県沼津貝塚と青森県十腰内遺跡の事例から、動物形土製品による動物儀礼の具体像を描くことができた。一方で、特定の遺跡の限られた事例に基づいているため、時代性や地域性を踏まえた検討が求められた。そのような課題をクリアするために、福島県内の動物形土製品の追加分析を試みた。

2024年4月23日に筆者のひとり鹿又が福島県文化財センター白河館「まほろん」を訪問し、荒小路遺跡出土の動物形土製品を実見すると共に、X線CTを用いた分析の実施方法について相談した。「ま

ほろん」では、近年X線CTを活用した収蔵資料の調査研究を進めており、土偶や青銅製品などの分析を実施している(勝川・福田2023ほか)。この成果は展示や実技講座等において公開・活用している。その一環として、東北大学総合学術博物館の機器を用いて分析を実施する運びとなった。そこで、2024年9月3日に、福島県文化財センター白河館が資料を東北大学総合学術博物館へ運搬し、鹿又と鹿納が測定と解析を実施した。

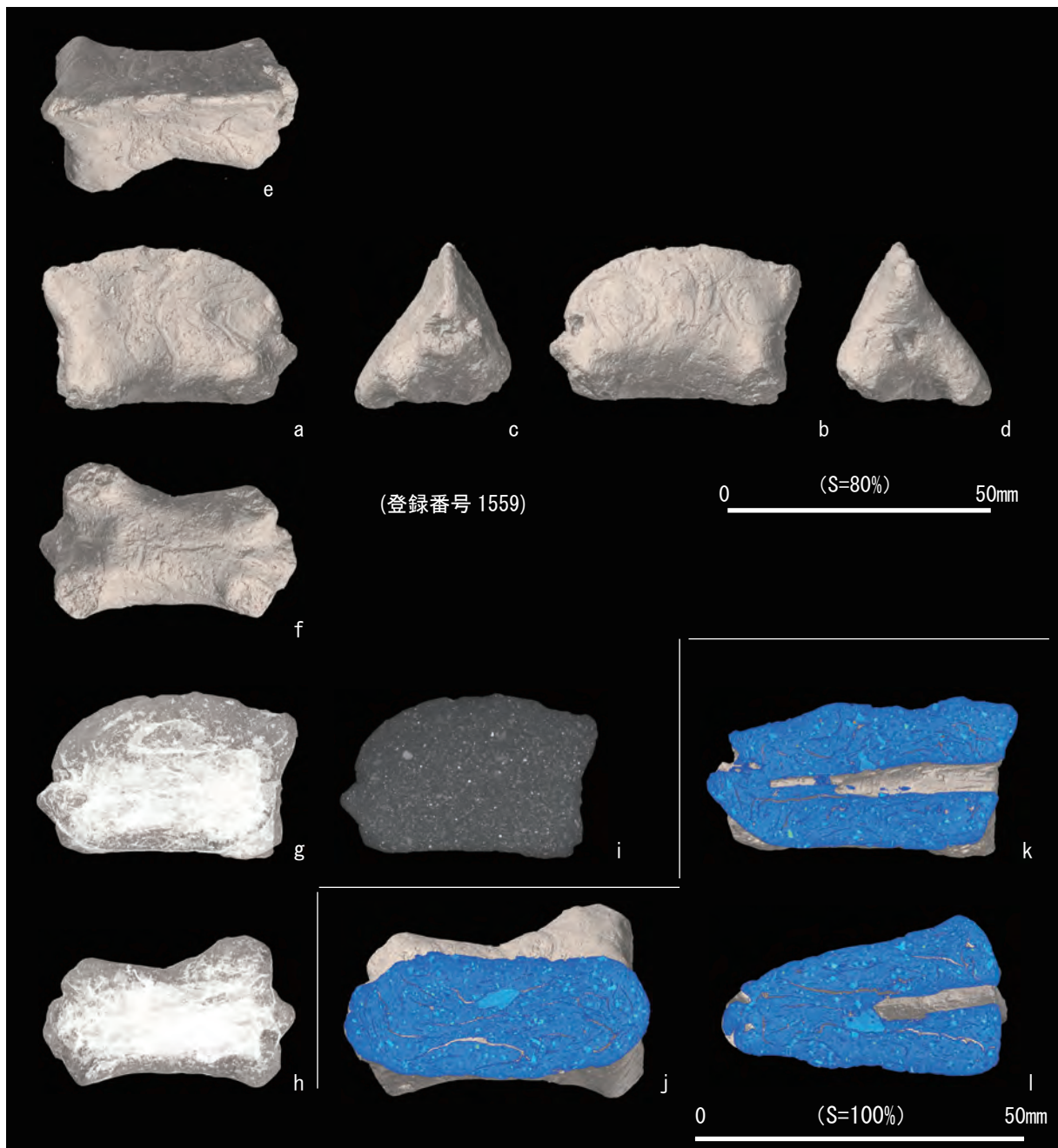
## 2 分析方法

本研究では、東北大学総合学術博物館所管のX線CT装置(コムスキャンテクノ株式会社製 ScanXmate-D180RSS270 高出力大型標本用装置、株式会社 Voxel Works 改修)を使用した。X線CTの撮影条件は、X線管電圧190kV、X線管電流120  $\mu$ A、2500プロジェクションである。断層像の再構成には coneCTexpress(有限会社ホワイトラビット)を使用し、撮影データの表示、解析には Molcer および Molcer Plus(ともに有限会社ホワイトラビット)を使用した。CT画像は白色の8bit(256色)のグレー



スケールで表現しており、白色に近づくほど密度が高く、反対に黒色に近づくほど密度が低い。X線CT装置では、X線管からX線が放射される間に、ターンテーブル上に設置された資料が360度回転し、検出器により検出されたX線の透過度によって内部の密度構造が計算され、断層像が得られる。得られた断層像をコンピュータで再構成することにより、3次元コンピュータグラフィック(3DCG)が得られる。この3DCGを用いて、任意の方向から内部構造を観察・分析することが可能となる。

本研究では、福島県郡山市荒小路遺跡(福島県教育委員会1985)出土の動物形土製品5点と、磐梯町角間遺跡(福島県教育委員会1990)出土の動物形土製品1点を分析対象としてX線CT測定を実施した(第1～5図、表1～2)。各資料について surface rendering で6面の投影像を作成し、肉眼観察の所見も加味して表面的な諸痕跡を把握した。次に、surface rendering の透過表示および volume rendering によりモノクロの透過図を正面、側面、上面などから図化し、記録を残した。併せて、実資



a～f: 3D surface rendering, g～h: CT surface rendering 透過表示  
i: CT volume rendering, j～l: CT surface rendering section

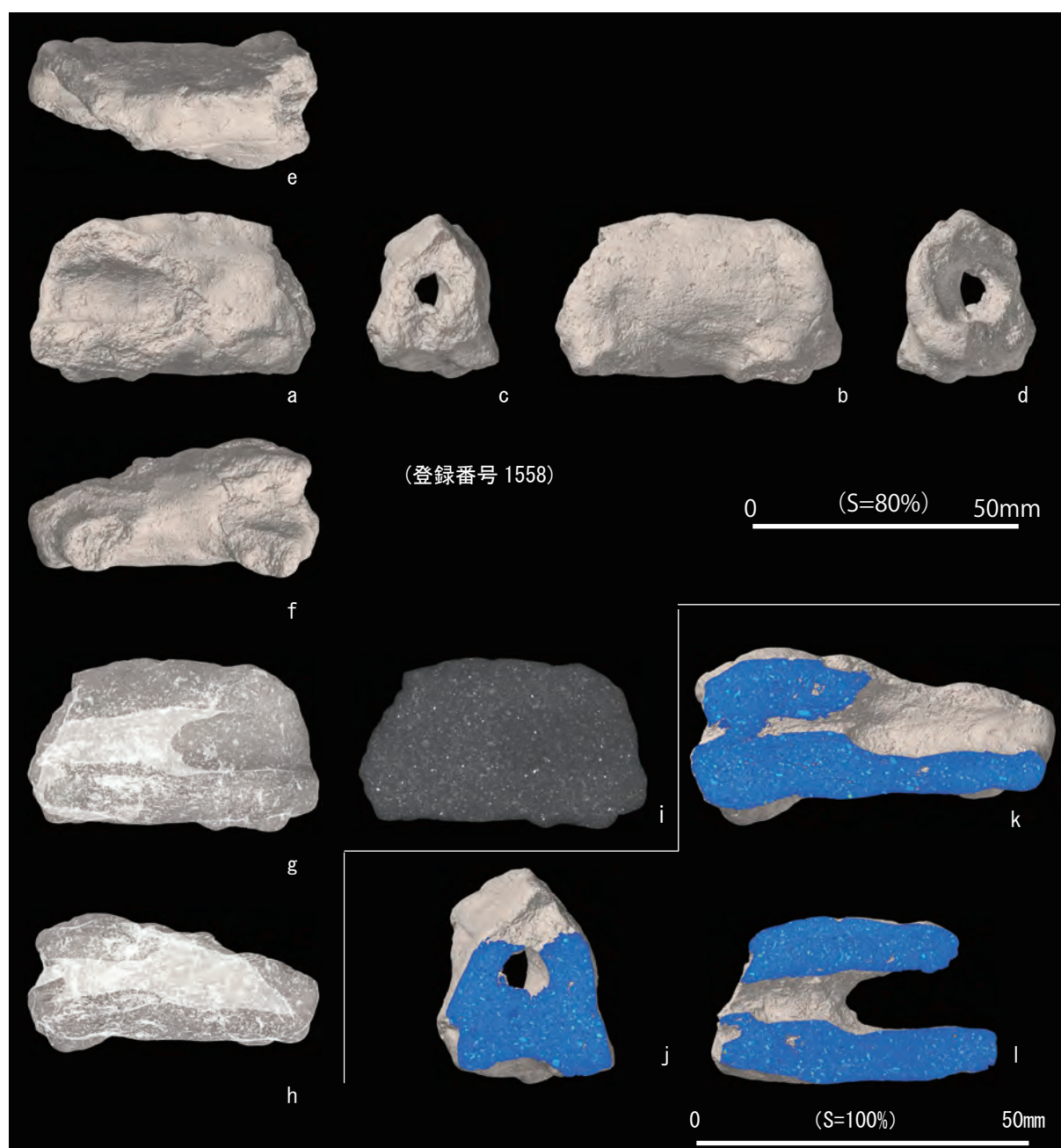
第1図 荒小路遺跡出土動物形土製品(1)

料の詳細な観察を通して、内部構造との対応関係を把握した。そして、surface rendering sectionによる疑似カラー断面図を作成した。さらに、再確認と客観的理解のために、正面や側面から深度を移動した動画を記録した。なお、本論では紙数の関係で注目すべき資料の画像のみを提示する。同様の分析は、宮城県沼津貝塚と青森県十腰内遺跡出土の動物形土製品計9点を対象に既に実施されている(鹿又・鹿納・イワノワ前掲)。

### 3 動物形土製品の分析結果

(1) 荒小路遺跡 1559(長さ 47.9 mm、幅 29.5 mm、高さ 29.9 mm) イノシシ(第1図)

断面は三角形を呈し、背中の逆毛を強調し、足を簡略化した特徴的な形状である。顔面には目の刺突と思われる穴はあるが、その他の部位は不明瞭である(第1図 a～f)。左右の外側面と腹面には線刻による弧線や直線の文様が描かれている。イノシシであれば、写実性に乏しい造形である。CTによる測定



a～f: 3D surface rendering, g～h: CT surface rendering 透過表示  
i: CT volume rendering, j～l: CT surface rendering section

第2図 荒小路遺跡出土動物形土製品(2)

の結果、粘土を捏ねた際に生じたと思われる連続的な空隙が体内に多く認められる(第1図g・h)。胎土に混和される砂粒は細かい(第1図i)。また、体部の中央には密度のやや大きな不正形物があり、幅4mmの穿孔は尻から深さ25mmのその物体に当たって停止している(第1図l)。それよりも先にはより細い幅1.5mmの穴が続いており、2種の棒状工具で穿孔していることが分かる(第1図k)。目の刺突は幅1.5mm、深さ6mm程である。右目は3回の刺突痕から成る。

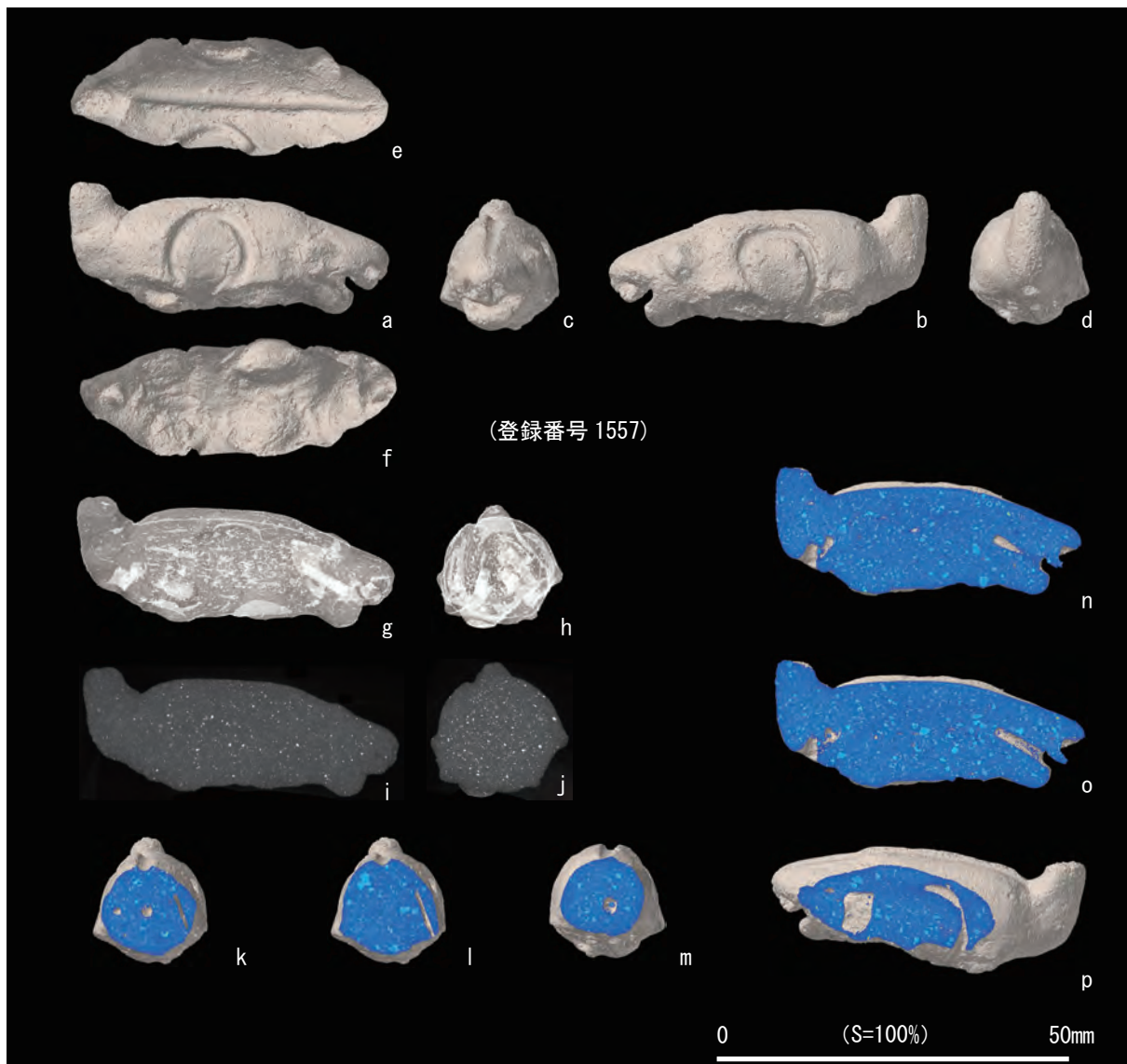
(2) 荒小路遺跡 1558 (長さ54mm、幅26.5mm、高さ31.6mm) イノシシ (第2図)

頭から尻にかけての貫通孔がある土製品である(第2図a～f)。この貫通孔は全て同じ幅ではなく、

尻から深さ23mm付近で細くなっている(第2図k・j)。頭側からその穴の下に穿孔がなされており、それによって、深さ6mm程のところで、元々の幅広の穴が狭くなっている(第2図h・l)。胎土には細かな砂粒が含まれ(第2図i)、粘土内の空隙は少ない(第2図g・h)。

(3) 荒小路遺跡 1557 (長さ44.1mm、幅16.3mm、高さ15.8mm) イノシシ幼獣 (第3図)

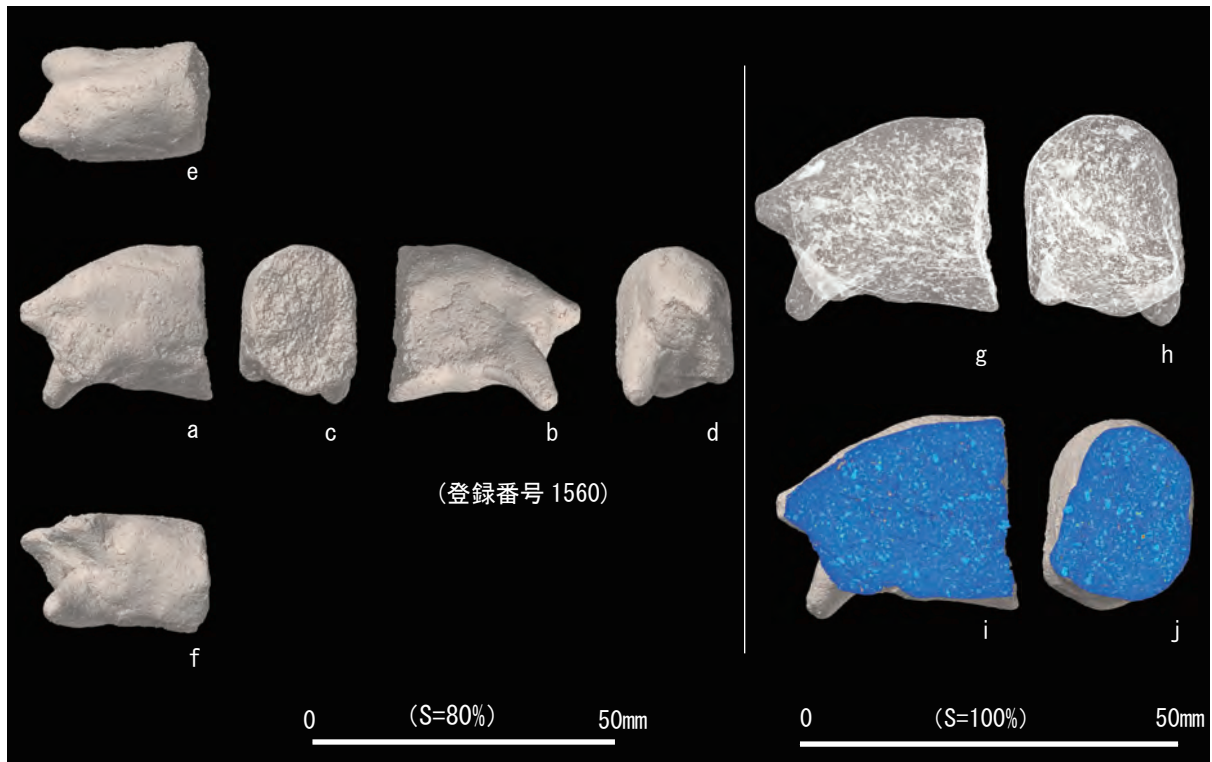
イノシシ幼獣とされ、両側面に弧線文、背中に沈線による逆毛の表現がある(第3図a～f)。足は剥落しているが、一部の粘土が足穴の中に残っている。目と口、尻に穴があるが、目の部分は粘土粒を貼り付け盛り上げてあり、その周りに線刻で円を描いている。刺突では口からのものが最も深く、深さ



a～f: 3D surface rendering, g～h: CT surface rendering 透過表示  
i～j: CT volume rendering, k～p: CT surface rendering section

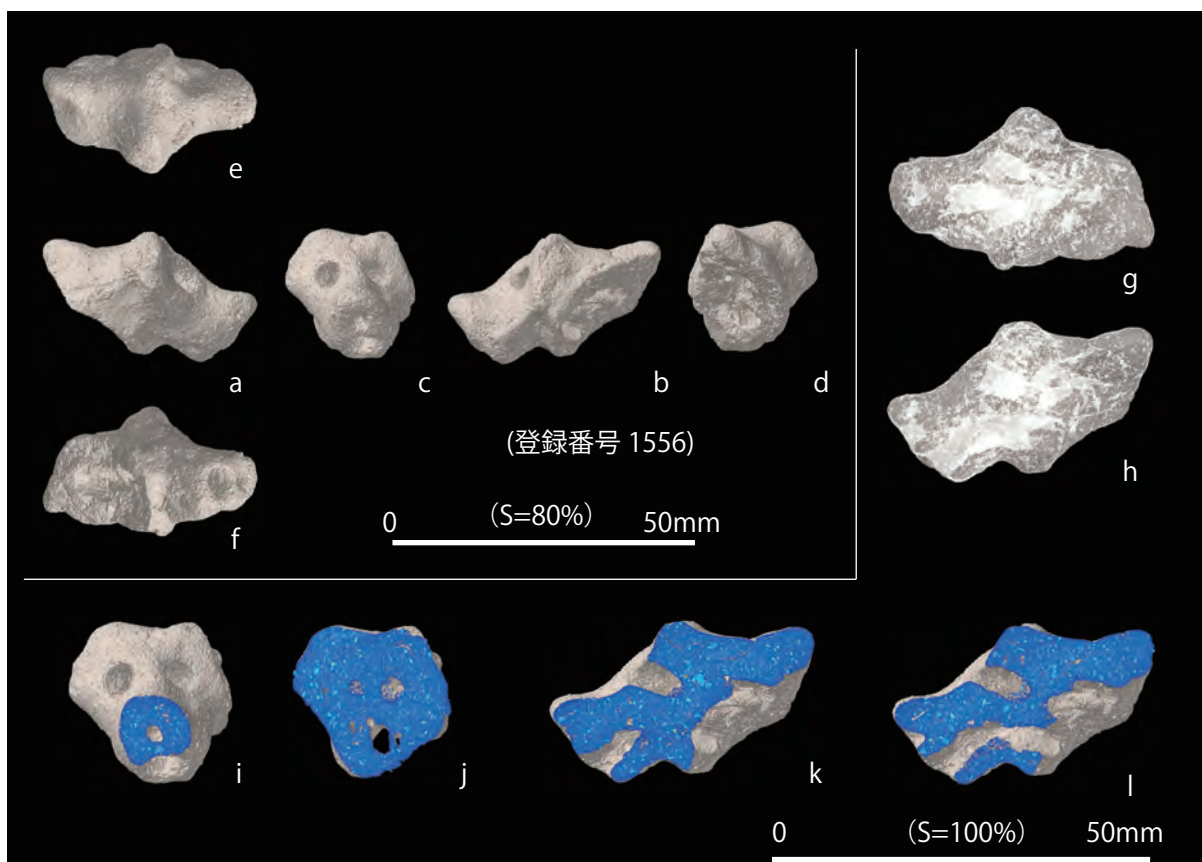
第3図 荒小路遺跡出土動物形土製品 (3)





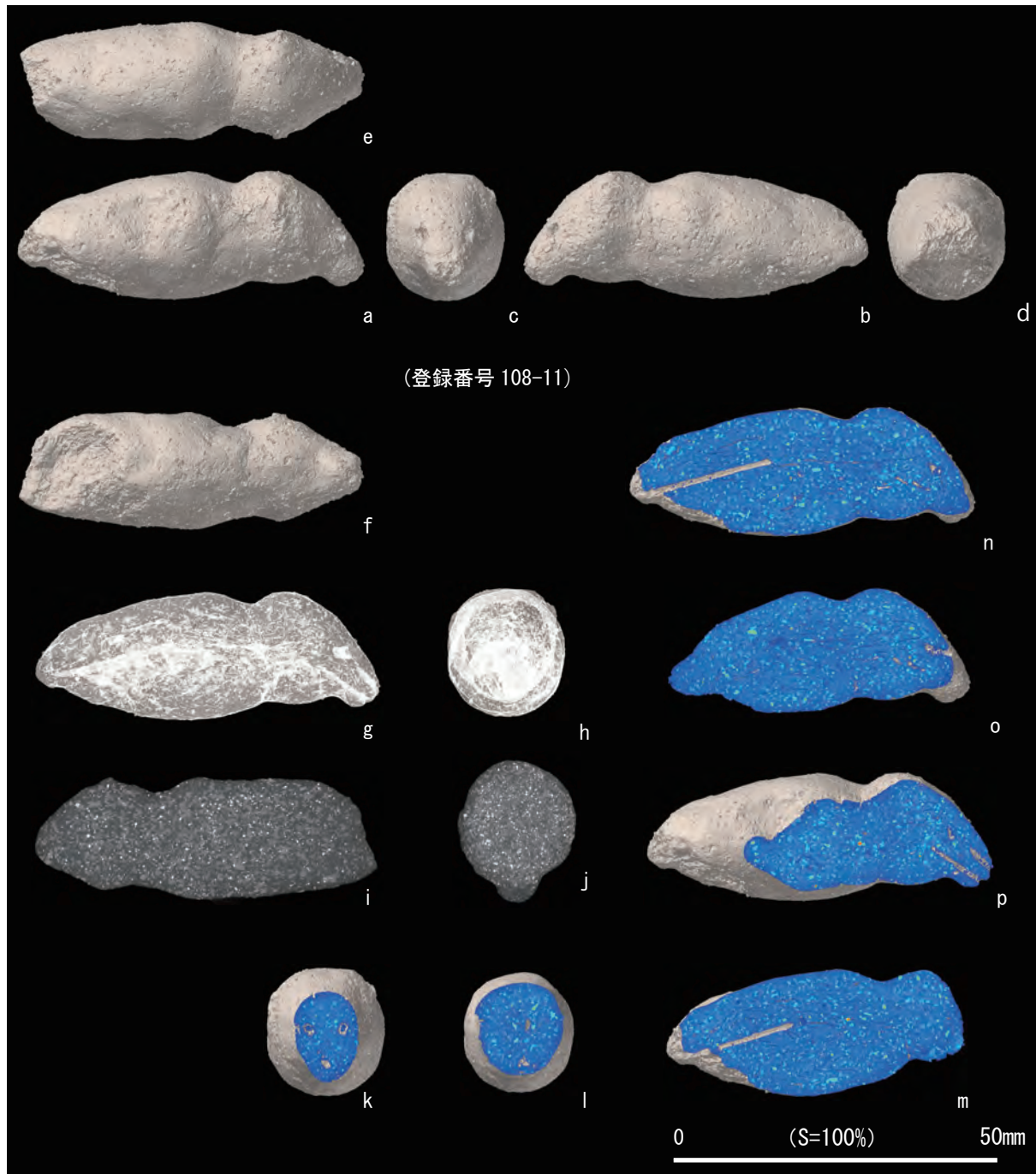
a ~ f: 3D surface rendering, g ~ h: C T surface rendering 透過表示  
i ~ j: C T surface rendering section

第 4 図 荒小路遺跡出土動物形土製品 (4)



a ~ f: 3D surface rendering, g ~ h: C T surface rendering 透過表示  
i ~ l: C T surface rendering section

第 5 図 荒小路遺跡出土動物形土製品 (5)



a～f: 3D surface rendering, g～h: CT surface rendering 透過表示

i～j: CT volume rendering, k～p: CT surface rendering section

#### 第6図 角間遺跡出土動物形土製品

10mmに達する(第3図g・n・o)。尻からの穴は2回の刺突によるものである。また、右顎には6.5×5mm程の薄くて平らな物体が入っていたと思われ、その隙間は外部と繋がっている(第3図k・l・p)。胎土には細かな砂粒が含まれ(第3図i・j)、粘土内の空隙は長軸に沿って細長く平行する傾向にある(第3図g・h)。

(4) 荒小路遺跡 1560(長さ30.8mm、幅19.3mm、高さ29.3mm) イノシシ(第4図)

イノシシの下半身であり、逆毛は不明瞭で、尾は明確に飛び出している(第4図a～f)。粘土内には細かな筋状の隙間が多く、捏ねた際に生じたものと思われる(第4図g)。足と体部の接合痕は明瞭であり、尾部と体部は一緒に粘土から作られている(第4図i)。上記の粘土内の隙間の筋は尾に向かって伸びている。

(5) 荒小路遺跡 1556(長さ36.5mm、幅19.8mm、高さ19.9mm) イヌ頭部(第5図)

表 1 福島県内動物形土製品の外的属性（1＝有、0＝無）

報告番号	遺跡	動物種	体長 (mm)	体高 (mm)	幅 (mm)	目	耳	鼻	口	背中突起	尻穴	腰穴	尾	尻突起
1556	荒小路	イヌ	36.5	19.8	19.9	1	1	1	1	－	?	－	－	－
1557	荒小路	イノシシ幼獣	44.1	16.3	15.8	1	0	1	1	線刻	1	0	1	0
1558	荒小路	イノシシ	54	26.5	31.6	－	－	－	?	1	1	0	－	－
1559	荒小路	イノシシ	47.9	29.5	29.9	1	0	?	0	1	1	0	1	0
1560	荒小路	イノシシ	30.8	19.3	29.3	－	－	－	－	1	0	0	1	0
第 108 図 11	角間	イヌ、クマ、イタチ	53.4	18.2	20	1	1	1	1	0	1	0	0	0

表 2 福島県内動物形土製品の内的属性（1＝有、0＝無）

報告番号	表皮と内部の区別	頭部粘土	四肢粘土	コア	刺突	刺突を埋める
1556	0	－	1	0	0	0
1557	0	0	1	0	1	0
1558	0	0	1	0	1	0
1559	0	0	0	?	1	0
1560	－	－	－	0	?	0
第 108 図 11	0	0	1	0	1	0

イヌの頭部であり、目、鼻、口が刺突で表現されている(第 5 図 a～f)。耳は粘土を貼り付けて表現されており、耳から後頭部にかけて別の粘土を付けて作りだしているため、粘土間の隙間が認められる(第 5 図 j・k)。首よりも下が欠損しているものの、口からの穴が、それ以前に尻から穿たれた体部の穴と繋がっていることが分かる(第 5 図 l)。胎土には細かな砂粒が多く、粘土内の隙間も目立つ(第 5 図 g・h・j)。

(6) 角間遺跡 108-11(長さ 53.4 mm、幅 18.2 mm、高さ 20 mm) イヌ、クマ、イタチ？(第 6 図)

四足と尻部が欠損しているが、顔や体の表現が認められ、表面調整が丁寧な土製品である(第 6 図 a～f)。イヌかクマ、あるいはイタチなどの可能性があるが、イノシシではないことは確かである。小型品であるものの、尻から幅 1 mm 程の穴が深さ 22 mm に達する(第 6 図 m・n)。口からの穴は外面からは明らかではないが、CT 像によれば深さ 9 mm に達し、比較的深い(第 6 図 p)。鼻や目の穴も深さ 5 mm 程であり、決して浅くはない。口と鼻、尻の穴は幅 1 mm と同じであり、同じ道具が使われていると考えられる。目を表現している窪みを見ると、筒状の道具を使ったことが分かる(第 6 図 k)。胎土には細かな砂が多く含まれている(第 6 図 i・j)。粘土内には隙間が多い(第 6 図 g・h)。

## 4 まとめ

本研究の対象資料の特徴は、動物の目、耳、鼻、口の表現される割合が高いこと、尻穴の施される割合が高いことである(表 1)。粘土の整形法では、頭と体、尾、表皮を区別することは無く、基本的に四足のみが別粘土を貼り付けて、成形されている(表 2)。沼津貝塚や十腰内遺跡で確認されたようなコアは認められず、1 例(荒小路 1559)のみコアと呼ぶことが可能な別物体が体内の中央に認められた。このような分析結果から、動物形土製品の内部構造は地域や遺跡によって違いがある可能性が浮上した。一方で、意識的に尻からの穿孔が認められる等の共通点も確認できた。尻穴については、前報で依代としての機能を強化することを目的として施されたと推定している。すなわち、尻穴は魂や精霊の通り道であり、依代への出入を容易にする機能を有したと推定される。また、口から尻への穴が貫通する場合と、貫通しない場合がある。穴が無い場合もあり、宮城県沼津貝塚においても各種が共存していた。このような各種の穿孔の違いが動物形土製品の具体的な機能の相違を反映していた可能性がある。さらにこうした共通点の広がりや、当時の動物儀礼や觀念の地域圏を反映している可能性が高く、より広域の比較や通時的な比較が期待される。

## 謝辞

本論の執筆にあたり、東北大学大学院文学研究科考古学研究室、東北大学総合学術博物館、福島県文化財センター白河館ならびに藤澤敦氏には資料利用や分析機器の利用に際して格別のご配慮を賜りました。記して謝意を表します。

## 【引用参考文献】

- 勝川若奈・福田秀生2023「収蔵資料の非破壊構造調査」『福島県文化財センター白河館研究紀要』21, 1-10.
- 勝川若奈・佐藤瑠子2024「2023年度の収蔵資料の非破壊構造調査」『福島県文化財センター白河館研究紀要』22, 31-40
- 福田秀生2024「筑内古墳群37号横穴出土鉄地金銅張杏葉のX線CT構造調査」『福島県文化財センター白河館研究紀要』22, 41-46
- 鹿又喜隆・鹿納晴尚・イワノワダリア2024「X線CTを用いた動物形土製品の内部構造の解析による製作法と儀礼行為の復元」『動物考古学』第41号, 1-17
- 福島県教育委員会1985『母畑地区遺跡発掘調査報告19』福島県文化財調査報告書148
- 福島県教育委員会1990『東北横断自動車道遺跡調査報告8』福島県文化財調査報告書240



# レプリカ法による福島県前田遺跡出土の縄文土器圧痕の同定（2）

佐々木 由香 (金沢大学古代文明・文化資源学研究所)	小久保 竜也 (東京大学大学院)	杉本 亘 (千葉大学大学院)
蒲生 侑佳 (明治大学大学院)	富高 直人 (東京大学大学院)	黒住 耐二 (ウルマ自然史研究所)
三浦 武司 (福島県文化振興財団)	中野 幸大 (同)	本間 宏 (同)

## 要 旨

福島県前田遺跡から出土した縄文時代中期後葉から晩期の土器を対象に、種実や昆虫などの圧痕を探索し、レプリカ法により圧痕のレプリカを採取して同定を行った。この結果、予想を上回る量の種実や昆虫の圧痕などが得られたため、中間報告として調査成果を報告する。本稿は2024年に報告した続報となる。前報と同様、縄文時代中期から後期を中心にダイズ属やアズキ亜属などの種実とコクゾウムシ属の昆虫圧痕などが確認され、新たに後期前葉の土器にミズキや、後期の可能性がある土器にアサ、晩期の可能性がある土器にアワの多量圧痕土器が確認された。南東北地方でも長期間継続する集落において関東・中部地方と同様の種実と貯穀害虫がセットで確認できた。

## キーワード

土器圧痕 レプリカ法 縄文時代中期～晩期

## 1 はじめに

レプリカ法による土器圧痕分析により、土器づくりの場に存在していた種実や昆虫を同定することで当時利用していた植物や土器づくりの環境が明らかになりつつある。しかし、南東北地方の縄文土器を対象とした圧痕調査は低調であった。

このため、福島県伊達郡川俣町に位置する前田遺跡を対象として縄文時代中期後葉から晩期末葉までの土器圧痕調査を実施し、当時の植物利用や土器づくりの環境を検討してきた(佐々木ほか2024)。圧痕調査は、大学生と大学院生を中心に4回に分けて実施しており、本稿では前回報告していなかった3回目的一部と新たに4回目の調査で得られた結果をその(2)として報告する。

なお、2調査に至る経緯、7おわりには三浦が、貝類についての記載と考察は黒住が、その他は佐々木が主に執筆した。調査土器数は蒲生が計数した。遺物の写真撮影やレプリカの走査電子顕微鏡写真撮影、図版作成は小久保と杉本が担当した。圧痕土器の型式認定は、前田遺跡の令和5年度の整理作業を担当した公益財団法人福島県文化振興財団(以下、財団と呼称する)の三浦・中野・本間が担当した。

## 2 調査に至る経緯

前田遺跡の発掘調査は、平成30(2018)年度の1次調査から令和3(2021)年度の4次調査までの4か年に福島県教育委員会に委託された財団が実施した。調査が終了した現在は、発掘調査報告書の刊行に向けて整理作業を進めている。

令和元(2019)年6月に福島県教育庁文化財課より外部の学識者や有識者などの指導、助言を受ける旨の通知文が発出された。その通知を受け有識者を招聘し、発掘調査・整理作業ともに、さまざまな自然科学分析を導入して前田遺跡の古環境や生活などの解明に努めている。その一環としてのレプリカ法による縄文土器の圧痕同定を行っている。出土土器の整理作業が進展してきた令和5(2023)年に科学研究費を用いて調査を行った。この成果については、『福島県文化財センター白河館研究紀要 第22号』に「レプリカ法による福島県前田遺跡出土の縄文土器圧痕の同定」として報告しており、本報告はその続編となるものである。両報告をもって、圧痕同定調査結果の速報を完結するものとする。



### 3 前田遺跡の概要

前田遺跡は、広瀬川支流の高根川に面した段丘面に立地する、縄文時代中期後葉から晩期末葉まで人間活動の痕跡が断続的に確認された遺跡である。中期後葉と末葉、後期前葉には居住域が伴い、多量の遺構と遺物が出土した。特に中期後葉から末葉には、流路跡から木製品や漆器、編組製品など、多量の植物性遺物が出土している。中期後葉から後期前葉には埋設土器や集石、配石遺構が確認された。

### 4 資料と方法

#### （1）調査対象資料

調査対象は、報告書掲載予定の遺構内から出土した土器全点である。調査は、前報分も含め令和5（2023）年の連続する2日間で合計4回実施した（第1図）。併行して、報告書掲載予定の遺物包含層から出土した土器の中で、財団により整理事業過程で抽出した種実様の圧痕が確認された土器も対象とした。報告書掲載予定の土器は前報同様に悉皆的に調査し、圧痕探索を行った点数を記録した。圧痕の探索を行った時点で接合や個体復元されていた土器があったため、未接合の破片と、接合された破片、復元個体のそれぞれを1点として計数し、圧痕探索土器の総点数を算出した（第2図）。

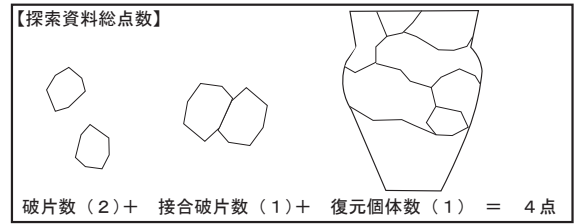
第4回の調査で対象とした遺構内出土資料は、竪穴住居跡(SI)とピット(P)から出土した土器で、探索資料総数は994点である。

#### （2）調査方法

土器圧痕調査の流れを第3図に示す。資料点数をカウント後、土器の外表面と内面、断面から圧痕を目視と拡大鏡を使用して探索した。圧痕が確認された場合、水と筆で圧痕内部の洗浄を行って実体顕微鏡



第1図 土器圧痕調査の調査風景

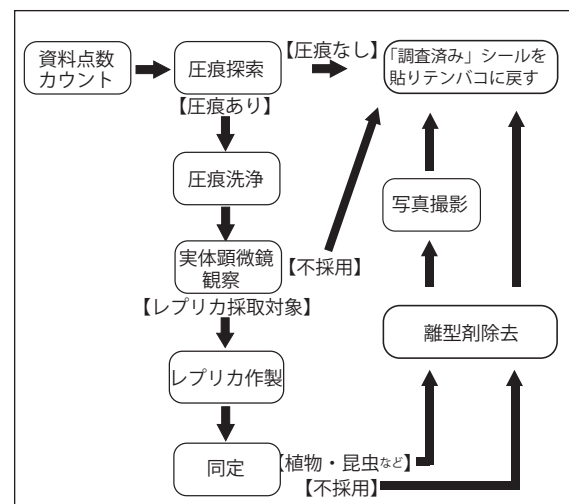


#### 第2図 圧痕調査対象土器の計数方法<sup>註1</sup>

で確認した。大きさや形から種実などの可能性がある」と判断した圧痕について、丑野・田川(1991)を参考にしてレプリカを作製した。レプリカの作製にあたっては、まず圧痕内を水で洗い、パラロイド B72 の9%アセトン溶液を離型剤として圧痕内および周辺に塗布した後、シリコン樹脂(JM シリコン レギュラータイプもしくはインジェクションタイプ)を圧痕部分に充填した。レプリカ作製後は、アセトンを用いて圧痕内および周囲の離型剤を除去した。

同定は、最初に実体顕微鏡下でレプリカを観察し、同定の根拠となる部位が残っている試料を抽出した。遺構内出土の土器圧痕には MED-001 から番号を付し、遺物包含層出土の土器圧痕には MED-101 から番号を付した。本稿は続報となるため、遺構内出土土器圧痕は MED-063 から、遺物包含層出土土器圧痕は MED-148 からの番号を付した。

次に、特徴的な圧痕のレプリカについて、走査電子顕微鏡(KEYENCE 社製 超深度マルチアングルレンズ VHX-D510)で写真撮影と計測を行った。レプリカは、明治大学黒耀石研究センター植物考古学研究室に保管されている。



第3図 土器圧痕調査の流れ<sup>註2</sup>

## 5 同定結果

作製した74点の圧痕レプリカのうち、部位不明の6点を除くと60点が何らかの種実や昆虫などの圧痕と同定された。遺構内出土土器からは14点、遺物包含層出土土器からは46点得られた。

同定の結果、木本植物ではキハダ種子とサンショウ種子、ミズキ果実の3分類群、草本植物ではアワしょうすい小穂(？を含む)・有ふ果・穎果とダイズ属(？を含む)種子・子葉、ヌスビトハギ属果実、ササゲ属アズキ亜属(以下、アズキ亜属)種子、マメ科(？を含む)種子、アサ核、キク科(？を含む)果実の7分類群の、計10分類群が得られた(表1)。

残存が悪く科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明種実とし、AからFまでタイプ分けした。そのほか、同定可能な部位が残存していない不明種実？、不明堅果(？を含む)果皮・子葉、棒状、木材(？を含む)、ヘギ材かんの稈と、何らかの有機物の可能性のあるものの部位不明な圧痕があった。

昆虫ではコクゾウムシ属、貝類ではヒメコハクガイ類似種が得られた。

種実の分類群ごとの産出数(不明は除く)は、アワ小穂(？を含む)・有ふ果・穎果が合わせて19点、ダイズ属種子・子葉が合わせて2点、ヌスビトハギ属種子とササゲ属アズキ亜属種子が各2点のほかは、すべて1点ずつであった。昆虫では、コクゾウムシ属が2点得られた。

一個体の土器から多量の種実が検出された例はアワのみで、同一個体から19点の圧痕が認められた。同じ土器から得られた構造が不明瞭のため不明種実とした4試料も、大きさや内部が炭化している点からアワ穎果の可能性はある。

以下、時期別に得られた圧痕の種類を概観する(一部は表2、全体は表3に記載)。

縄文時代早期後半の条痕文土器からは、不明の圧痕1点のみで、明瞭な種実圧痕は得られなかった。

中期後葉(大木9式期)では、不明稈やコクゾウムシ属などが得られた。稈は、断面から円形の植物が割られて表皮側を残して内面が削がれた形態を呈する。編組製品の素材など、素材を割って不要な内面側を削いだ材料の屑などが粘土に混ざった可能性がある。

表1 前田遺跡出土土器圧痕の同定結果<sup>註3</sup>

分類群	部位	産出数
キハダ	種子	1
サンショウ	種子	1
ミズキ	果実	1
不明堅果	果皮	1
	子葉	1
不明堅果？	果皮	2
	子葉	2
アワ	小穂	2
	小穂？	3
	有ふ果	5
	穎果	9
不明	種実 (アワ穎果？)	4
ダイズ属	種子	1
	子葉	1
ダイズ属？	種子	1
ヌスビトハギ属	果実	2
ササゲ属アズキ亜属	種子	2
マメ科	種子	1
マメ科？	種子	1
アサ	核	1
キク科	果実	1
キク科？	果実	1
コクゾウムシ属	-	2
ヒメコハクガイ類似種	巻貝	1
不明A	種実	1
不明B	種実	1
不明C	種実	1
不明D	種実	1
不明E	種実	1
不明F	種実	1
不明	種実？	1
	棒状	1
	木材	2
	木材？	1
	稈 (ヘギ材)	2
不明	部位不明	6
合計		66

中期末葉(大木10式期古段階)では、ダイズ属？、アズキ亜属、貝類のヒメコハクガイ類似種などが確認された。大木10式期新段階では同定できた種実はなく、不明堅果？子葉のみであった。

後期初頭の土器では、キハダとキク科？など、後期前葉ではサンショウとコクゾウムシ属、綱取Ⅰ式の可能性がある土器からはミズキが確認された。後期ではダイズ属とヌスビトハギ属、マメ科(？も含む)など、後期の可能性がある土器からは、ダイズ属とアサなどが得られた。

晩期中葉では、不明の圧痕2点得られた。晩期の可能性がある土器からは、1破片からアワが複数得られた。アワは深鉢の可能性がある土器の胴部外面から19点得られ、小穂(？も含む)が5点、有ふ果が5点、穎果が9点であった。この他に、レプリカでは同定できなく不明種実としたが、アワ穎

果と同様の大きさの凹みが4点確認できた(第8図34)。これら以外に種実ではない圧痕が5点あった。

前報も含めて検討すると、ダイズ属は縄文時代中期後葉(大木9式期)から後期前葉(綱取Ⅱ式期)、アズキ亜属も同様に中期後葉(大木9式期古段階)から後期前葉(綱取Ⅱ式期古段階)に確認されており(前報6頁17行目 後期末葉とした記載は誤り)、細別型式に分けると数は少ないものの、断続的に確認された。マメ類に伴うように、コクゾウムシ属も縄文時代中期後葉(大木9式期古段階)から後期前葉(綱取Ⅰ式期)まで確認できた。シソ属は少なく、中期末葉(大木10式期古段階)と晚期中葉(大洞C<sub>2</sub>式期)に確認された。今回、新たに見出された注目される分類群として、詳細時期不明な後期の土器に中央アジア原産のアサが確認された。

次に、確認された分類群について形態記載を行い、第9図から第15図に走査電子顕微鏡写真を示して同定の根拠とする。また、圧痕が検出された土器の全体写真と圧痕部の拡大写真を第4図から第8図に示す。記載は前報で報告した分類群は省略する。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1) ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ex Prain 果実 ミズキ科

歪んだ球体で、表面は緩やかな凹凸がある。下端は平坦で、中央に円形で縁が隆起する臍がある。

(2) 不明堅果 / 不明堅果? Unknown acon / Unknown acon? 果皮・子葉

大型で一定の均質な厚さがあり、湾曲を持つ破片を不明堅果果皮、不定形な大型で湾曲した構造を持つ一群を不明堅果子葉とした。No. 153の果実表面は平滑で、内面に臍のような微隆起がある。No. 77の子葉は4分の1程度に割れた破片である。大きさが小さいなど、不明瞭な一群は不明堅果?とした。

(3) アワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. 小穂・小穂? 有ふ果・穎果 イネ科

小穂は、紡錘形。縦溝が数条あり、基部に菱形の第一苞穎が残存している個体もある。縦溝や第一苞穎が残存していない個体は小穂?とした。有ふ果は、紡錘形。内穎と外穎に独立した微細な乳頭状突起がある。アワの場合、外穎の乳頭状突起は直径8-15 $\mu$ mで小さく、その基部が畝状に盛り上がるこ

とはない。一方、エノコログサ属の場合は乳頭状突起の直径が15-20 $\mu$ mで大きい場合が多く、その基部は畝状に盛り上がる。穎果の上面観は楕円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、胚の長さは全長の3分の2程度。

(4) ヌスビトハギ属 *HyIodesmum* sp. 果実 マメ科

半月形で、表面には不規則な脈が走り、細かい網目がある。縁はやや肥厚する。

(5) マメ科 / マメ科? Fabaceae / Fabaceae? 種子

マメ科は上面観が楕円形で側面観は一辺が直線的な楕円形。臍は不明瞭。マメ科?は側面観が長楕円形で、片端は潰れている。臍は楕円形にあるが不明瞭。

(6) アサ *Cannabis sativa* L. 核 アサ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様があるが、圧痕では不明瞭。

(7) キク科/キク科? Asteraceae / Asteraceae? 果実 キク科

キク科は稜がある半月形。頂部が尖る。基部の中央は円形にやや突出する。メナモミ属の可能性がある。キク科?は上面観が扁平で、側面観は狭卵形、先端がやや尖る。中央部分がやや窪んでいる。

(8) ヒメコハクガイ類似種 *Hawaiiia* sp. cf. *minuscula* エゾエンザ科

殻は平巻。巻数は不明であったが3-4巻程度の中庸の螺総数。縫合は浅く窪む。臍孔<sup>へそあな</sup>は埋まってしまっており確実に確認できなかったものの、体層から臍孔にかけて緩やかにカーブしており臍孔は開いていた可能性が高く、臍孔は殻径の1/2程度に見える。体層は丸く、周辺は角張らない。殻表には螺肋・成長肋ともにほぼ確認できず、殻表は平滑。

(9) 不明A Unknown A 種実

上面観は楕円形か。側面観は本来の形は残存しておらず、不定形。側面中央の2分の1以上には、円形で縁に稜があり、中央に小さな突起のある臍がある。臍の周囲はやや窪み、臍から広い溝が伸びる。

(10) 不明B Unknown B 種実

表2 時期別の同定された圧痕数（不明は稈のみ記入）

分類群	部位	中期			後期			後期	晩期	合計
		後葉		末葉	初頭	前葉				
		大木 9 古	大木 9	大木 10 古	一	一	綱取 I			
キハダ	種子				1					1
サンショウ	種子					1				1
ミズキ	果実						1*			1
アワ	小穂								2*	2
	小穂？								3*	3
	有ふ果								5*	5
	穎果								9*	9
ダイズ属	種子							1		1
	子葉							1*		1
ダイズ属？	種子			1						1
ヌスビトハギ属	果実							1	1	2
ササゲ属アズキ亜属	種子			1 (1*)						2
マメ科	種子							1		1
マメ科？	種子							1		1
アサ	核							1*		1
キク科	種実			1						1
キク科？	種実				1					1
コクゾウムシ属	甲虫		1			1				2
ヒメコハクガイ類似種	巻貝			1						1
不明	稈	1	1							2
	合計	1	2	5	2	2	1	6	20	39

数字の横に\*がついている試料は該当期の可能性のある資料

上面観は楕円形で、側面観は広卵形。先端がわずかに尖り、下端は平坦で中央に円形に凹む小さな臍がある。背面は内湾する。表面はざらつく。ケンボナシ属の可能性はある。圧痕内部は炭化していた。

#### (11) 不明 C Unknown C 種実

上面観は中央が反るやや扁平な広三角形で、側面観は下端がやや尖る楕円形。下端中央に臍があり、上半部は残存していないと思われる。表面はざらつく。残存状態は悪いが、不明 B 種実に類似する。

#### (12) 不明 D Unknown D 種実

上面観は楕円形、側面観は卵形で、下端中央に円形の臍がある。不明種実の上面に夾雑物もしくは果皮が残っている。表面は平滑か。

#### (13) 不明 E Unknown E 種実

腹面は中央に縦溝があり、背面は内湾する。表面には凹凸がある。堅果子葉の破片の可能性はある。

#### (14) 不明 F Unknown F 種実

上面観は円形、側面観は狭長倒卵形で下端が尖る。昆虫や、動物の糞などの可能性もある。

#### (15) 不明 Unknown 種実？

レプリカが取れていないが、不定形で稜があり、種実の可能性はある。

#### (16) 不明 Unknown 稈

表面は平滑で、断面と内面側に縦筋が観察でき

る。イネ科などの単子葉の稈の破片である。

## 6 考察

### (1) 圧痕の検出数

前田遺跡から出土した縄文土器に確認された圧痕のレプリカを同定した結果、不明種実も含めて 51 点が種実の圧痕で、12 点がその他の植物、2 点が昆虫、1 点が貝類の圧痕であった。遺構内出土土器からは、種実 9 点、昆虫 2 点、遺物包含層出土土器からは、種実 42 点、貝類 1 点が得られた。遺構内出土土器ではサンショウなどの小型の種実圧痕が見出されたのに対し、遺物包含層土器からは多量種実圧痕土器のアワを除いてダイズ属などの比較的大型の種実圧痕が多く、小さな種実が少なかった。この要因として、前者は圧痕の抽出を目的として土器を観察したのに対し、後者は土器の分類・接合作業中に都度認識した土器圧痕を抽出したためと考えられる。

今回は報告書掲載土器と、未掲載土器で整理作業中に目視で確認された種実様の圧痕のみを対象としたため、遺跡から出土した土器の全点は確認できなかったが、多数の圧痕が確認できた。土器破片の接合作業済の土器を対象としたため、接合前に行えば、さらに圧痕の検出数が多かったと想定される。



今後、他遺跡でも出土土器の整理作業に土器圧痕の探索作業が加われば、より時空間的に利用植物や土器づくりについての検討が可能となると考えられる。

## （2）特徴のある種実・昆虫圧痕

種実圧痕は、食用などとして利用可能な分類群が多く、キハダやサンショウ、ミズキ、アワ、ダイズ属、アズキ亜属、マメ科、アサが確認され、これらの植物が利用されていた可能性がある。キハダやミズキは薬用などの利用も可能である。このほか、ヌスビトハギ属やキク科はいわゆる「ひつつき虫」で、人間に伴って土器作りの場に持ち込まれ、土器の乾燥前までのどこかの段階で粘土や胎土に入り込んだ可能性がある。

那須(2018)によると、ダイズの野生種であるツルマメ種子の現生の最大長は10mm、アズキの野生種であるヤブツルアズキ種子の現生の最大長は7mmである。今回確認されたマメ類種子の圧痕で、全長が計測可能なダイズ属種子はなかったが、計測可能なアズキ亜属2点の大きさは、縄文時代中期末葉(大木10式古段階?)で長さ6.54mm(No. 156)、大木10式古段階で長さ5.45mm(No. 70)であった。前報で報告した中期後葉(大木9式)の2点のアズキ亜属はいずれも長さ3mm台と小さく、中期末葉(大木10式古段階)で最大の長さ8.65mm(No. 15)、後期前葉(綱取I式)で長さ7.41mm(No. 29)であった。このため、前田遺跡では大木10式期以降になると、現生のヤブツルアズキより大型の種子の圧痕が認められ、後期前葉までその傾向が確認された。

コクゾウムシ属の圧痕は、食料貯蔵を伴う定住性の高い集落遺跡の土器に確認される傾向が指摘されている(小畑2015)。住居跡が検出されている時期に確認されたコクゾウムシ属の圧痕は、定住性とそれに伴う貯蔵食物が存在した可能性を示唆する。またコクゾウムシは家屋害虫であり、土器づくりが屋内または貯蔵食物の近辺で行われたことを示唆する。前報でも大木9式期古段階でコクゾウムシ属が3点(？も含む)確認されており、前田遺跡では縄文時代中期後葉以降に貯蔵害虫が認められた。

巻貝はヒメコハクガイ類似種と同定した。日本列島に現在生息しているヒメコハクガイは移入種(＝外来種)の陸産貝類(カタツムリ)である。今回の類

似種も同属であり、陸産種で生息場所も類似していると考えられる。また、縄文時代の貝塚などから抽出される微小貝類でも、ヒメコハクガイ類似種が優占する場合が多く、遺跡周辺が草地のような開けた場所であったという古環境復元が行える(例えば黒住1994)。ヒメコハクガイ類似種は、微小陸産貝類であり、胎土の混入物として非意図的に土器圧痕となったと考えられる。土器製作の場が開けた屋外の空間であった可能性や、製作場所が屋内であった場合では風で微小カタツムリが運ばれてくるような空間であった可能性が考えられる。

時期が下って、縄文時代晩期の可能性がある土器からはアワの圧痕が多数確認され、栽培植物や穀類の導入時期を明らかにする上で重要な種実圧痕が見出された。無文の深鉢胴部破片のため、詳細な時期の判断は難しい。同一層から出土した土器からみると晩期と推測され、前報で大木A<sub>2</sub>式の土器にアワの圧痕が確認されていることから、同時期の可能性がある。今回アワが検出された土器は、1破片の外面のみにアワが得られており、断面や内面には確認できなかった。小畑(2015)による脱穀の実験では、脱穀後に有ふ果が多く、脱穀の方法によって小果穂や小穂、小軸付有ふ果、穎果が残存すると指摘している。今回、小穂や有ふ果、穎果とさまざまな部位が確認されており、脱穀後の様相を示しているかもしれない。今後、胎土内部にもアワ圧痕が残存するかを検討する必要がある。

## （3）前田遺跡の土器圧痕の特徴

前田遺跡では、報告書掲載資料のうち約1000点の土器から、多種類の有用植物や昆虫の圧痕が見出された。特に、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけて多数の有用植物と貯蔵害虫であるコクゾウムシ属が断続的に確認された。先述した圧痕組成は、既往研究では関東地方と北陸地方、中部地方の土器にしか確認できていなかったが、南東北地方でも前田遺跡のように長期間継続する集落では、マメ類とシソ属、コクゾウムシ属が伴い、栽培植物のアサが含まれ、キハダやサンショウ、ミズキ、ニワトコなどの漿果類が伴うといった重要な成果が得られた。また、中期末葉の貝類圧痕で同定されたヒメコハクガイ類似種は、土器圧痕から貝塚を持たない遺跡での貝類利用の一端が明らかにできる可能性を示唆す

る。さらに晩期の可能性がある土器には前報に続いてアワが確認され、1個体に多量に含まれており、穀物導入時期についても成果が得られた。

## 7 おわりに

前報も含め、本報告においても圧痕調査における新たな発見があった。本報告で指摘された多数の有用植物と貯穀害虫が確認できる縄文時代中期後葉から後期前葉は、前田遺跡の住居が増加して盛行する時期と一致し、木胎漆器を含む木製品および漆塗土器が製作(廃棄)された時期にもあたる。漆製品は、定住生活を中心とした安定的な生活を背景とした暮らしを反映したものと考えられ、土器圧痕の調査結果もこのことの証左となる。

また、複数のアワの圧痕が認められた晩期の土器(おそらく胴部)や、胎土に巻貝圧痕が認められた中期の土器の発見は、縄文土器研究への新たな課題提起となった。

土器圧痕分析は、前田遺跡周辺の古環境そして縄文時代の植物資源利用の解明に寄与できる調査方法である。本調査の内容は発掘調査報告書に掲載予定であるが、福島県教育庁文化財課のご許可を得て、福島県の縄文時代研究に貴重な情報を提供できる資料であることから、先行して報告した。

なお、本報告の記載内容については発掘調査報告書の作成途中であり、速報的な内容である。記載事項に修正等があった場合は、発掘調査報告書で修正することとしたい。

本研究には、JSPS 科研費 JP20H05811「土器に残る動植物痕跡の形態学的研究」(代表 佐々木由香)および JP23H03907「本州島北部における狩猟採集から農耕への移行過程の実態解明」(代表 菊地芳朗)の一部を使用した。貝類の同定にあたり、西野雅人氏にお世話になった。記して感謝したい。

## 【註】

- 註1 佐々木ほか2024を一部改変  
註2 佐々木ほか2024を一部改変  
註3 第3・4回調査分

## 【引用参考文献】

- 丑野毅・田川裕美1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24, 13-36.  
小畑弘己2015「脱穀・風選実験と現生果実の形態比較に基づくアワ土器圧痕の母集団の推定」『植生史研究』23-2, 43-54.  
小畑弘己2016『タネをまく縄文人—最新科学が覆す農耕の起源—』217. 吉川弘文館  
小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子2007「土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培」『植生史研究』15-2, 97-114.  
黒住耐二1994「柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体」『上高津貝塚A地点』慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報9, 291-317, 3 pls.  
佐々木由香・小久保竜也・杉本亘・蒲生侑佳・富高直人・三浦武司・中野幸大・本間宏2024「レプリカ法による福島県前田遺跡出土の縄文土器圧痕の同定」『まほろん研究紀要』第22号, 1-30  
那須浩郎2018「縄文時代の植物のドメスティケーション」『第四紀研究』57, 109-126.  
米倉浩司・梶田忠(2003-) BG Plants 和名-学名インデックス(YList), <http://ylist.info>

## 【前田遺跡土器圧痕調査参加者】

- 第4回目(2023年12月26日・27日)  
佐々木由香(金沢大学)・蒲生侑佳(明治大学大学院)・小久保竜也・富高直人(以上東京大学大学院)・杉本 亘(千葉大学)・小池咲菜・丹野美夢(以上昭和女子大学)・鶴巻駿平・伊藤冨恵・笹原結花・鈴木優介(以上福島大学)・井沢志隠(松本大学)、以上12名

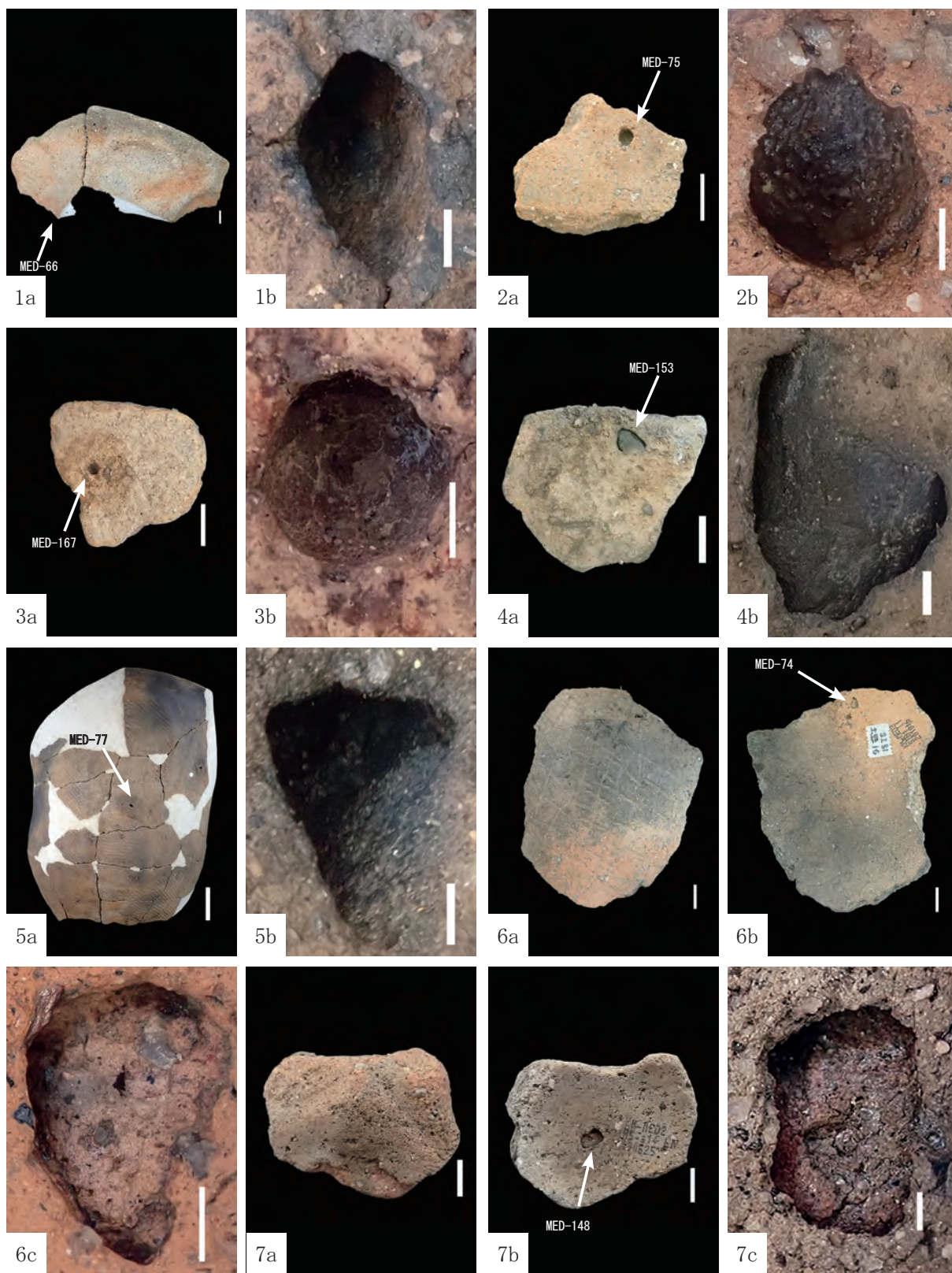
## レプリカ法による福島県前田遺跡出土の縄文土器圧痕の同定（２）

表３ 前田遺跡出土資料の圧痕レプリカー一覧（括弧は破片値を示す、大きさの単位はmm）

圧痕 No.	調査年度・遺構・層位	器種	採取 位置	圧痕 位置	同一個体 採取 No.	時期	型式	同定結果	部位	長さ	幅	厚さ	備考
63	S170	深鉢	口縁部	外面	1	中期末葉	大木 10 古	キク科	果実	(3.39)	1.78	(1.38)	
64	N7aP22	深鉢	口縁部	内面	1	中期後葉	大木 9 新	×		(2.16)	(1.82)	(1.49)	
65	S13	深鉢	胴部	外面	1	後期初頭	—	キク科？	果実	4.39	1.96	(0.81)	
66	S1110	深鉢	底部	外面	1	後期初頭	—	キハダ	種子	5.37	2.03	(3.57)	
68	S181	深鉢	底部	内面	1	後期前葉	—	コクゾウムシ属	—	4.20	1.50	1.14	LB:3.67, LT:0.70, LE:2.97
69	S115	鉢	胴部	外面	1	晩期中葉	大洞 C <sub>2</sub>	不明		(1.50)	(1.52)	(1.38)	
70	N6dP19	深鉢	胴部	外面	1	中期末葉	大木 10 古	ササグ属アズキ亜属	種子	5.45	3.26	2.63	
71	S191	深鉢	底部	外面	1	後期初頭	—	不明	種実？	(2.72)	(1.84)	(1.87)	
72	S112	深鉢	胴部	内面	1	中期後葉	大木 9	不明	稗（ヘギ材）	(9.08)	3.05	0.73	
73	S177	浅鉢	胴部	断面	1	中期末葉	大木 10 新	不明	木材	(6.06)	(2.75)	0.90	板状
74	S181	深鉢	胴部	内面	1	後期前葉	網取 I	不明堅果？	果皮	(3.63)	(3.38)	0.60	
75	N7bP21	深鉢？	胴部	外面	1	後期前葉	—	サンショウ	種子	3.88	3.07	2.60	
76	N6dP19	浅鉢	胴部	断面	1	晩期中葉	大洞 C <sub>1</sub> ~ C <sub>2</sub>	不明		(2.58)	(4.02)	0.49	
77	L5bP1 ① 1	深鉢	胴部	外面	1	中期末葉	大木 10 古	不明堅果	子葉	(7.31)	(4.44)	(2.56)	
78	S145	深鉢	胴部	内面	1	中期後葉	大木 9	コクゾウムシ属	—	3.57	1.50	1.18	LB:3.57, LT:0.82, LE:2.45
79	P224	深鉢	胴部	外面	1	晩期	—	不明		(1.79)	(1.24)	(1.27)	
80	O6P9	深鉢	胴部	外面	1	晩期	—	ヌスビトハギ属	果実	(4.94)	(3.10)	1.22	
82	S1109	深鉢	胴部	外面	1	後期初頭	—	不明	木材？	(4.29)	(2.69)	0.69	
148	KM-MED2 H5-a14 L IV	—	胴部	内面	1	中期後葉	大木 9 古	不明堅果？	果皮	(6.90)	(5.33)	0.61	
149	KM-MED3 M5-L III B ④	深鉢	口縁部	外面	1	中期末葉	大木 10 古	ヒメコハクガイ類似種	巻貝	5.57	4.96	1.75	
150	KM-MED2 M7-a L III A ③	小型土器	胴部	断面	1	中期末葉	大木 10 古	不明	棒状	—	—	—	
151	KM-MED3 M5-b L III C	—	—	内面	1	早期後半	条痕文土器	不明		(9.57)	(5.29)	3.71	No.141 と同一個体。オーバーハングで不定形。表面は平滑。不規則な凹凸。
152	KM-MED2 M6-d L III A ③	深鉢	胴部	断面	1	中期末葉	大木 10 古	ダイズ属？	種子	(5.76)	(3.40)	(2.65)	
153	KM-MED I4 L IV	—	—	内面	1	後期？	—	不明堅果	果皮	(4.75)	(5.37)	0.37	
154	KM-MED2 I4-b9 L IV	—	—	外面	1	後期？	—	不明		(7.30)	(5.55)	0.93	
155	KM-MED2 M5-d L III A ②	深鉢	胴部	外面	1	中期末葉	大木 10 新	不明堅果？	子葉	(7.17)	(3.50)	(4.20)	1/4 割れ
156	KM-MED3 M5-c L III B	—	口縁部	外面	1	中期末葉	大木 10 古？	ササグ属アズキ亜属	種子	6.54	3.89	2.97	
157	KM-MED3 M4-c L III B	深鉢	胴部	内面	1	後期	—	マメ科？	種子	(4.03)	1.68	1.33	
158	KM-MED2 H5-a12 L IV	深鉢	口縁部	内面	1	中期後葉	大木 9？	不明	木材	—	—	—	割れ
159	KM-MED I4 L III D	深鉢	口縁部	外面	1	中期末葉	大木 10	不明 A	種実	4.43	2.08	1.91	
160	KM-MED3 M5-d L III B ⑤	深鉢	胴部	内面	1	中期末葉	大木 10 古	×		—	—	—	
161	KM-MED1 I5 L III	深鉢	胴部	外面	1	後期前葉	—	×		(2.76)	(2.34)	(1.92)	
162	KM-MED I5 L II	深鉢	胴部	内面	1	中期末葉	大木 10	不明 B	種実	4.83	(3.47)	2.38	内面炭化
163	KM-MED I5 L III	？	胴部	外面	1	後期	—	ダイズ属	種子	(6.42)	(4.23)	(2.91)	
164	KM-MED1 I5 L III	深鉢？	胴部	外面	1	後期	—	ヌスビトハギ属	果実	5.94	3.18	2.28	
165	KM-MED I5 L III B	深鉢	胴部	内面	1	中期後葉	大木 9 古	不明 C	種実	(4.52)	(4.03)	(1.57)	
166	KM-MED I5 L III	？	胴部	内面	1	後期	—	マメ科	種子	3.99	2.63	1.91	
167	KM-MED I5 L III	？	胴部	外面	1	後期前葉	網取 I？	ミズキ	果実	2.86	2.71	(2.52)	
168	KM-MED I5 L III	？	胴部	内面	1	後期？	—	アサ	核	(2.48)	3.04	2.61	
169	KM-MED I5 L III	深鉢？	胴部	外面	1	後期前葉	網取 I	不明 D	種実	(2.74)	(2.46)	(2.36)	内面炭化
170	KM-MED I5 L III	深鉢	胴部	外面	1	中期後葉	大木 9 古	不明	稗（ヘギ材）	(6.20)	2.34	0.33	
171	KM-MED1 I5 L III	深鉢	胴部	外面	1	後期？	—	ダイズ属	子葉	7.40	4.24	1.59	
172	KM-MED I5 L III 18.10.10	深鉢	胴部	外面	1	後期？	—	不明 E	種実	(2.90)	(2.19)	(1.89)	
173	KM-MED I5 L III	深鉢	胴部	外面	1	後期	—	不明 F	種実	4.90	1.92	1.72	
174	KM-MED I5 L III	深鉢	口縁部直下	外面	1	後期	—	不明		(7.02)	(5.03)	0.52	
175	KM-MED I5 L III	深鉢	胴部	外面	1	後期前葉	網取 I	不明堅果？	子葉	(7.78)	(5.24)	—	果皮付き
176	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	1	晩期？	—	アワ	有ふ果	1.67	1.46	(1.06)	
177	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	2	晩期？	—	アワ	有ふ果	(1.61)	1.53	(0.78)	
178	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	3	晩期？	—	アワ	顕果	(1.29)	1.06	(0.80)	
179	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	4	晩期？	—	不明	種実	(1.31)	1.41	(0.80)	アワ顕果の可能性あり
180	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	5	晩期？	—	不明	種実	1.46	(1.28)	(0.95)	アワ顕果3個の可能性
181	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	6	晩期？	—	アワ	有ふ果	1.43	1.38	(0.77)	
182	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	7	晩期？	—	アワ	小穂	1.62	1.27	(0.82)	
183	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	8	晩期？	—	×		—	—	—	
184	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	9	晩期？	—	×		—	—	—	
185	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	10	晩期？	—	アワ	小穂	(1.86)	1.32	(0.70)	
186	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	11	晩期？	—	アワ	小穂？	(1.44)	(1.30)	(0.48)	
187	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	12	晩期？	—	アワ	顕果	1.45	(1.11)	1.28	
188	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	13	晩期？	—	不明	種実	1.30	1.27	(0.68)	アワ顕果が変形した可能性
189	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	14	晩期？	—	不明	種実	1.09	(1.11)	(0.74)	
190	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	15	晩期？	—	アワ	顕果	1.60	1.58	(1.03)	アワ顕果の可能性あり
191	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	16	晩期？	—	アワ	顕果	1.35	(1.14)	(0.97)	
192	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	17	晩期？	—	アワ	小穂？	(0.89)	(0.66)	(0.55)	
193	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	18	晩期？	—	アワ	顕果	1.34	1.32	(0.77)	
194	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	19	晩期？	—	×		—	—	—	
195	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	20	晩期？	—	アワ	小穂？	1.56	(1.10)	(0.89)	
196	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	21	晩期？	—	アワ	有ふ果	(1.60)	(1.35)	(0.99)	
197	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	22	晩期？	—	アワ	顕果	1.21	(1.10)	1.06	
198	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	23	晩期？	—	アワ	顕果	1.25	1.46	(1.15)	
199	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	24	晩期？	—	アワ	有ふ果	(1.72)	1.50	(1.22)	
200	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	25	晩期？	—	アワ	顕果	1.05	(1.29)	(0.82)	アワ顕果が2個連結
201	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	26	晩期？	—	×		—	—	—	
202	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	27	晩期？	—	アワ	顕果	0.90	(0.80)	(0.55)	
203	KM-MED3 J5-C L III A ①	深鉢？	胴部	外面	28	晩期？	—	×		—	—	—	

※ No.67、81 は欠番





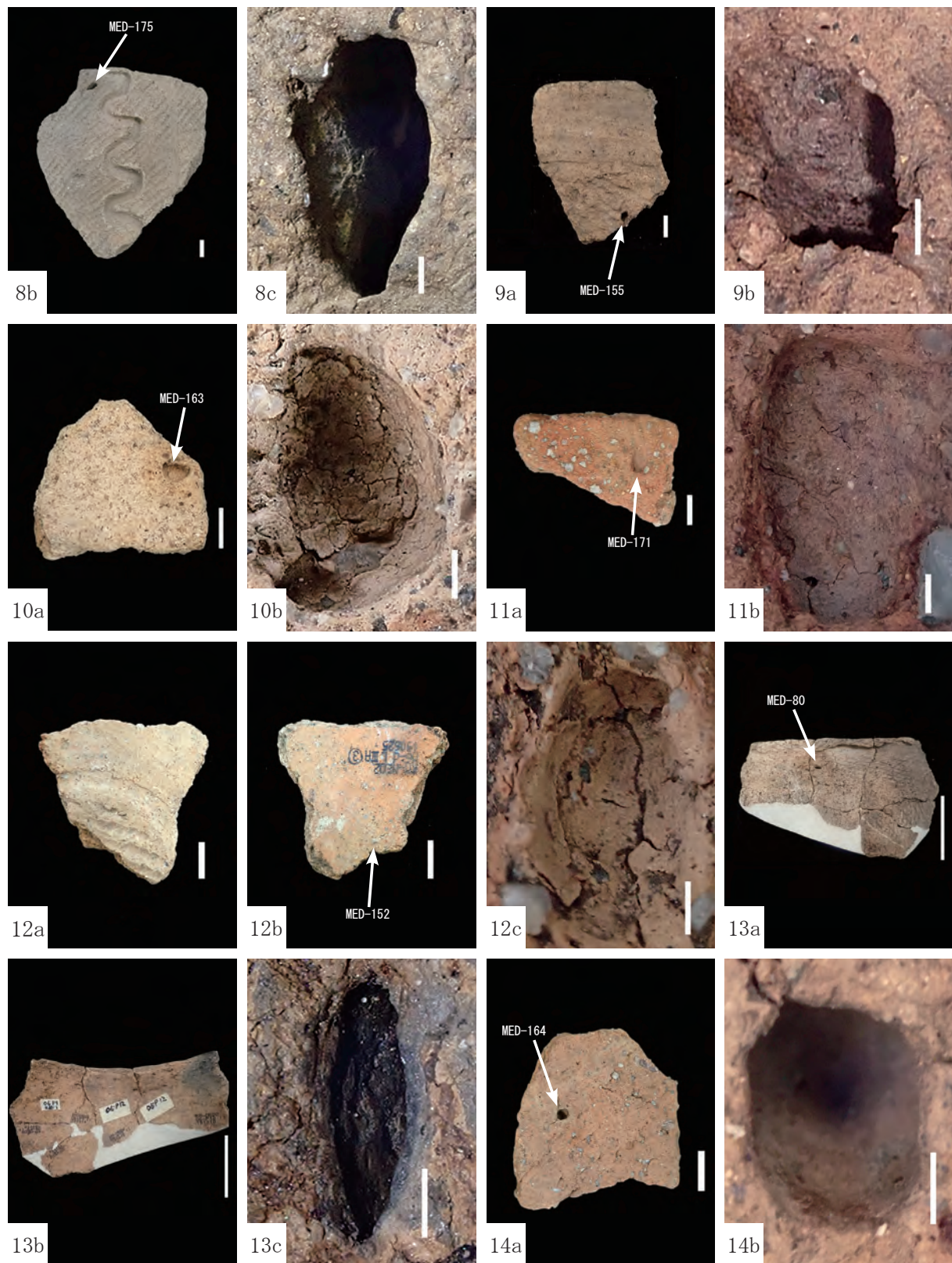
スケール 1b・2b・3b・4b・5b・6c・7c：1mm、1a・2a・3a・4a・6ab・7a・7b：10mm、5a：50mm

#### 第4図 前田遺跡出土の圧痕レプリカを採取した土器と拡大写真（1）

1. キハダ種子 (No. 66)、2. サンショウ種子 (No. 75)、3. ミズキ果実 (No. 167)、4. 不明堅果果皮 (No. 153)、5. 不明堅果子葉 (No. 77)、  
6. 不明堅果？果皮 (No. 74)、7. 不明堅果？果皮 (No. 148)

矢印は種実圧痕の位置





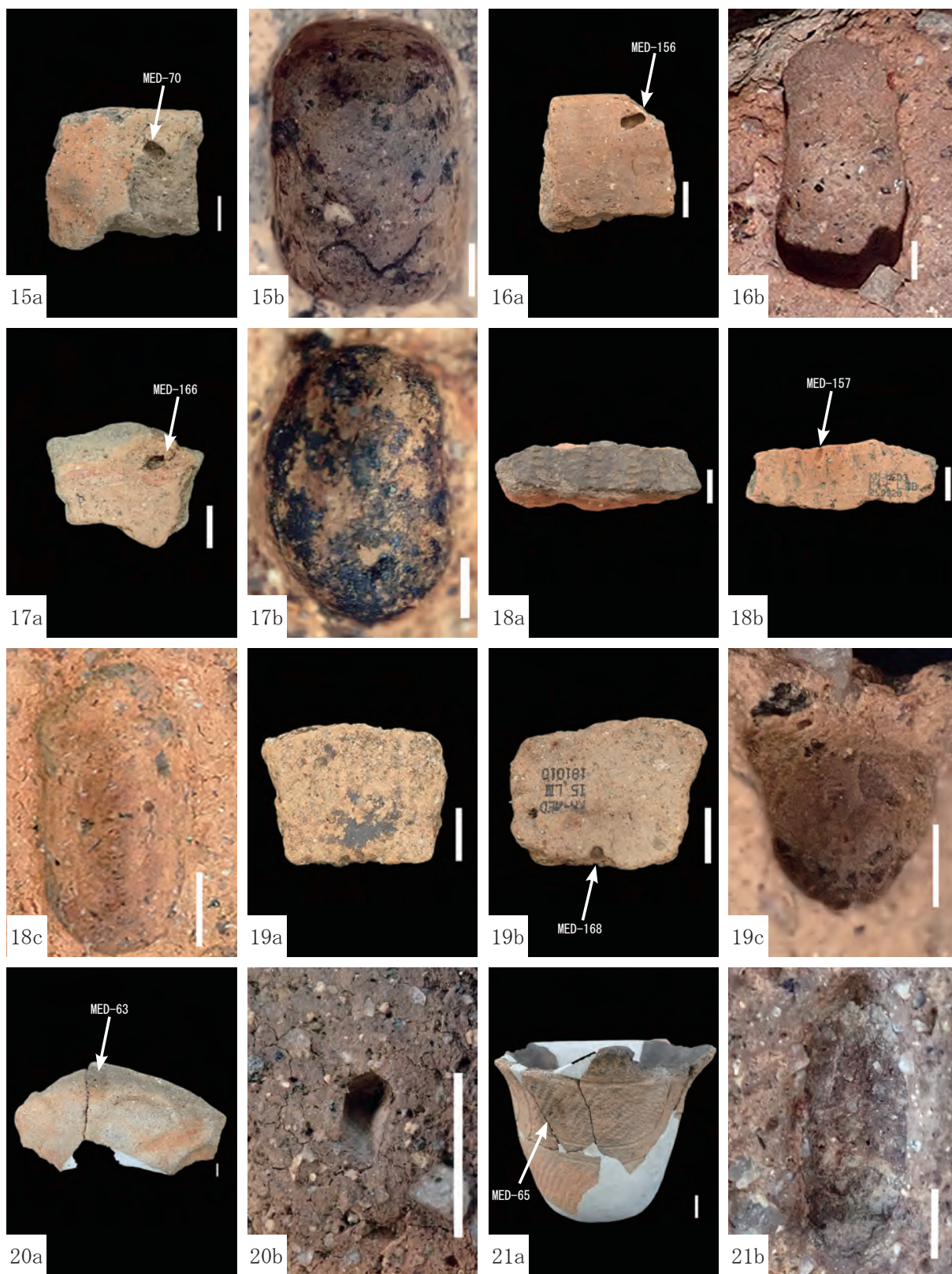
スケール 8b・9b・10b・11b・12c・13c・14b：1mm、8a・9a・10a・11a・12ab・14a：10mm、13ab：50mm

#### 第5図 前田遺跡出土の圧痕レプリカを採取した土器と拡大写真（２）

8. 不明堅果？子葉(No. 175)、9. 不明堅果？子葉(No. 155)、10. ダイズ属種子(No. 163)、11. ダイズ属子葉(No. 171)、12. ダイズ属？種子(No. 152)、13. ヌスビトハギ属果実(No. 80)、14. ヌスビトハギ属果実(No. 164)

矢印は種実圧痕の位置





スケール 15b・16b・17b・18c・19c・20b・21b : 1mm, 15a・16a・17a・18ab・19ab・20a : 10mm, 21a : 50mm

#### 第6図 前田遺跡出土土器の圧痕レプリカを採取した土器と拡大写真(3)

15. ササゲ属アズキ亜属種子 (No. 70)、16. ササゲ属アズキ亜属種子 (No. 156)、17. マメ科種子 (No. 166)、18. マメ科?種子 (No. 157)、  
19. アサ核 (No. 168)、20. キク科果実 (No. 63)、21. キク科?果実 (No. 65)

矢印は種実圧痕の位置



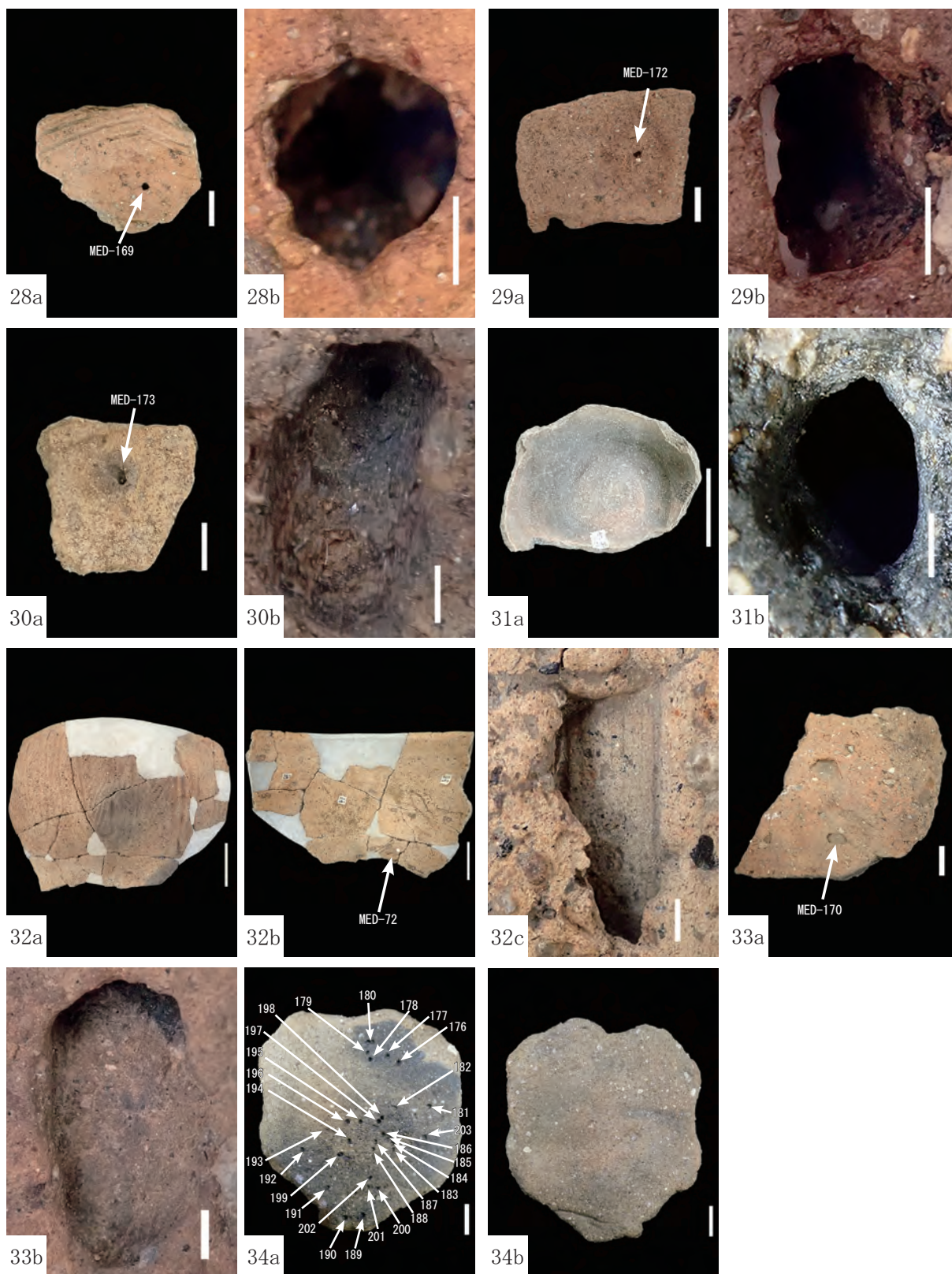
スケール 22c・23c・24b・25b・26c・27c：1mm、24a・25a・26ab・27ab：10mm、22ab・23ab：50mm

第7図 前田遺跡出土土器の圧痕レプリカを採取した土器と拡大写真（４）

22. コクゾウムシ属甲虫 (No. 68)、23. コクゾウムシ属甲虫 (No. 78)、24. ヒメコハクガイ類似種 (No. 149)、25. 不明A種実 (No. 159)、26. 不明B種実 (No. 162)、27. 不明C種実 (No. 165)

矢印は種実圧痕の位置





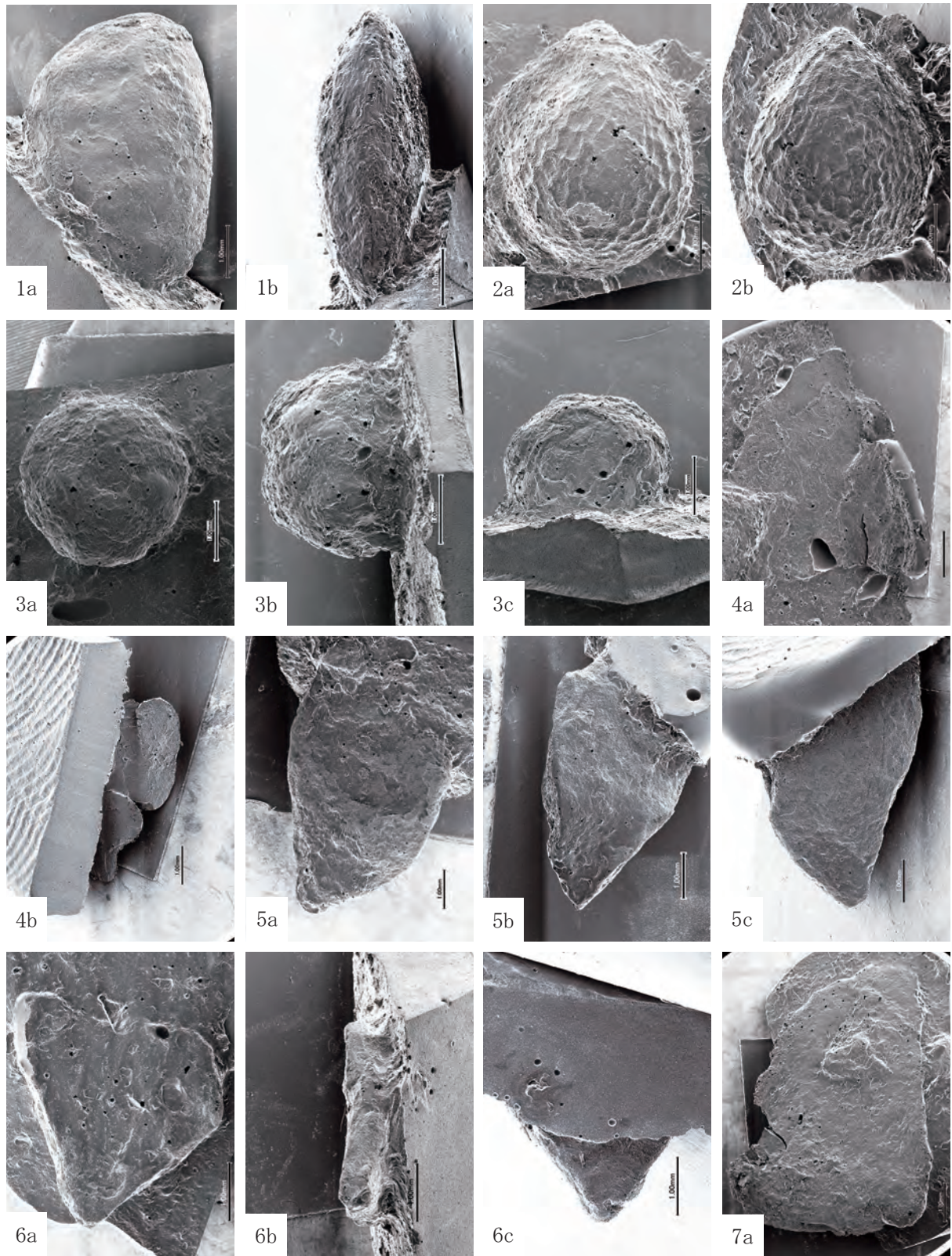
スケール 28b・29b・30b・31b・32c・33b・21b : 1mm、28a・29a・30a・32ab・33a・34-42ab : 10mm、31a : 50mm

#### 第8図 前田遺跡出土土器の圧痕レプリカを採取した土器と拡大写真（5）

28. 不明D種実 (No. 169)、 29. 不明E種実 (No. 172)、 30. 不明F種実 (No. 173)、 31. 不明種実? (No. 71)、 32. 不明稗 (No. 72)、 33. 不明稗 (No. 170)、 34. アワ小穂 (No. 182, 184)、アワ小穂? (No. 186, 192, 195)、アワ有ふ果 (No. 176, 177, 181, 196, 199)・アワ頤果 (No. 178, 187, 190, 191, 193, 197, 198, 200, 202)

矢印は種実圧痕の位置

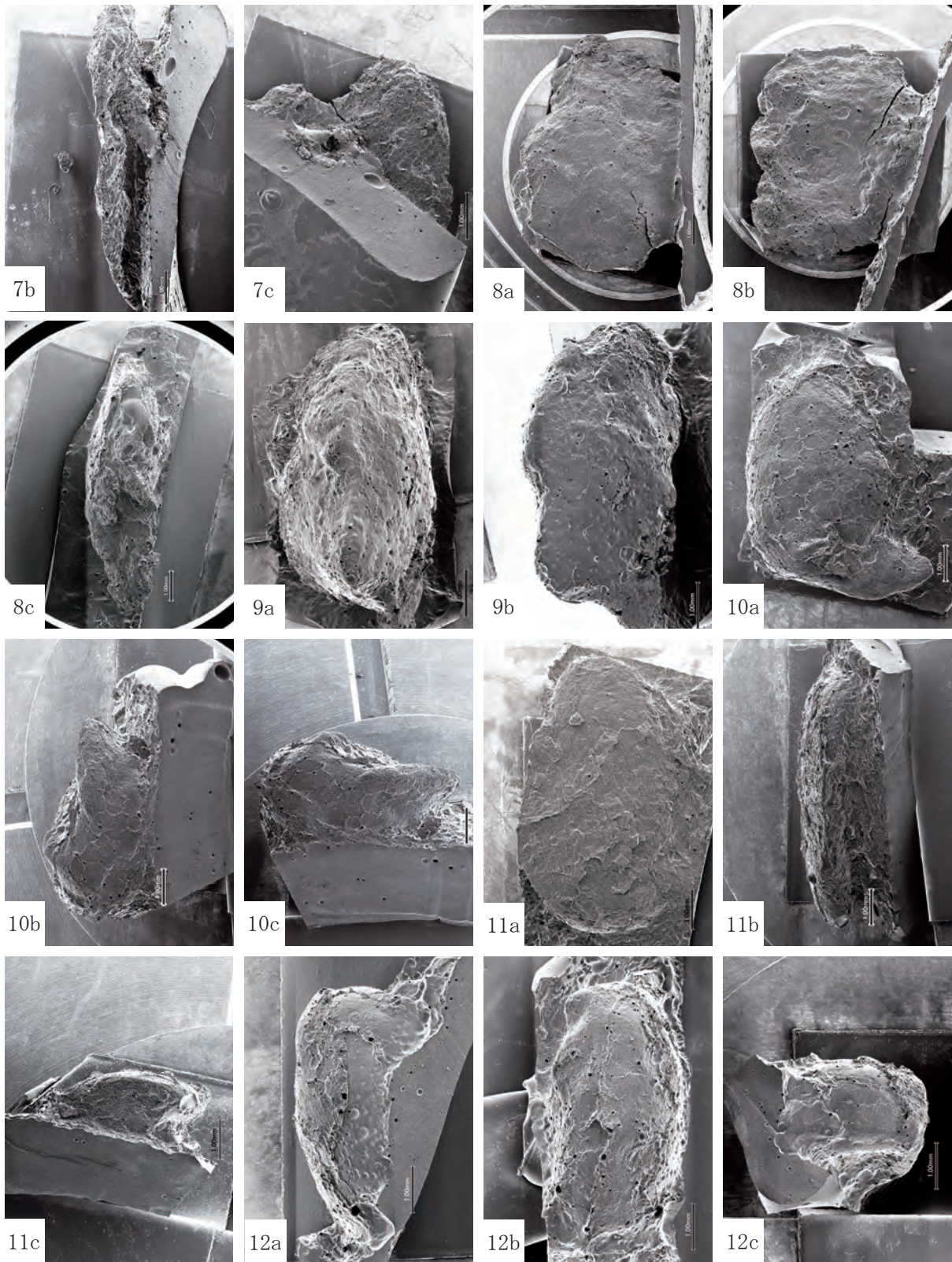




第9図 前田遺跡の圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真（１）

1. キハダ種子 (No. 66)、2. サンショウ種子 (No. 75)、3. ミズキ果実 (No. 167)、4. 不明堅果果皮 (No. 153)、5. 不明堅果子葉 (No. 77)、  
6. 不明堅果？果皮 (No. 74)、7. 不明堅果？果皮 (No. 148)

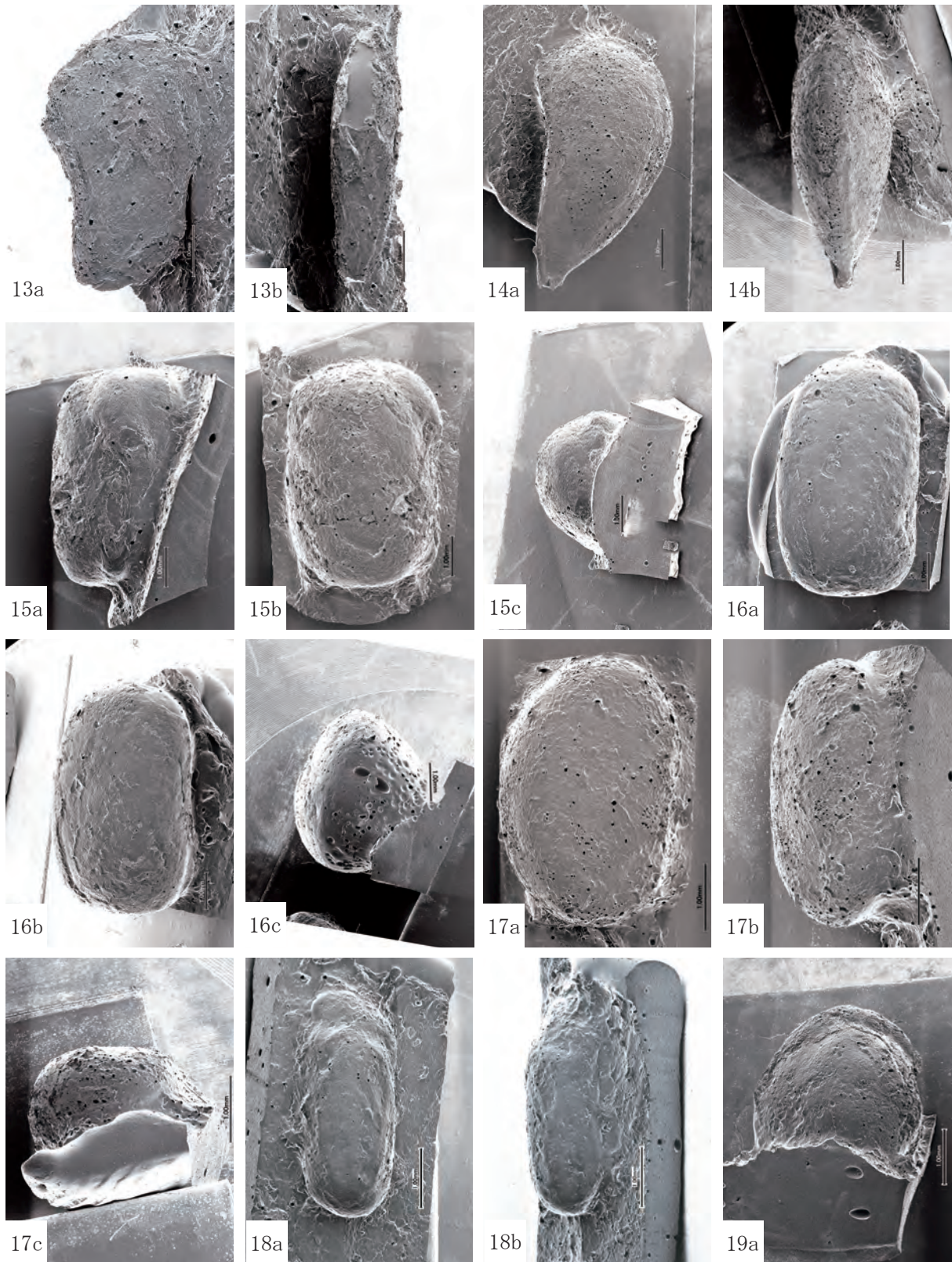




第 10 図 前田遺跡の圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真（2）

7. 不明堅果？果皮 (No. 148)、8. 不明堅果？子葉 (No. 175)、9. 不明堅果？子葉 (No. 155)、10. ダイズ属種子 (No. 163)、11. ダイズ属子葉 (No. 171)、  
12. ダイズ属？種子 (No. 152)

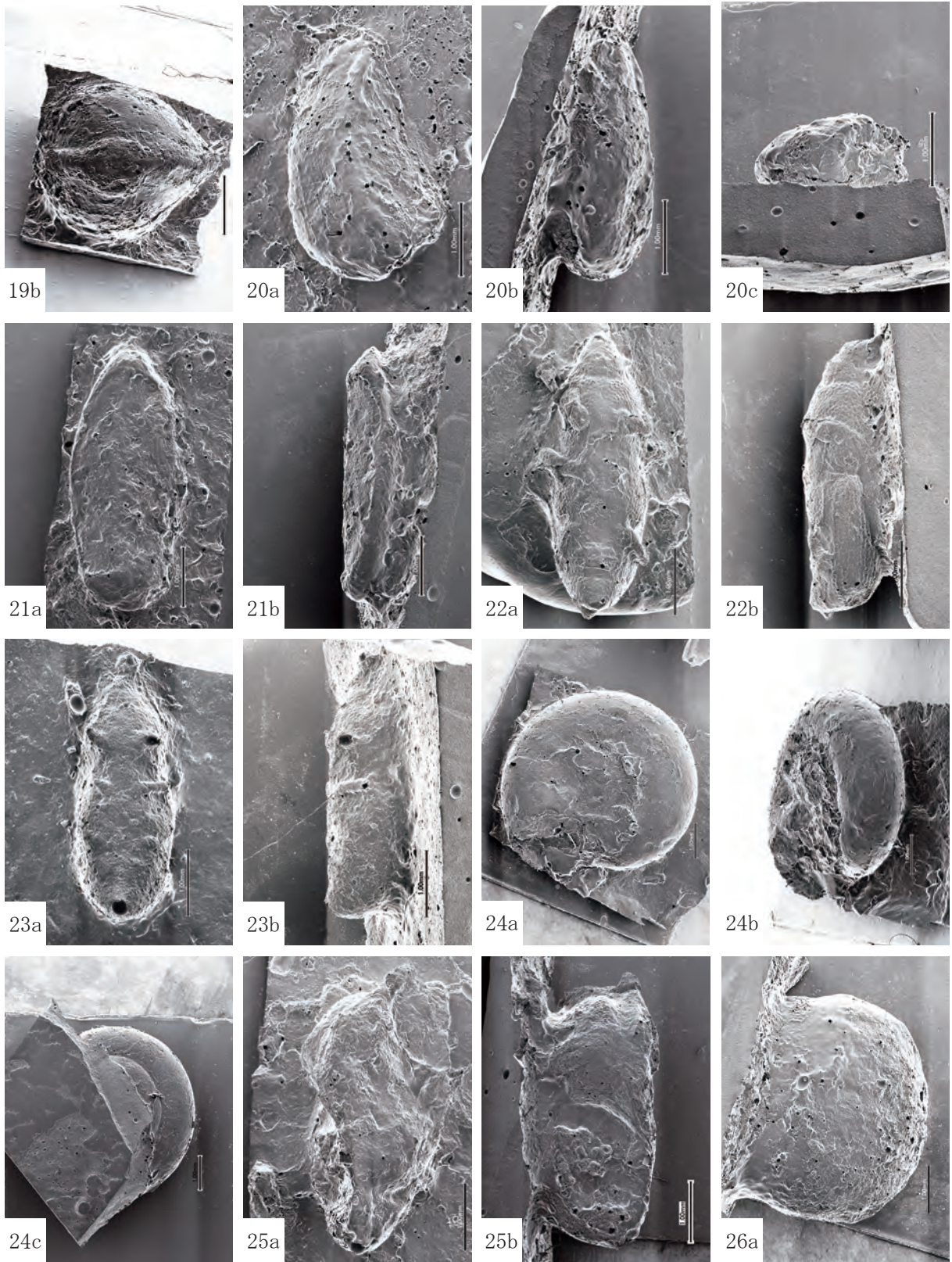




第 11 図 前田遺跡の圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真（3）

13. ヌスビトハギ属果実 (No. 80)、14. ヌスビトハギ属果実 (No. 164)、15. ササゲ属アズキ亜属種子 (No. 70)、16. ササゲ属アズキ亜属種子 (No. 156)、17. マメ科種子 (No. 166)、18. マメ科？種子 (No. 157)、19. アサ核 (No. 168)

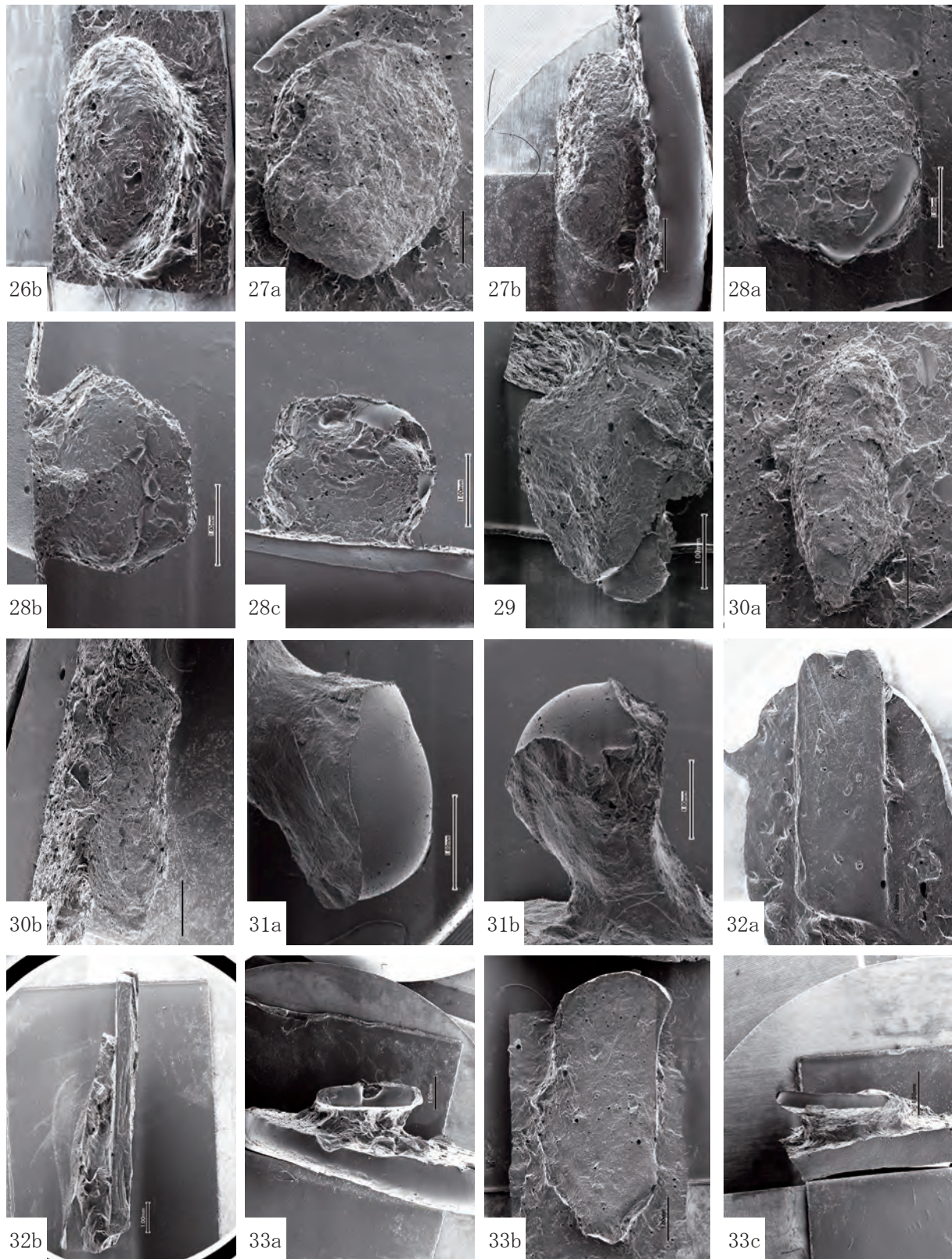




第 12 図 前田遺跡の圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真（４）

19. アサ核 (No. 168)、20. キク科果実 (No. 63)、21. キク科？果実 (No. 65)、22. コクゾウムシ属甲虫 (No. 68)、23. コクゾウムシ属甲虫 (No. 78)、24. ヒメコハガイ類似種 (No. 149)、25. 不明 A 種実 (No. 159)、26. 不明 B 種実 (No. 162)

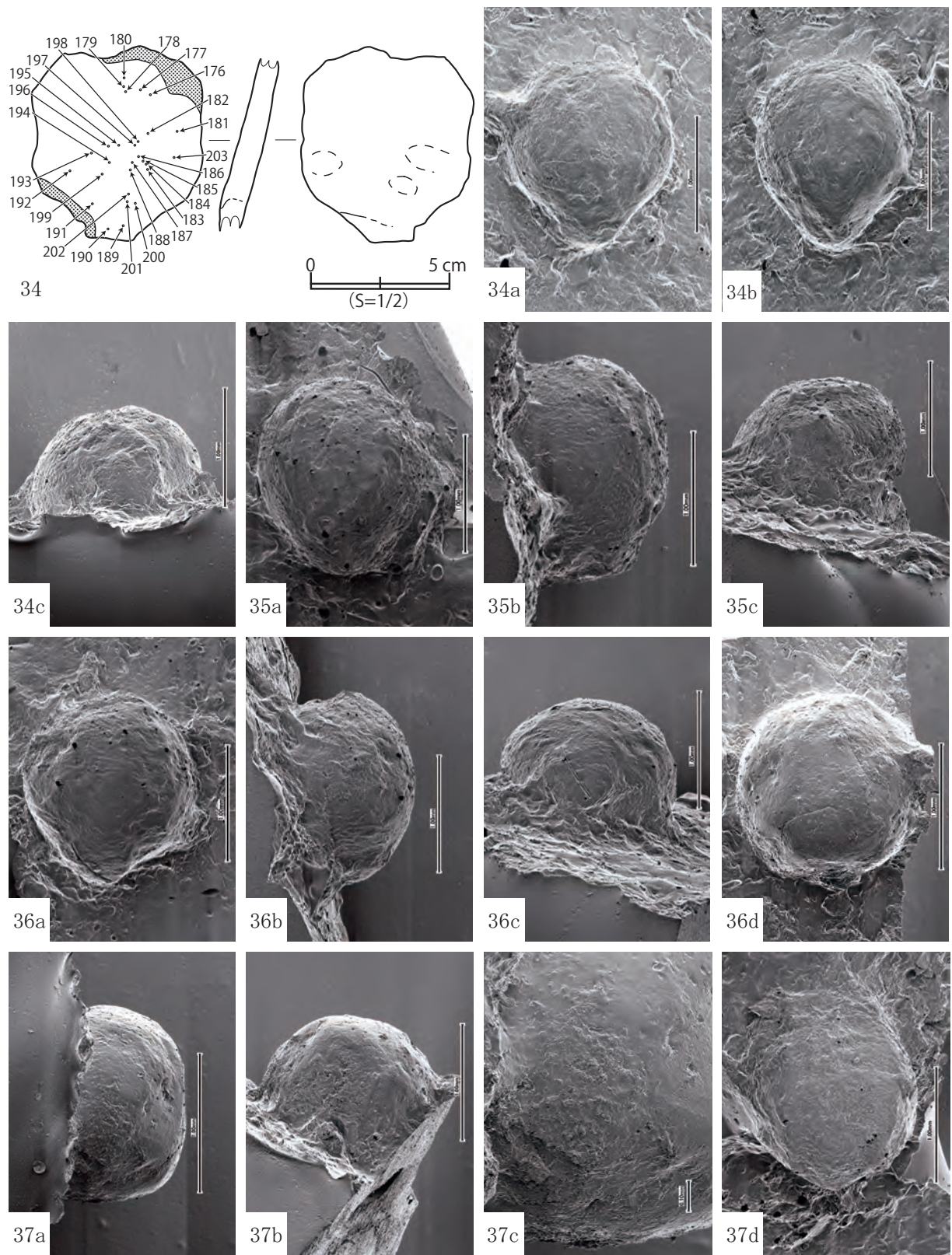




第 13 図 前田遺跡の圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真（5）

26. 不明B種実（No. 162）、 27. 不明C種実（No. 165）、28. 不明D種実（No. 169）、 29. 不明E種実（No. 172）、 30. 不明F種実（No. 173）、  
31. 不明種実？（No. 71）、 32. 不明稗（No. 72）、33. 不明稗（No. 170）

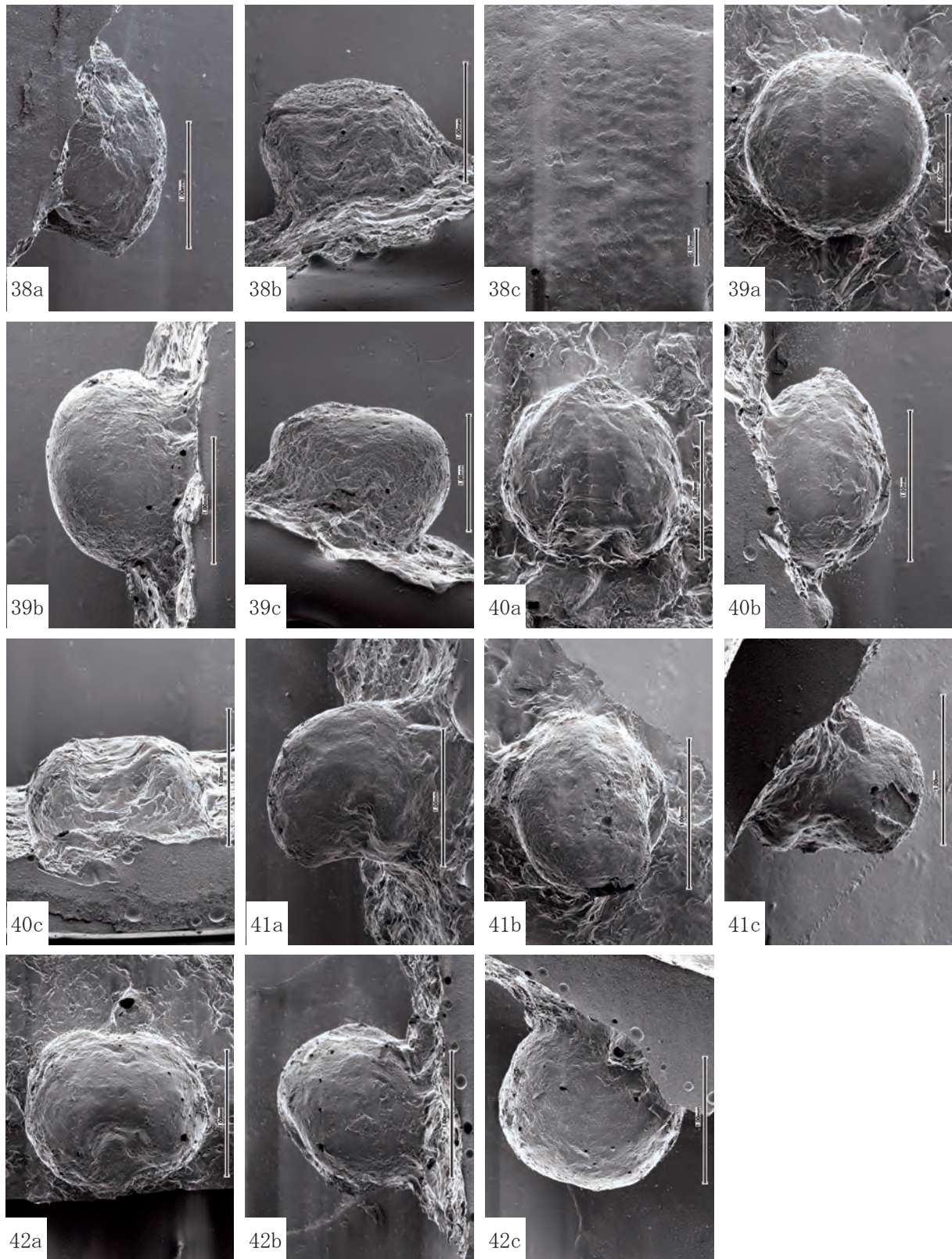




第 14 図 前田遺跡のアワ多量圧痕土器とアワ圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真 (1)

34. アワ小穂 (No. 182)、35. アワ有ふ果 (No. 176)、36. アワ有ふ果 (No. 177)、37. アワ有ふ果 (No. 181)





第 15 図 前田遺跡のアワ圧痕レプリカの走査電子顕微鏡写真（２）

38. アワ有ふ果（No. 196）、39. アワ頤果（No. 190）、40. アワ頤果（No. 193）、41. アワ頤果（No. 197）、42. アワ頤果（No. 198）



# 関東系土師器の初期資料と在地社会の再編

菅原 祥夫

## 要 旨

徳定 A・B 遺跡出土の鬼高系坯は、関東系土師器の初期資料である。6 世紀後半の年代観は、全国的な律令国家形成の歩みが始まる推古・舒明朝期より古くなり、拠点集落の形成と在地社会の再編に伴うことから、その後の関東系土師器の展開との連続性が認められる。出現背景は、当時の安定した王権領域の北端に位置した中通り中部の地域性にあると考えられる。

## キーワード

律令国家形成期 関東系土師器 在地社会の再編

## 1 問題提起

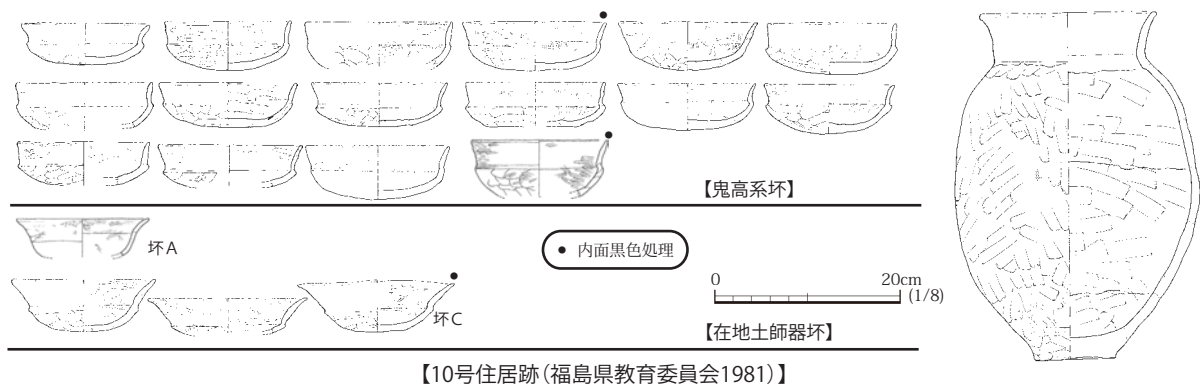
律令国家形成期の陸奥南・中部、つまり現在の福島県～宮城県域では拠点集落を中心に関東系土師器が分布した。在地社会の再編に関東出身者が深く関与したことを示すもので、かつては陸奥中部＝仙台平野以北の固有の存在とみられがちだったが、筆者は陸奥南部＝浜・中通りの分布状況を明らかにし、国造・城柵域にまたがる一体的な東北政策の反映であることを指摘している(菅原 2013・2015・2024)。これは日本海側の渡来系・近江系移民が、

やはり国造域(越前・越中)を起点に、城柵域(出羽)へ北進したことと(北野 1997、望月 2007)、対の関係にある。

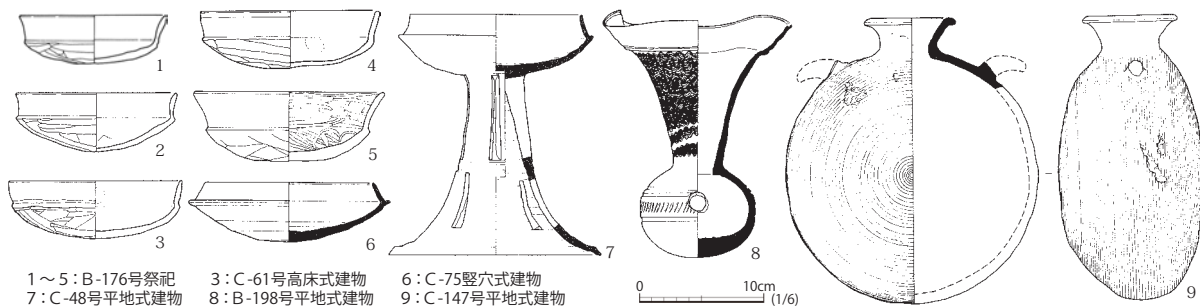
しかし、その初期資料の評価については、さらに検討が必要だと考えていた。基準資料とした郡山市徳定 A・B 遺跡出土の関東系土師器(福島県教育委員会 1981)は、在地土師器との共伴関係に一部混乱がみられ、在地土師器編年上の位置付け＝Ⅲ期併行(舞台式後半)に確実性を欠いたからである<sup>註1</sup>。そして何より、6 世紀後半の年代観は全国的な律令国家形成の歩みが始まる推古・舒明朝期＝6 世紀末～



第 1 図 郡山盆地の遺跡分布



第2図 基準資料



第3図 黒井峯遺跡の土器群

7世紀前半(坂井2008)より古くなり、その後の展開との連続性が問題となる。かねてから筆者は認める立場を示しているが(菅原2015・2024)、当然、認めない選択肢があると思われる。この点は、拠点集落の形成と在地社会の再編に伴うのかどうか焦点となろう。

こうした状況の中、昨年、在地土師器の良好な共伴関係に恵まれた新資料(福島県教育委員会2023)が当館に収蔵され、観察の機会を得た。また、郡山市教育委員会の別資料(郡山市教育委員会2014～2016)が既に公表されており、問題解決の見通しが立ったと言える。そこで、小論では以下の2つの課題の検討によって、旧稿の妥当性を立証することを第一の目的とし、さらに派生する論点に触れたい。

- ・課題1：共伴する在地土師器の様相
- ・課題2：集落変遷上の位置づけ

## 2 事実関係の確認

では、まず事実関係を確認して、課題1のための視点を明確化することから、始めていく。

### (1) 遺跡の概要

徳定A・B遺跡は陸奥南部の代表的な古墳時代集落の1つとして知られ、中通り中部の郡山盆地に所在する(第1図)。微視的にみると、阿武隈川と支流

(笹原川)の合流点付近に形成された自然堤防上に立地しており、当該盆地の古墳時代集落が丘陵・台地の末端付近に多い分布傾向の中で、目立った存在と言える。これは水運や原東山道の利便性を意識したためと考えられ、現在、永徳橋が架かる付近に渡河点が存在した可能性が高い。





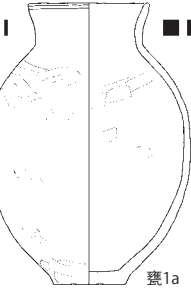
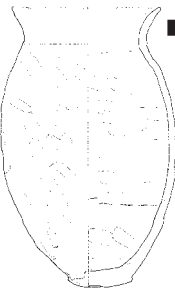
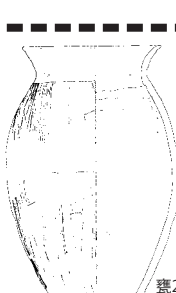
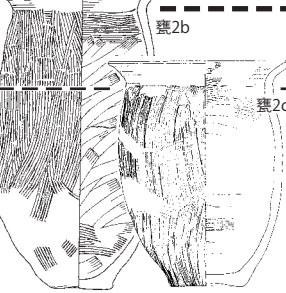
また、本遺跡は平安時代中期まで継続的に営まれ、阿尺国造・安積郡域に属していた。安積郡衙(清水台遺跡)との位置関係からは、国造・大領勢力圏ではなく、国造・郡域内に複数分立した、それに準じるランクの有力豪族圏に伴う拠点集落の1つだったと考えられる。

### (2) 関東系土師器の概要

さて、問題の関東系土師器はいわゆる鬼高系坏に相当する(第2図)。同じ鬼高系でも、6世紀末～7世紀前半の常陸南部型坏(松本2013)に比べ、器形がやや高く、表面漆仕上げは施されていない。この点で、明らかに古相と言える。また類例は今のところ、郡山市大根畑遺跡8号住居跡と須賀川市八ツ木遺跡44号住居跡に限られ、この点でも、のちの一次陸奥国の主要範囲＝浜・中通り～仙台平野に分布する常陸南部型坏とは、隔絶した違いが認められる。しかし、堅穴組成に占める割合は高く(第2図)、無視できる存在ではない。

	時 期	実 年 代	畿内編年	氏家編年ほか	
前半期	I 期	5世紀末～6世紀初頭	T K 23～T K 47	引田・佐平林式	坏 A：丸底で、体部が屈曲し、口縁部が外反。 坏 C：丸底で、体部が屈曲し、口縁部が下端に段を形成して外反。いわゆる有段丸底坏。 坏 E：丸底で、体部が屈曲し、口縁部が下端に段を形成して内湾。いわゆる有段丸底坏。 甕 A 1a：外面ヘラナデ、胴部中膨らみ。 甕 A 2a：外面ハケメ、胴部中膨らみ。 甕 A 2b：外面ハケメ、胴部下膨れ 甕 A 2c：外面ハケメ、寸胴
	II 期	6世紀前半～中葉	M T 15～T K 10	舞台式（前） 住社・	
	III 期	6世紀後半	T K 10～M T 85	舞台式（後）	
	IV 期	6世紀末～7世紀前半	T K 43～T K 209	栗囲式（古）	
後半期	V 期	7世紀中葉～後葉	飛鳥Ⅱ・Ⅲ	栗囲式（中）	
	VI 期	7世紀末～8世紀前半	飛鳥Ⅳ～平城Ⅱ	栗囲式（新）	

	I 期	II 期	III 期	IV 期
坏	 坏 A	 坏 C	 坏 E	 坏 E
長胴甕	 甕 1a	 甕 1a	 甕 2a	 甕 2b 甕 2c

第 4 図 広域編年モデル

筆者が、最初にその存在を認識したのは天栄村山崎遺跡の報告書作成時(福島県教育委員会 1992)であり、当時実見した、群馬県渋川市黒井峯遺跡の鬼高式坏(第 3 図－1～5)に胎土・質感まで類似していると感じていた。そこで、シンポジウム「古代社会と地域間交流」の関連資料検討会(国士舘大学考古学会 2007 年開催)において、関東・東北各地の研究者と共同観察した結果、この見通しの正しさが証明され、類例の分布範囲は上野～武蔵北部に及ぶことが判明した。ただし、器壁がやや厚めで、内面黒色処理の例を少数含むことから、搬入品ではなく、徳定 A・B 遺跡周辺で製作されたものとみておきたい<sup>註 2</sup>。その場合、東北の土師器に接した関東出身者が製作したか、関東出身者から伝習を受けた在地土師器工人が製作したかのどちらかとなるが、現状では決め難い。

いずれにせよ、上野～武蔵北部の出自は間違いなく、故地資料の共伴須恵器の特徴から(第 3 図－6～9、T K 10(新)～M T 85)、6 世紀後半の年代が与えられる<sup>註 3</sup>。つまり、鬼高系坏自体の年代観

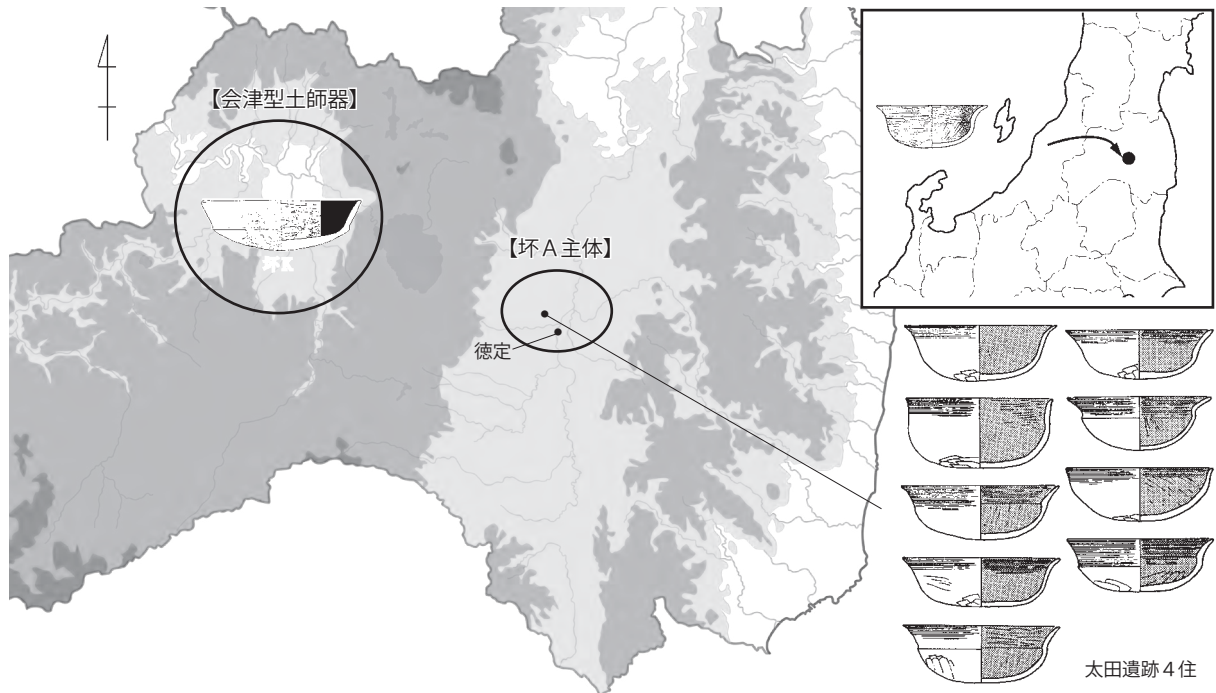
は、III 期の年代観(第 4 図上)と整合する。

### (3) 在地社会と土師器

次に、在地社会と土師器の関係性を説明しておく。なお、以下に記述する細別器種の分類基準と時期区分は、旧稿(菅原 2007a・2024)に従う。

**IV 期の画期** 5 世紀後半以来、安定継続した仙台平野～大崎地方の在地社会は、II 期になると突然、古墳の築造と集落の営みがほぼ停止してしまい、著しい停滞状態に陥った。また、これほど極端ではないが、浜・中通りも大型古墳の消滅と、集落立地の低地から台地上への移動、小規模・分散化の傾向が認められる(青山 2015、菅原 2013・2021、藤沢 2015)。これは、「536 年イベント」による気候寒冷化(新納 2014)の影響と考えられ、在地土師器の様相にも反映した。両者共通の細別器種の変遷がみられる一方(第 4 図下)、中通り中部では、越前～羽羽南部沿岸の影響が飛び石的に認められ、会津盆地では、信州出自の会津型土師器が成立している(第 5 図)。どちらも、冬の気候風土が厳しい地域の故地で共通しており、上の見方の根拠となっている(菅





第5図 II・Ⅲ期の地域性

原2021)。

そして、この状況を解消させたのが、国造・城柵域にまたがる栗圀式の成立である<sup>註4</sup>。しかも、6世紀末～7世紀前半の年代観は、のちの一次陸奥国の主要範囲で在地社会の再編が起き、常陸南部型坏が拠点集落を中心に分布する頃と、ちょうど一致している。

したがって、鬼高系坏の年代観がそれより古くなるのは重要であり、共伴する在地土師器との整合性＝Ⅲ期併行にこだわる理由は、この点にある。

**Ⅳ期の土師器様相** 栗圀式の成立は、Ⅰ期に始まった属性変化の到達点に位置づけられる。また同時に、8世紀へ向かう属性変化の起点でもある(第4図)。主要な細別器種でみると、坏A→坏C、甕1a→甕2aの交代が以下の諸変化を伴ってみられ、その後に主体となる坏E、甕2b・2cが客体的に出現している。

坏：口縁部の伸長・器高の低平化

内面黒色処理の普及、ヘラミガキの省略

甕：細身・長胴化・胴部中膨らみ

ヘラナデ→ハケメ

**Ⅲ期の土師器様相** それに対し、Ⅲ期は中通り中部に2タイプが共存している。まず1つは栗圀式の

成立へ向かう様相を示すもので、**Ⅰタイプ**としたい。坏の主体をなす坏Cには、既に当該型式の成立要件(口縁部形態・製作技術)がほぼ備わっているが、まだ器高がやや高く、坏Aがごく客体的に残る。また、甕A 2aは胴部の膨らみがやや強く、甕A 1aが残る一方、甕A 2b・2cが出現していない。言い換えれば、それらの要件を完備したのが、栗圀式の成立となる。徳定A・B遺跡周辺では、城の内遺跡の良好なセットが知られ、至近距離の御代田地区に典型的な甕A 2aの発見例(第4図)がある。

もう1つは、北陸～出羽南部沿岸の影響を示すもので、**Ⅱタイプ**としたい。坏の圧倒的主体は坏Aが占め(第5図右)、栗圀式との違いは大きい。そのため、Ⅲ期まで継続しないとみられがちだったが、故地資料はⅣ期まで確認されており(内田2002、坂井1989)、栗圀式の成立直前のⅢ期まで継続した可能性が排除できないと思われる<sup>註5</sup>。その場合、在地土師器だけの時期の認定は難しく、徳定A・B遺跡では鬼高系坏の共伴が判断材料となろう。

### 3 在地土師器編年上の位置づけ

では、これまでの視点をもとに、課題1を検討したい。

本遺跡では、a)阿武隈川ぎわの集落域(福島県教育委員会1981)、b)東側へ広がる集落域(郡山市教育委員会2014～2016)、c)南側の低地にかかる小規模集落・畠地・祭祀跡(福島県教育委員会2023)が発見されている。今回の検討対象は、b)・c)の出土資料である。ここでは、鬼高系坏と在地土師器坏・長胴甕の細別器種構成に注目していく。

#### (1) 南側の低地にかかる祭祀跡資料

まず、豊富な資料数に恵まれた祭祀跡資料(第6図)をみると、いずれもⅢ期に比定され、2タイプが認められる。

◎1号祭祀跡資料……Ⅲ期-Iタイプ

◎2・3号祭祀跡資料…Ⅲ期-IIタイプ

このうちⅢ期-IIタイプに鬼高系坏が共伴し、問題だった在地土師器との整合性が確実に証明できたと言える。一方で、Iタイプに共伴しないことは、遠隔地出自の土師器間同士の強い相関関係を示し、新たな問題が生まれる。

では、それは何を意味するのだろうか。ここで手掛かりとなるのは、Ⅳ期の本宮市高木遺跡群の所見と思われる。長さ約2.1kmに及ぶ自然堤防上の半分近くの面積が発掘調査された当該遺跡群では、大溝で区画された特定範囲に外来系土師器(会津型主体+常陸南部型・東北部系客体)が集中分布しており、他では通常の在地土師器組成がみられることが判明している(菅原2021)。このようにみると、集団の出自の違い(在地：外来)を反映した可能性が浮かび上がる。もちろん相対的な前後関係(Ⅱタイプ→Ⅰタイプ)を反映した可能性もあるが、鬼高系坏の年代観から、ⅡタイプがⅢ期の範疇に収まることは間違いない。今後の十分な資料の蓄積を待って判断したい。

#### (2) 東側へ広がる集落域資料

ただし、東側へ広がる集落域資料からみると、鬼高系坏は栗圀式の成立へ向かう在地土師器と、決して無関係な存在ではなかったことが窺える(第7図)。6号住居跡資料はⅢ期-IIタイプ、2号住居跡資料はⅢ期-IIタイプとⅣ期の中間様相、30号住居跡資料はⅣ期に比定され、鬼高系坏は前二者に共伴したのが、根拠である。

ちなみに、新旧要素が交錯した2号住居跡資料のあり方は、広域火山灰F Pに直接覆われた黒井峯遺

跡出土の須恵器に、[TK10(古)]-[TK10(新)～MT85]にまたがる製品がみられる状況と同様と言え、何ら不思議なことではない。遺構面に残される組成には、一定の時期幅を含むのが、むしろ一般的だと言える。

## 4 課題2：集落変遷上の位置づけ

次に、課題2を検討したい。

徳定A・B遺跡は平安時代中期まで継続的に営まれており、Ⅲ期の集落がどのような位置づけになるのか、明らかにする必要がある。具体的には、帰属時期の判明した65棟の堅穴建物跡を対象に、時期別分布をみていく。

**4・5世紀** 阿武隈川ぎわより東側で、小規模な集落が断続的に営まれた(第8図上)。当時の本遺跡は、ごく小規模な集落に過ぎない。

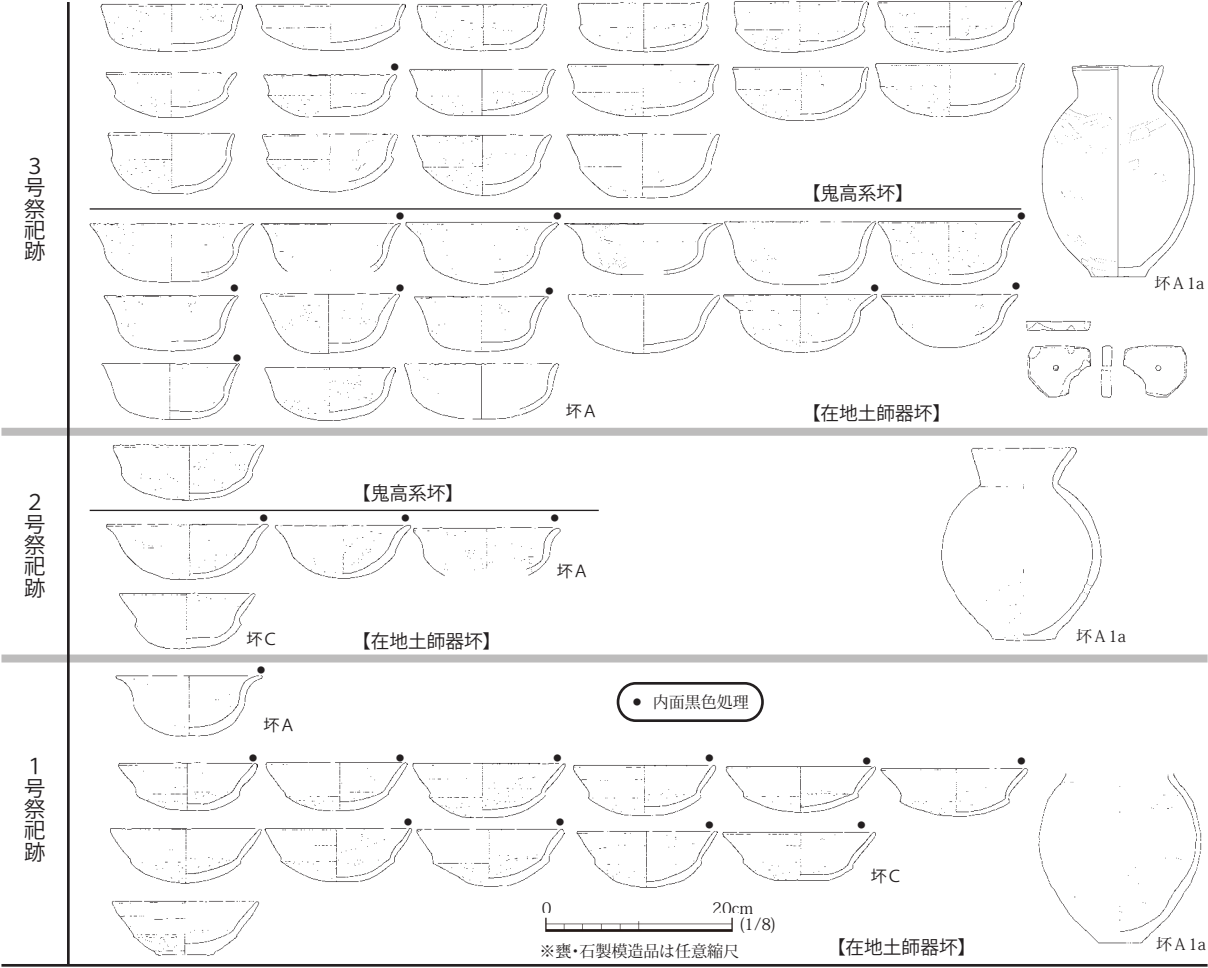
**6世紀後半(Ⅲ期)** ところが、6世紀後半になると、ほぼ無人だった自然堤防上で突然集落が形成され、堅穴建物が高い密度で分布するようになる(第8図下)。水運や原東山道の利便性を意識したものと考えられ、のちの官衙・官衙関連遺跡の分布傾向と共通している。これは郡山盆地の古墳時代集落が、丘陵・台地の末端付近に多い分布傾向(第1図)からの新たな動きと言え、在地社会の再編の始まりと認識できる。

堅穴建物数は、未調査範囲を勘案すると、優に50棟以上は見込まれ、南側の低地にかかる場所では畠地・祭祀場が営まれた。こうした所見から、当該期に本遺跡の拠点集落の性格が形成されたと評価できる<sup>註6</sup>。

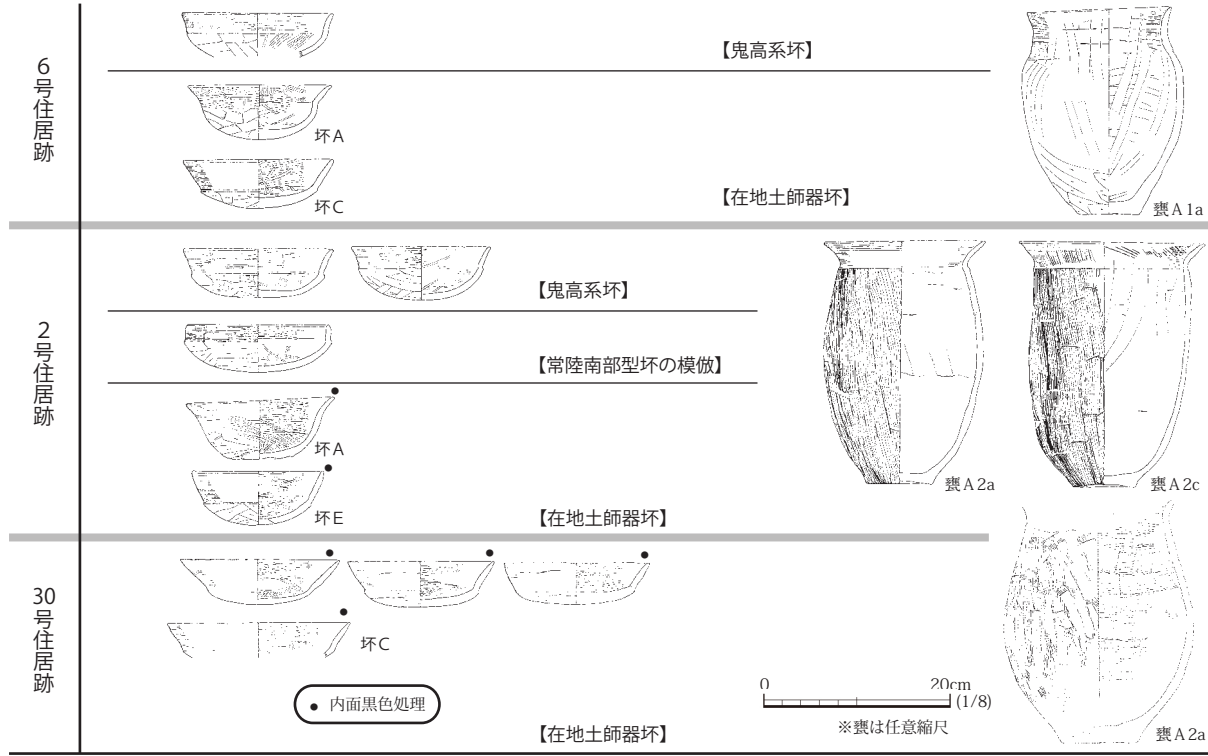
**6世紀末～7世紀前半(Ⅳ期)** 集落域の範囲は東側へ拡大し(第9図上)、推定渡河点を挟む対岸で、金銅装頭椎太刀・鉄冑を副葬した渚の上1・2号墳が築造される(第11図)。両者の関係は明白で、国造勢力圏に準じる有力豪族圏の1つが本格的に形成されたことを示す。これが、Ⅲ期の延長上に位置づけられるのは、「渚の上1号墳出土の武具類に上野の綿貫観音山古墳との深い関係性」(横須賀2009)が認められることによって、確実に証明できる。

**その後(Ⅴ期以降)** 遺構分布は、乙巳の変をまたぎ、9世紀前半まで比較的高い密度が維持された(第9図下・第10図)。このことから、拠点集落の性格



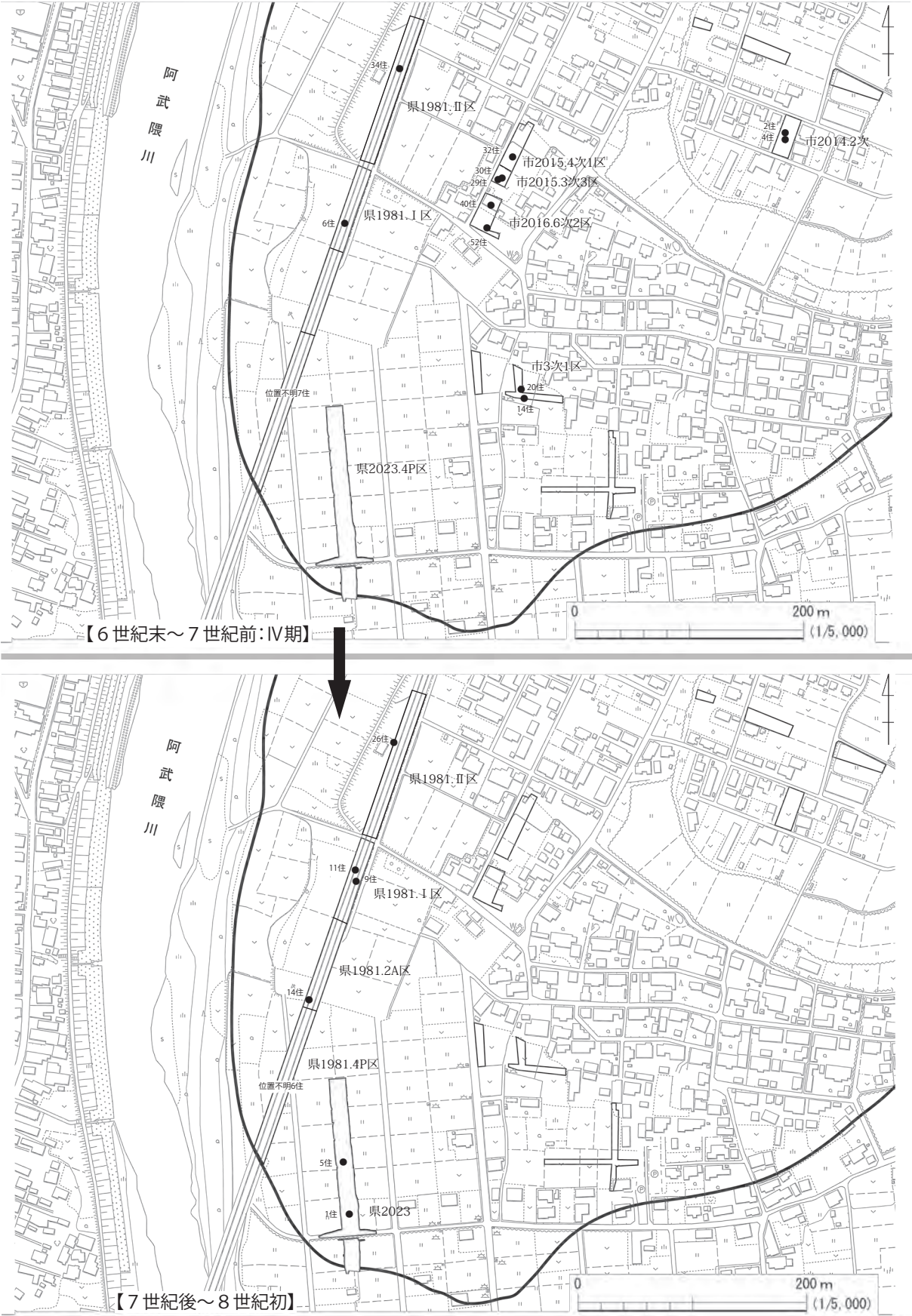


第6図 低地にかかる祭祀跡資料



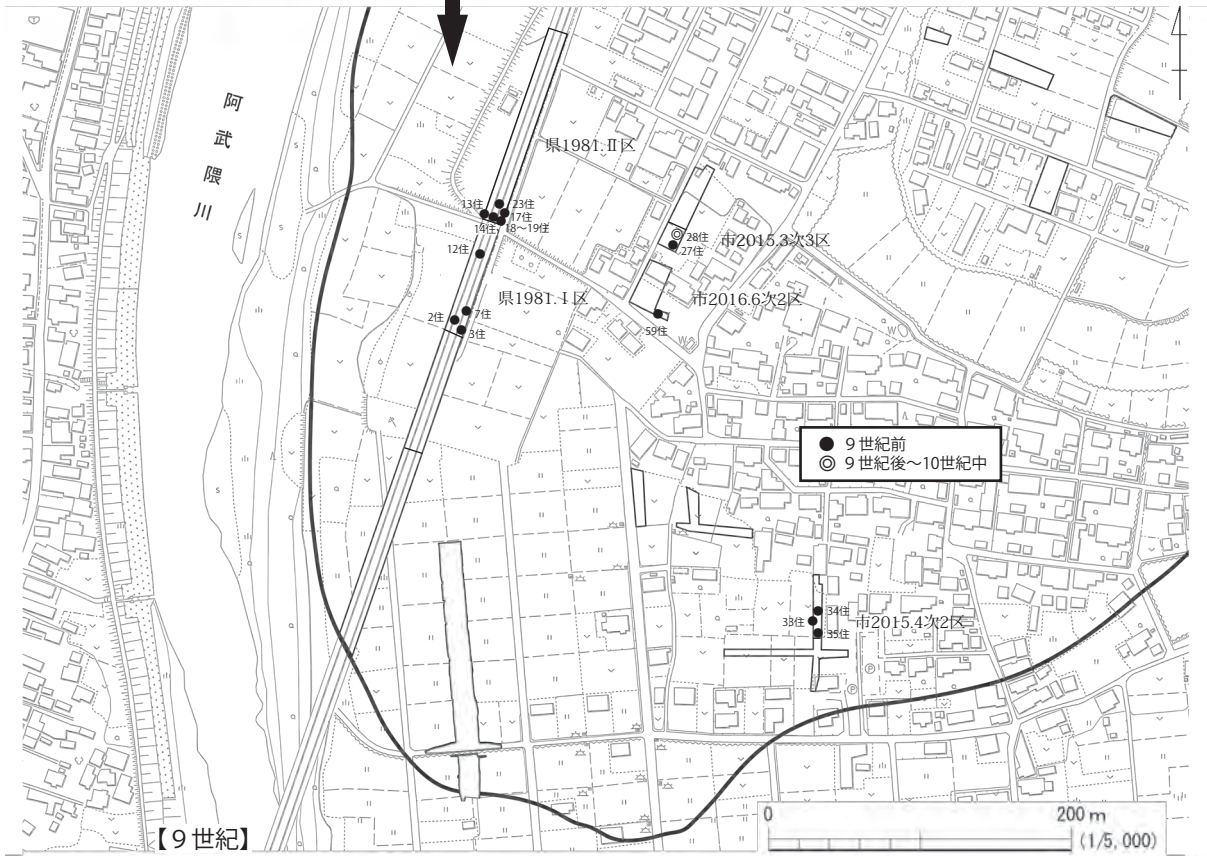
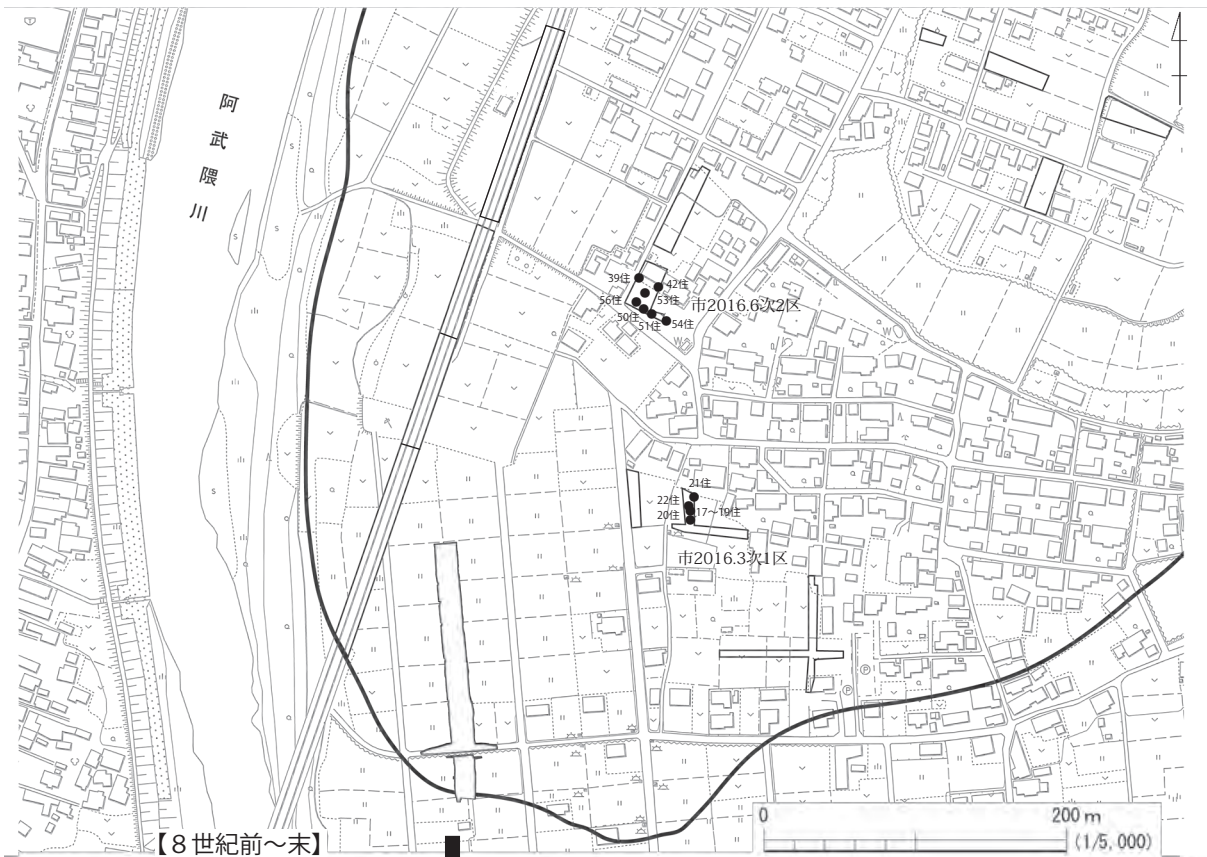
第7図 東側に広がる集落域





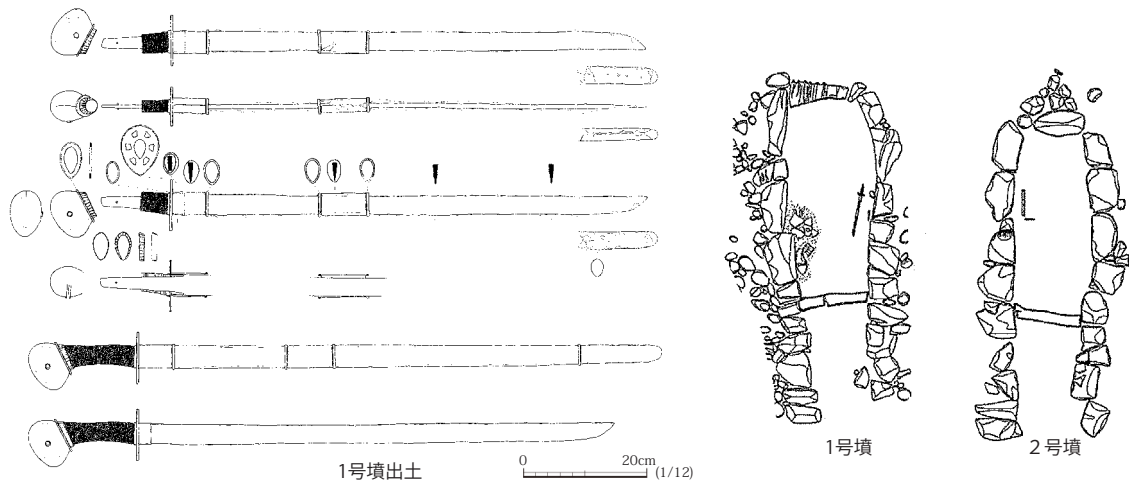
第9図 集落変遷②



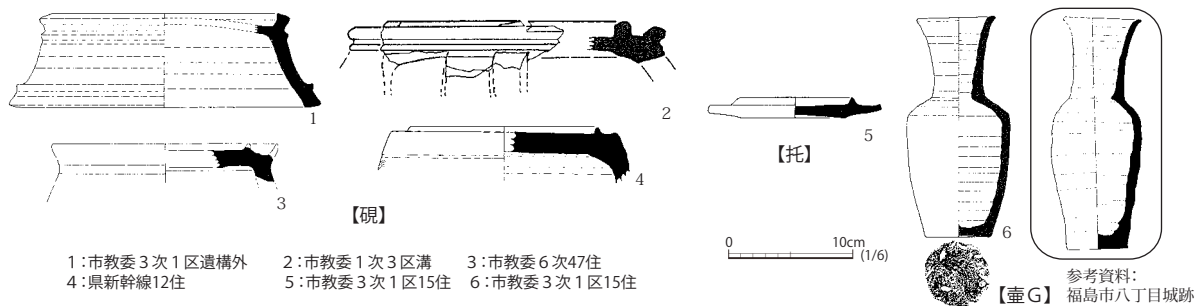


第 10 図 集落遷遷③





第11図 渚の上1・2号墳



第12図 硯・托・壺G

は律令期社会でも安定継続したと言える。官衙遺構は発見されていないものの、円面硯・托・壺Gが一定範囲内で出土したことは、ランクの高さを示している(第12図)。とくに壺Gは県内2例目の確実な資料であり、特筆される<sup>註7</sup>。

### 小結

以上によって、冒頭で示した問題点が解決された。その結果を要約する。

a) 徳定A・B遺跡出土の鬼高系坏は、上野～武蔵北部に出自が求められ、6世紀後半の年代観は其伴する在地土師器とも整合する。これは、全国的な律令国家形成の歩みが始まる推古・舒明朝期より、古く位置づけられる。

b) またそれは、拠点集落の形成と在地社会の再編に伴うもので、その後の関東系土師器の展開との連続性が認められる。

a)について補足すると、Ⅲ期Ⅰタイプの基準資料は、機能中に広域火山灰F Pが降下した山崎遺跡39号住居跡から出土しており(福島県教育委員会1992)、黒井峯遺跡出土の鬼高式坏とは直接的な併行関係にある。そして、この鬼高式坏に出自をもつのが、Ⅲ期Ⅱタイプの鬼高系坏であることから、

これまでみた3者の関係性が具体的に裏付けられる。

## 5 派生する論点

では、上の結論を踏まえ、派生する若干の論点に触れたい。

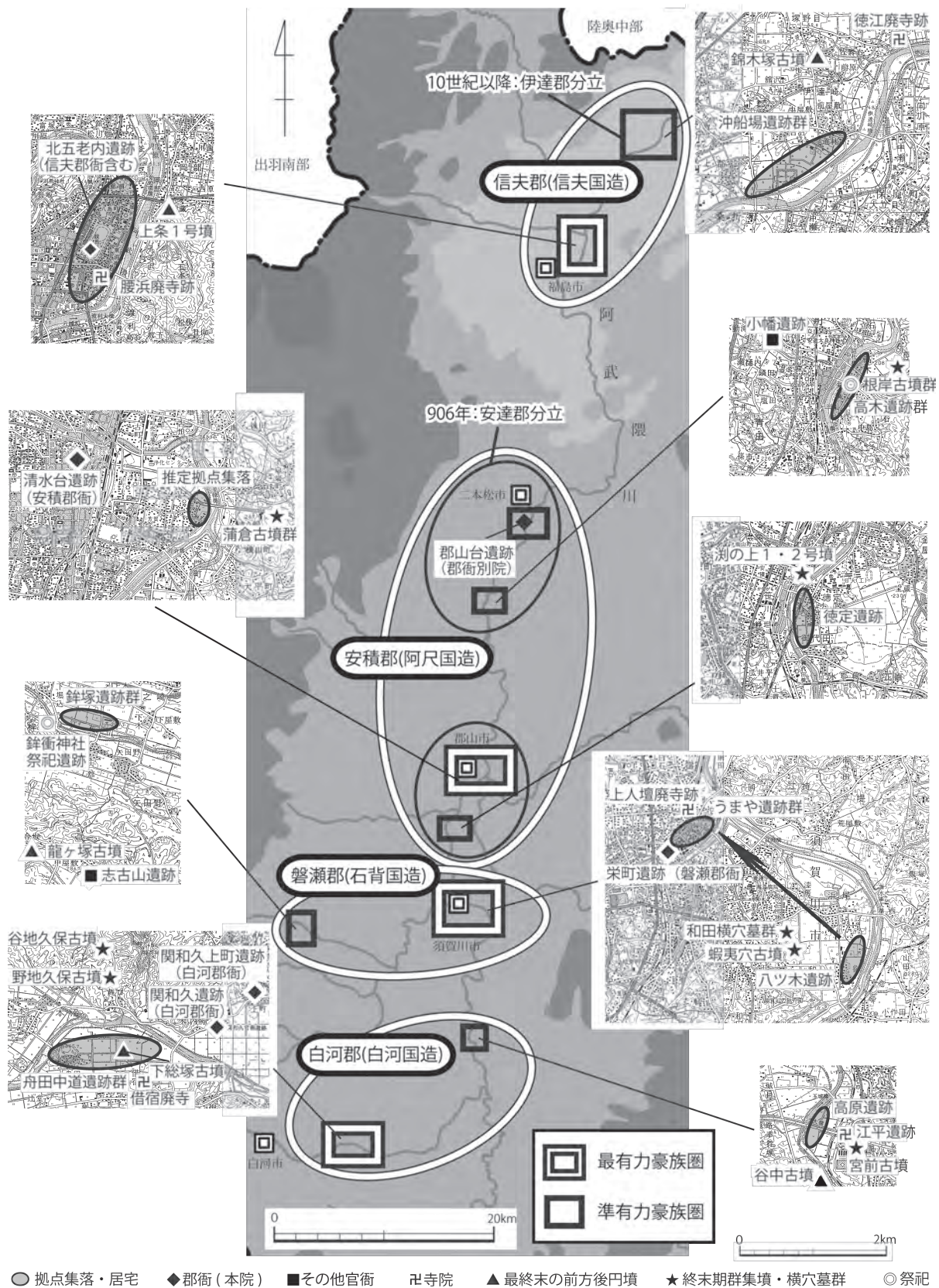
### (1) 浜・中通りの位置づけ

仙台平野以北に対し、浜・中通りの在地社会は、スムーズに律令期社会へ移行したとみられがちだが、必ずしもそうではない。Ⅳ期を画期に、以下の諸現象が認められる(第13図)。

A 集落立地の中心は、台地上から河川沿岸に移動し始め、新たな集落の出現や既存集落の再開が起きる。その立地は、阿武隈川と支流の合流点付近に形成された自然堤防上に目立つ。

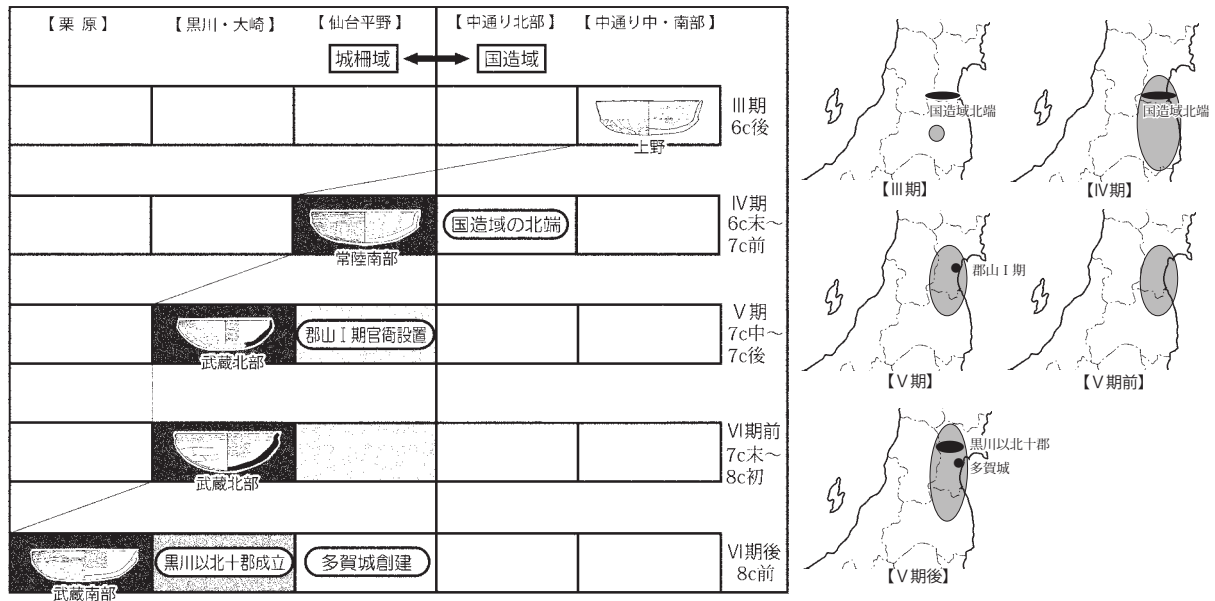
B このうち、のちの官衙・官衙関連遺跡の周辺集落が拠点集落に急成長した。それらは、国造・準国造クラスの豪族集落に比定され、大化以後は、郡内に分立する郡領クラスの豪族集落に変遷したと考えられる。

C 連動して、伝統的な古墳系列が停止し、入れ替わるように、周辺で関東系譜の横穴式石室・横穴



第 13 図 中通りの豪族圏分布





第14図 関東系土師器の出自と分布の変遷

墓を採用した造墓活動が開始され、最終末の前方後円墳・大型円墳が築造された。

D また、関東の技術系譜によって、5世紀後半以来途絶えていた在地須恵器生産が再開される。

E C・Dの背後関係として、拠点集落には、少数の関東系土師器(常陸南部型坏)が伴う。また、東北北部系土師器(北上地方出自)がみられるケースもある。

ところが、徳定A・B遺跡一帯では、A・B・Eの変化が既にⅢ期には起きていた。

#### (2) 浜・中通り～仙台平野の位置づけ

また、Ⅳ期のA～Eの基本変化は、同時期の仙台平野と足並みをそろえたもので、大化以後は、Cの一部(最終末の前方後円墳・大型円墳)とEを欠いて、大崎地方→栗原地方へ北上している。そこで、対象範囲を栗原地方まで広げ、関東系土師器の動態から、徳定A・B遺跡一帯の社会変化を位置づけたい。

この視点から、移民展開の中心である東山道ルート上の分布変化(第14図)を追うと、Ⅲ期の中通り中部に限定された状況から、Ⅳ期にはその先の仙台平野へ、仙台平野に郡山遺跡Ⅰ期官衙が設置されたⅤ期には、その先の黒川・大崎地方へ、仙台平野に多賀城が創建され、黒川・大崎地方で黒川以北十郡が成立したⅥ期後半(8世紀前半)には栗原地方へ、最前線が及んでいる。つまり、Ⅳ期を画期として政権領域の常に一歩先へ最前線が及ぶパターンを繰り返

返しており、関東勢力を介したグレーゾーンともいえる先行過程を踏んだ領域拡大が、大化前後にまたがって行われたことを示している。この点は、主要出自が常陸南部→武蔵北部→武蔵南部に変化しながらも、同一出自の関東系土師器が政権領域の北端とその一歩先で共有され、分布密度が後者により濃密な傾向と整合する(菅原2024)。

徳定A・B遺跡の鬼高系坏は、こうした流れの起点に位置づけられる。

#### (3) 画期の捉え方

実は、Ⅳ期の拠点集落の代表的事例でも、Ⅲ期には小規模な集落形成が始まっている。

◎浜・中通り…舟田中道遺跡、高木遺跡群

◎仙台平野……長町駅東遺跡、山王・市川橋遺跡  
確かに、堅穴建物数が急増し、新たな造墓活動や在地須恵器生産の再開が起きるのはⅣ期であるが、土師器の細別器種変遷で指摘したように、新旧の要素は常に交錯しながら推移するのが実態である。集落についても同様で、例えば多賀城が成立し、陸奥国体制が一応完成を迎える8世紀前半は、同時に、百万町歩開墾計画(722年)を契機とした私的土地所有の起点でもあり、その流れは10世紀に顕在化する中世的社会の形成へつながっていく(菅原2007b)。

したがって、変化の波のピークを重視する視点と、最新要素の出現を重視する視点を対置させることが、重要だと考えられる。

#### (4) なぜ中通り中部だったのか

最後に、なぜ中通り中部だったのかという、根本的な疑問に触れたい。ここではその手掛かりを、国造域内部の地域性に探ってみる。

国見峠の境界を挟み、城柵域と接した中通り北部(信達盆地)は、中・南部に比べ、6世紀の集落分布密度が相対的に薄く、関東に中心分布をもつ堅穴張り出しピットの分布圏(鶴間2011)からはずれるなど、在地社会の様相に城柵域側との接点が認められる。関東系土師器も同様で、約5km先に国見峠をにらむ拠点集落(沖船場遺跡群、第13図)では、大化前後にまたがる関東系土師器の定量保有がみられ、7世紀後葉に、仙台平野以北で爆発的に広がる北武蔵系新型坏が確認できるが、国見峠を越えた城柵域南部の囲郭集落(柴田郡：田田盆地北部遺跡群)では、北武蔵系新型坏がほぼ皆無であり、中通りに特徴的な分厚いつくりの坏・甕が目立つ。

このように、関東系土師器の境界様相はモザイク状を呈しており、政治支配上の境界では厳密に線引きすることができない。

したがって、全国的な律令国家形成の動きが始まる直前時期には、まず安定した王権領域の北端＝中通り中部で関東系土師器を伴う拠点集落の形成が行われ、それが、先にみたIV期以降のパターンヘシフトしたと考えられる。

以上のように、徳定A・B遺跡の調査成果は、多様な研究視点ををはらんでいる。最後に、その重要性を強調し、結語としたい。

謝辞:小論の作成にあたり、神谷佳明・藤野一之・神林幸太郎氏には事実関係の確認と情報提供のご協力をいただいた。記して、感謝申し上げたい。

#### 【註】

- 註1 調査関係者によると、遺構の重複関係や層位の把握がきわめて難しく、誤認したケースが含まれた。
- 註2 筆者は、一部に搬入品の可能性を想定したことがある(菅原2004)。この場を借りて訂正しておく。
- 註3 6世紀中頃ともされるが、口縁部が短く器高が低くなった坏H(第3図-6)、長脚の高坏(同図-7)、口頸部が細長く伸びた甕(同図-8)、鈎状・無把手の提瓶(同図-9)などTK10(古)より新しい要素を含むことから、6世紀後半に位置付けるのが妥当と判断している。
- 註4 会津地方ではIV期まで会津型土師器が継続するが、坏・甕の細部形態には栗囲式の明瞭な影響が表れる(菅原2007・2021)。なお、栗囲式の成立背景は、関東からの動きとは別に存在した、日本海側内陸からの人・モノ・情報の移動を推測している(菅原2024)。
- 註5 厳密に言うと、IV期まで確認されるのは越前～越後頸城で、阿賀北～出羽南部は当該期の集落自体がみえない。なお、故地全体の範囲(第5図右上)は、「炉で蒸す」調理を主体的に行う地域圏(小野本2024)とほぼ一致している。一般的傾向では、6世紀に衰退する要素を根強く残し、むしろそれが卓越する点で共通しており、1つの生活文化圏が浮かび上がる。
- 註6 同様な集落域・耕作域・祭祀場のセット関係は、IV期の代表的な拠点集落の1つ、本宮市高木遺跡群と類似している。また、同遺跡群の祭祀で使用された模造品(六鈴鏡・勾玉・管玉)は土製であり、石製模造品が使用された徳定遺跡の古さがこの点にも表れている(第7図、3号祭祀跡)。
- 註7 もう1例は、福島市八丁目城跡で出土している(棚倉町松並平遺跡に可能性のある資料あり)。徳定例で注目されるのは、同一調査区の至近距離から仏具の托が出土したことで、未決着の壺Gの用途を考える上で、花瓶(けびょう)説の傍証材料となる。

#### 【引用参考文献】

- 書籍・論文  
相田泰臣2019「古墳時代土器 後期」『新潟県の考古学Ⅲ』 新潟県考古学会  
青山博樹2015「集落遺跡はなにを語るかー福島県中通り地方の古墳時代集落と地域社会ー」『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』福島大学行政政策学類  
今泉隆雄1989「八世紀前半以前の陸奥国と坂東」『地方史研究』第221号 地方史研究協議会  
氏家和典1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会  
内田亜希子2002「富山県の黒色土器ー6～8世紀の県内資料を中心として」『富山考古学研究』(財)富山県文化振興事業団  
宇野隆夫1993「推古朝変革論」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会  
小野本 敦2024「東日本における蒸し調理展開と甕形土器に把手がない理由」『物質文化』第104号 物質文化研究会  
春日真実2007「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会  
管野和博2012「石背郡内における古代集落と交通」『福島考古』第54号 福島県考古学会  
北野博司1997「古代北陸の地域開発と出羽」『日本考古学協会1997年度秋田大会 蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会  
木本元治1999「阿武隈川流域における奈良時代寺院に関する新見」『福島考古』第40号 福島県考古学会  
古代学研究会2021『古墳時代から飛鳥時代へ 集落遺跡の分布からみた社会変化』六一書房  
熊谷公男 2015「国家支配のはじまりと蝦夷の抵抗」『東北の古代史』③蝦夷と城柵の時代 吉川弘文館  
坂井秀弥1989「新潟県の黒色土器ー6～8世紀を中心にー」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会  
坂井秀弥2008『古代地域社会の考古学』同成社



## 関東系土師器の初期資料と在地社会の再編

坂口 一1986「榛名山ニツ岳起源F A・F P層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

桜岡正信2009「古代東北と上野―捉えにくい地域間交流―」『古代社会と地域間交流―土師器からみた関東と東北の様相―』国士舘大学考古学会編

菅原祥夫2004「東北古墳時代終末期の在地社会再編」『原始・古代の日本の集落』同成社

菅原祥夫2007a「福島県中通り地方南部～福島県会津地方」『平成14～17年度 科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書 古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部

菅原祥夫2007b「東北の豪族居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』国立文化財機構 奈良国立文化財研究所

菅原祥夫2013「陸奥南部の国造域における大化前後の在地社会変化と歴史的意義」『日本考古学』第35号 日本考古学協会

菅原祥夫2015「律令国家形成期の移民と集落」『東北の古代史』③ 蝦夷と城柵の時代 吉川弘文館

菅原祥夫2021「会津型土師器の出自と外部波及の意義」『研究紀要』第19号 福島県文化財センター白河館

菅原祥夫2024『古代国家と東北境界領域の考古学』同成社

鈴木 雅2013「十郎田遺跡の7世紀集落」『宮城考古学』第12号 宮城県考古学会

高橋誠明2007「律令国家の成立期における境界地帯と関東の一関係」『国士舘考古学』第3号 国士舘大学考古学会

田中広明1991「東国の在地産暗文土器」『埼玉考古』第8号 埼玉考古学会

玉川一郎1981『舞台』天栄村教育委員会

辻 秀人1990「東北古墳時代の画期について（その2）―7世紀史の理解をめざして―」『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会

鶴間正昭2004「関東にみる新型土師器杯の出現」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』第20号 東京都埋蔵文化財センター

鶴間正昭2011「堅穴住居にみられる張り出し貯蔵穴」『東京考古 八王子中田遺跡の再検討―古墳時代集落研究の現状を考える』29号 東京考古談話会

東北・関東前方後円墳研究会2020『後期古墳の中の変革―536年イベントにみる気候変動との関わり 発表要旨集』

富田和夫2009「移民の携えた土器―北武蔵・上野由来の「関東系土師器」をめぐって―」『古代社会と地域間交流―土師器からみた関東と東北の様相―』国士舘大学考古学会編

仲田茂司1997「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学』第4号 日本考古学会

新納 泉2014「6世紀の気候変動を考える」『考古学研究』第60巻第4号 考古学研究会

藤沢 敦2015「不安定な古墳の変遷」『東北の古代史』②倭国の形成と東北 吉川弘文館

松本太郎2013『古代東国の土器と官衙』六一書房

望月精司 2007「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落」『日本考古学』第23号 日本考古学会

横須賀倫達2009「淵の上1・2号墳出土遺物の調査と研究」『福島県立博物館紀要』第23号

### 発掘調査報告書

郡山市教育委員会2014『徳定土地区画整理事業関連 徳定A・B遺跡―第1・2次発掘調査報告―』

郡山市教育委員会2015『徳定土地区画整理事業関連 徳定A・B遺跡―第3・4次発掘調査報告―』

郡山市教育委員会2016『徳定土地区画整理事業関連 徳定A・B遺跡―第5・6次発掘調査報告―』

子持村教育委員会1991『黒井峯遺跡発掘調査報告書』

福島県教育委員会1981『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅲ 徳定遺跡』

福島県教育委員会1992「山崎遺跡（2次）」『矢吹地区遺跡発掘調査報告10』

福島県教育委員会2002『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告2 高木・北ノ脇遺跡』

福島県教育委員会2023『阿武隈川上流河川改修事業 御代田地区遺跡調査報告1 徳定A・B遺跡』

福島市教育委員会2006「八丁目城跡」『平成17年度市内遺跡試掘調査報告書』

# 会津若松市一ノ堰B遺跡出土人面付土器の未報告資料の紹介

鶴見 諒平

## 要 旨

会津若松市一ノ堰B遺跡出土の未報告であった人面付土器片を紹介した。県内出土の人面付土器及び土偶形容器との比較から、一ノ堰B遺跡出土資料に見られる隆帯は、顔の一部を表現したものと考えられる。今回報告した人面付土器片は、土坑墓に伴って出土しているが、一ノ堰B遺跡以外には、会津若松市川原町口遺跡、栃木県栃木市大塚古墳内遺跡の土坑墓から人面付土器が出土している。これらの土坑墓はいずれも弥生時代中期中葉以降の時期のもので、福島県域とその周辺では当該時期まで墓域において人面付土器を使用していることがわかった。

## キーワード

一ノ堰B遺跡 人面付土器 土坑墓

## 1 一ノ堰B遺跡について

一ノ堰B遺跡は、会津若松市門田町面川字根岸に所在する。1987年に発掘調査が行われ、112基の土坑が検出された(福島県教育委員会1988)。土坑の覆土上面からは、破碎された土器が重なった状態で見つかっている。また、土坑の内12基からは、管玉や勾玉が出土している。これらの112基の土坑は、その形状や、玉類などが出土したことから墓であると考えられている。土坑墓上面から出土した破碎された土器は弥生時代中期中葉の二ツ釜式期のものであることから、土坑墓群もその時期のものと考えられている。112基という土坑墓数は、当該時期の東北地方南部では最大規模のものである。また、この発見を契機に、上面が破碎された土器で覆われるという特徴を持った土坑墓が広く認識されるようになった。芳賀英一はこのような土坑墓を、一ノ堰B遺跡例及び本宮市陣場遺跡例から、「陣場・一ノ堰B型土坑墓」と呼称している(芳賀1988)。

報文では、出土した弥生土器の「総破片点数は10万点を超えるものと思われる」と記載されており、報告書に掲載された資料以外にも多くの未報告資料が存在する。白河館では収蔵資料の整理・点検作業を適宜行っているが、その過程で、一ノ堰B遺跡の未報告資料の中に、報告中の弥生土器には見られない特徴を持つ資料を発見した。本稿では、その重要性を鑑み、資料を速報的に紹介しその位置づけについて若干の考察を行う。

## 2 未報告資料について

今回紹介する資料は、遺跡北部に位置する調査I区X区に所在す78号土坑・95号土坑から出土した弥生土器片である(第1図)。第1図1～4・6・7が78号土坑上面、同図5が95号土坑上面から出土している。78・95号両土坑は南北に並列していて、78号土坑上面からは、多くの土器が破碎され、集積した状態で出土している(第2図)。

資料は、いずれも隆帯を持つ壺形土器の頸部から胴部上半の破片である。隆帯の断面形は三角形を呈しており、指で挟んで丁寧にナデつけられたとみられる。隆帯の周囲には、線幅1mmの1本描きによる沈線が認められるが、ナデ等の調整により途切れる部分も存在する。近接した位置から出土していることから、同一個体の可能性があるものと考えられる。

次に各資料についてみていく。1～6は頸部片、7は頸部から胴部上半の破片である。

1は向かって右端が欠損するものの、「m」字状の隆帯が貼り付けられていたと推定される。中央の縦に伸びた隆帯は、わずかに向かって左側に曲がっている。隆帯に囲まれた内部には、左側に「の」字状の沈線文が認められ、欠損する右側に同様の沈線文が描かれていると思われる。

2も同様に「m」字形となるか、あるいは「n」状となる隆帯が貼り付けられてる。隆帯の内部の沈線文は「B」あるいは勾玉の形を呈する。また隆帯の下方にも横方向の沈線が1条認められる。



3は向かって左側が弧となる半円形の隆帯が貼り付けられている。その内側には沈線によって隆帯に沿った「C」字状の曲線文が描かれる。これらの文様のさらに右側にも同方向に曲がる弧状の沈線が確認できる。

4は隆帯の両端が欠損するものの、左上方が弧となる半円形を呈すると推定される。内側には3と同様、隆帯に沿った「C」字状の沈線文が描かれる。また、隆帯の外部にも隆帯に沿って弧状の沈線が1条確認できる。

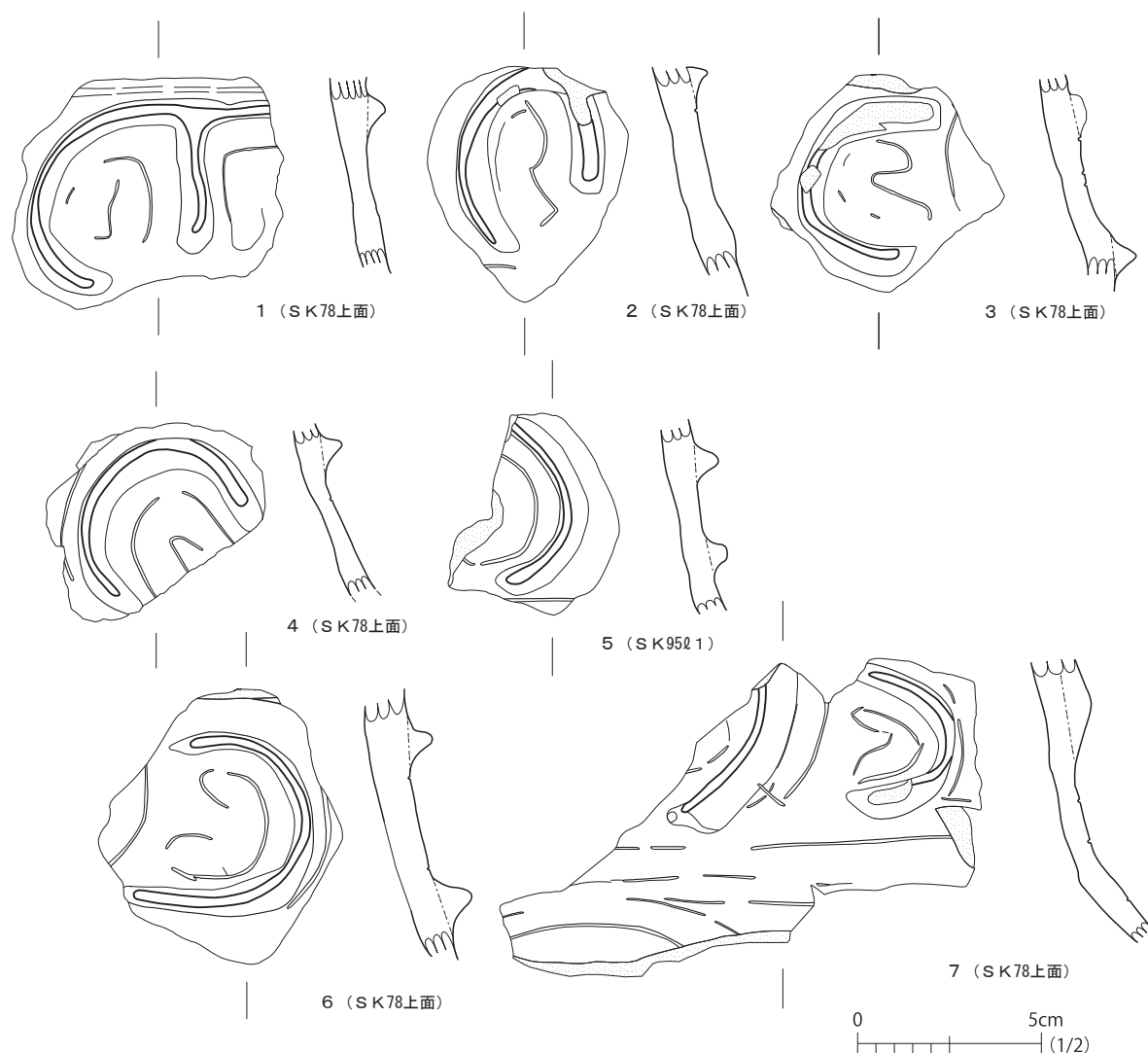
5は隆帯の左側が欠損するが、右側が弧となる半円形を呈すると推定される。内側には3・4と逆向きになるが、同様の隆帯に沿った曲線文が描がかれていると推定される。隆帯の下方には横方向の沈線も1条認められる。

6も右方が弧となる隆帯とその内側にこれに沿った曲線文が認められる。隆帯の左右にも同方向にか

カーブする弧状の沈線が描かれている。

7は上端が欠損しているが、頸部に右方が弧となる隆帯が2つ並列しているのが認められる。向かって右の隆帯は半円形を呈し、左の隆帯は欠損のため1同様「m」ないし「n」となるか、5・6と同様の半円形となるかは判別しかねる。それぞれの隆帯の内側にはこれに沿った曲線文、外側にも隆帯に沿った弧状の沈線文1条が描かれる。胸部上半部と思われる下方部分には横位の沈線が3条描かれ、さらに下位に渦巻文あるいは同心円文の一部であろう弧線が認められる。

これらの土器が出土した遺構の時期であるが、報文中に示された78・95号土坑出土土器片は二ツ釜式土器に比定されている。今回紹介した7点の資料も、報告書掲載資料と同様に沈線が1本描きであり、磨消縄文を用いずに渦巻状の文様を描く特徴を有していて、同じく二ツ釜式に相当すると考えられ

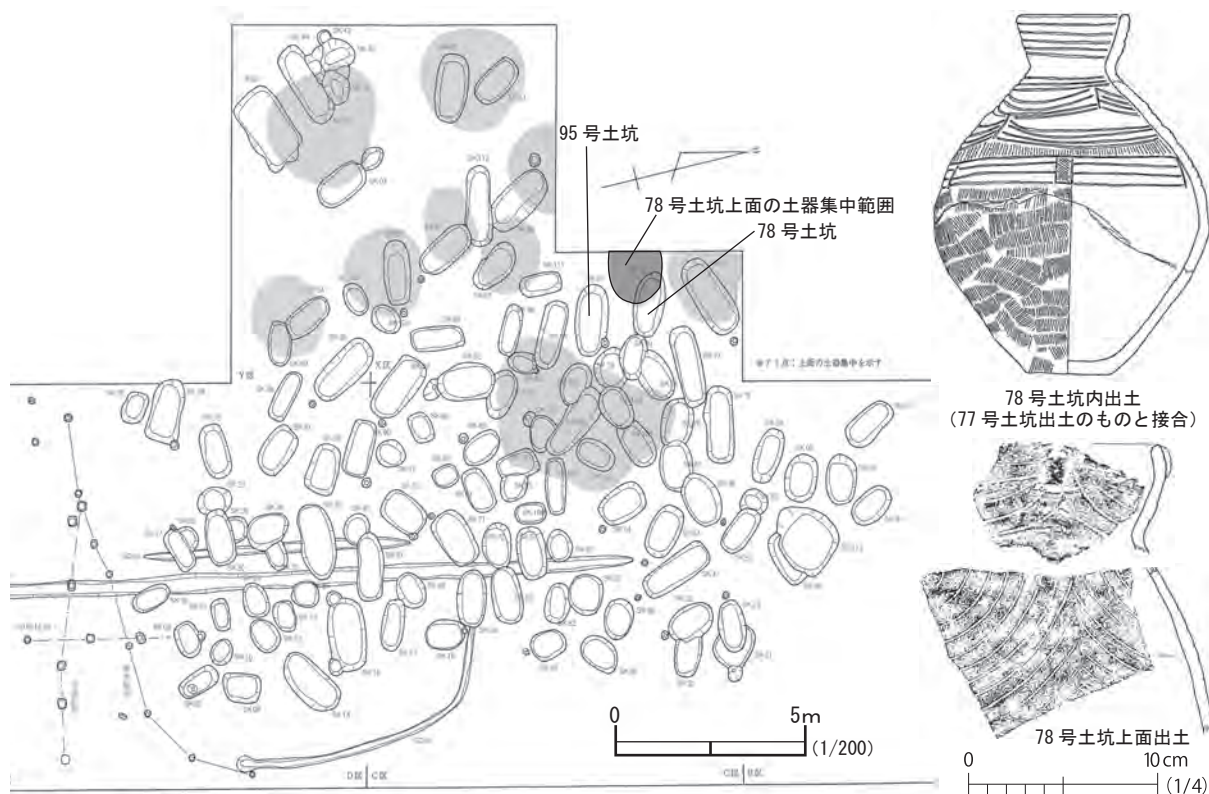


第1図 一ノ堰B遺跡の出土の人面付土器



写真1 一ノ堰B遺跡の出土の人面付土器





第2図 一ノ堰B遺跡の遺構群と遺物出土位置

る。一ノ堰B遺跡78・95号土坑から出土したこれらの資料は、「m」字状や半円形状の隆帯、及びその周囲に沿うような沈線文を組み合わせ、人面表現あるいは人面由来の装飾表現を施された土器の一部と筆者は考える。次章では、県内出土の人面付土器及び土偶形容器、加えて県外を含めた人面付土器及び土偶形容器の破砕された状態での出土例からこれを検討したい。

### 3 考察

#### (1) 県内出土の人面付土器・土偶形容器との比較

弥生時代では、人面付土器以外の顔が表現された土器としては、土偶形容器が存在する。人面付土器と土偶形容器は、石川日出志や黒沢浩、設楽博己などによって定義・分類されている(石川1987a・b、黒沢1997、設楽・石川2017、設楽2019など)。石川は、人面付土器を、「壺形土器の口頸に人の顔面像を付した土器」、土偶形容器を「脚部を欠いて腰部下面が底部となる土偶形の容器」と分類した。黒沢は、頭部に顔面を貼り付けるなどの土偶のつくり方と共通する特徴があるものを土偶形容器、土器の表面に顔のパーツを貼り付けてつくるものが人面付土器と

している。設楽は、黒沢の分類基準をもとに、顔の製作技術によって人面付土器と土偶形容器とを区分したが、後にその基準を見直し、胴部や底部が楕円形であるものを土偶形容器、円形のものを人面付土器としている(設楽・石川2017)。ここでは設楽の分類に従って県内の事例を見ていくと、人面付土器が5例、土偶形容器が4例出土している(第3図)。

白河市滝ノ森B遺跡からは、2点の人面付土器が出土している(江藤ほか1967、吉田2013)。第3図1は完形の資料で、口縁部に2面表現されている。眉と鼻は「T」字の隆帯を、また耳から頬、顎までを「m」字形に隆帯を貼り付けて表現している。また、隆帯上には等間隔で刺突も施されているが、耳には刺突が認められない箇所もある。目と口は沈線で四角く区画した中に斜方向の短沈線を充填している。第3図2は口縁部から頸部のみが残存している。頸部に耳の表現と思われる2つの隆帯が貼り付けられていて、それぞれ2箇所に刺突が見られる。それ以外に明確な顔の表現はない。第3図1は昭和15(1940)年に発見されたもので、後年に出土地点周辺を発掘調査した際には弥生時代の遺構は検出されなかった。第3図2は昭和44(1969)年の発掘調査で出土したものである。「溝状の遺構から出土して

おり、小堅穴的なものと推定する」と報文にある(江藤ほか1967)。規模2.5m×1.5mの不整形の土坑から出土したようである。いずれも弥生時代中期前葉に比定される。

石川町鳥内遺跡出土の第3図3は、顔部分は目・眉・鼻・耳が残存する(目黒ほか1998)。目は沈線による方形区画の中に細い短沈線を充填し、向かって右では中央付近に横方向の太い短沈線を付している。眉と鼻は、それぞれ別の隆帯を貼り付けている。鼻の先には2か所に刺突があり、鼻孔を表現している。鳥内遺跡では再葬墓のほかに、土器が埋納されていない土坑、周囲から破碎された土器・管玉、火を受けた人骨片、獣骨片が見つかった配石遺構も検出された。人面付土器は、この配石遺構の周辺から破碎された状態で見つかった。これらの土坑や配石遺構は、縄文時代晩期末から弥生時代中期の今泉式期の再葬墓よりも新しい中期前葉棚倉式期以降のものと考えられ、人面付土器もこの時期のものである。この遺構は、周辺で見つかった人骨が火を受けていたことから、遺体の二次処理の場で、土坑には二次処理された遺体が埋葬されたと報文では推定されている(目黒ほか1988)。

会津若松市墓料遺跡出土の第3図4は、土偶形容器に分類される。眉と鼻を「T」字形の隆帯を貼り付けて表現し、目と口の部分は沈線で描いている。目は鉤形の沈線を二つ重ねて表し、その下に渦巻形の沈線が描かれている。口は三重の菱形で表現し、沈線間には縄文が施されている。また、口部分の横側が左右に突出しているが、頬あるいは腕を表現したと考えられる。昭和49(1974)年の発掘調査で出土したものだが、概報のため出土遺構の記述がない。この資料が出土した発掘調査地点では、弥生時代初頭から中期中葉の南御山2式期頃までの土器が見つかった。その時期のいずれかのものと考えられる。

同じく墓料遺跡出土の第3図5は、人面付の土器片である。目や口は太いへら状の工具による沈線で、目は楕円形、口は十字に描かれている。鼻の部分だけ隆帯を貼り付けて表現する。鼻の付近から顎にかけて二重に円形の沈線が描かれる。目の周りには短沈線が縦方向に描かれ、そのさらに外側には弧線が確認できる。昭和44(1969)年に畑の耕作中に

発見されたもので、遺構に伴うものなのかは不明である。表現方法の違いから時期的には弥生時代前期以前に遡るものと思われるが、これについては後述する。

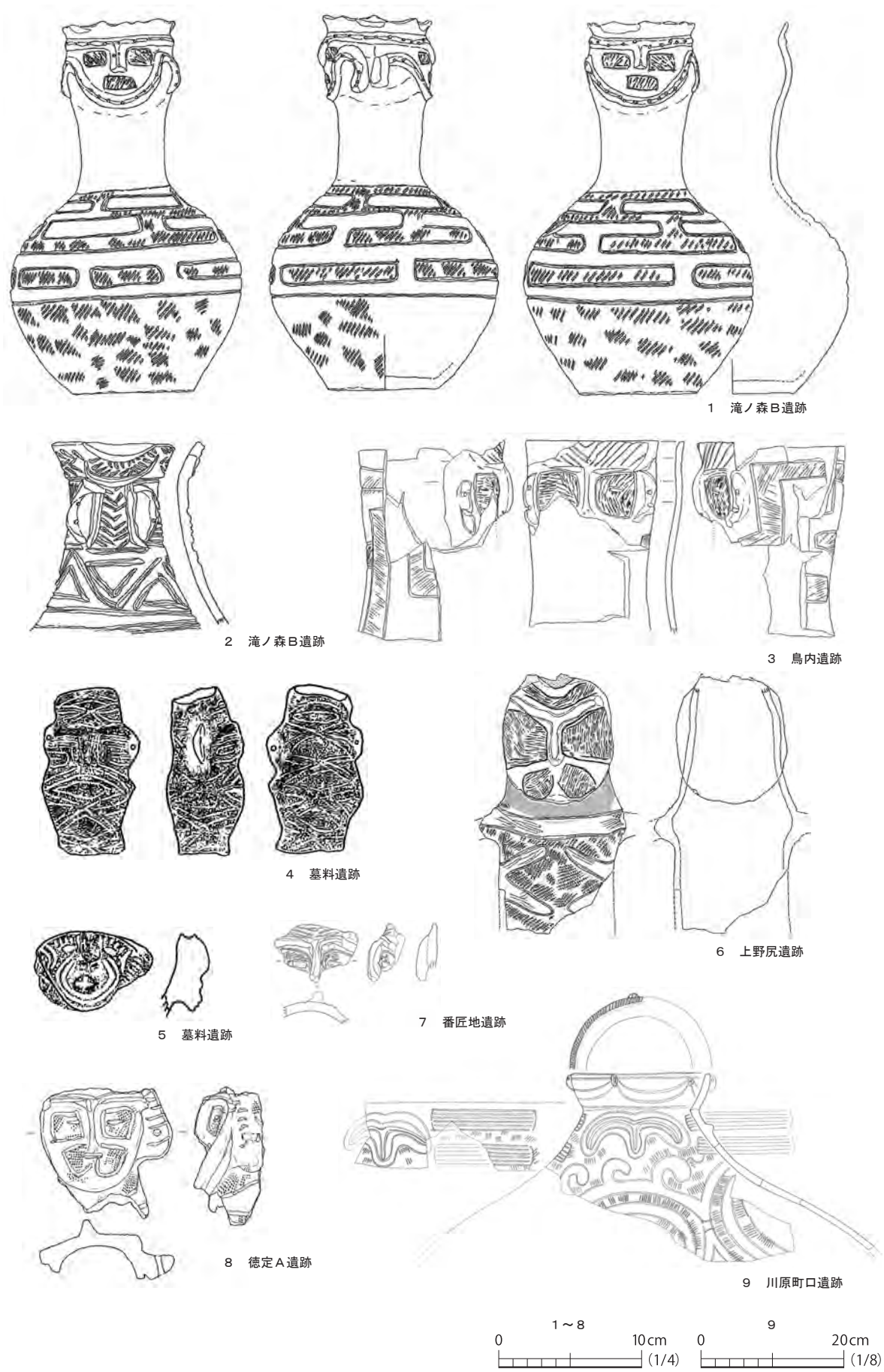
西会津町上野尻遺跡から出土した第3図6は、中空土偶として知られているが(木本2005)、設楽の基準では土偶形容器に分類される。顔は筒状の本体に貼り付けられた円板上に表現される。「Y」字形の隆帯を貼り付けて眉と鼻を表出している。目は沈線による台形の区画として表出され、内に細沈線を充填している。額部分も沈線区画の中に細沈線を充填する。口の部分には対向する「C」形の沈線区画を配し、それぞれ細沈線を充填している。後頭部から首周りにかけては赤彩されている。腕も表現されているが、欠損している。1900年頃に現磐越西線の工事中に発見されたものであり(小此木1930)、出土状況は不明である。そのため、詳細な時期は確定できないが、前期末頃から中期前葉のいずれかの段階と考えられる。

いわき市番匠地遺跡から出土した第3図7は、顔の前面の額から目付近のみが残存している(末永ほか2016)。報告中では人面付土器とされるが、設楽の基準では土偶形容器に分類される。鼻と眉を隆帯で表す。目は沈線で区画した中に、短い沈線を充填することで表している。遺物が出土した包含層からは弥生時中期前葉～後期中葉頃までの遺物が出土していて、その時期のいずれかのものと考えられる。

郡山市徳定A遺跡から出土した第3図8は土偶形容器である(福島県教育委員会1981)。顔の前面部分がほぼ残存している。眉が真一文字ではなく、鼻の上部分に刻みを有してわずかに凹む。眉の端部は顔の輪郭に沿って下方に曲がり、緩い「m」字状を呈する。目は沈線による方形区画の中に縄文を施し、横方向の短い沈線を付け足している。口は横方向の短沈線1条で表現している。その両脇には「C」字形の沈線区画があり、縄文が充填されている。これは上野尻遺跡例の表現と類似する。耳は向かって右側のみが残る。表面に4本の横方向の沈線と穿孔が1か所見られる。遺構外からの出土で、弥生時代中期前葉から中葉に位置づけられる可能性がある。

会津若松市川原町口遺跡から出土した第3図9は、壺の頸部に、「m」字状の隆帯を表裏2箇所





第3図 福島県内出土の人面付土器・土偶形容器

貼り付けている(堀金1994)。これは、眉と鼻を表しているものと考えられている。これ以外の人面表現はない。土坑墓の上面から破砕された状態で出土したもので、中期中葉の南御山2式期に比定される。

これらの事例のうち、墓料遺跡例第3図5は、太いへう状の工具で沈線を描き、目や口の箇所、沈線による区画が見られず、他の資料とは明らかに表現方法が異なっている。

鼻と眉の表現については、中期中葉までの第3図1・4・6・8は、「T」字形または「Y」字形の隆帯で表現し、中期中葉の川原町口遺跡例は「m」字形の隆帯で表現する。徳定A遺跡例は、眉の端部が緩く下がり、その中間的な特徴を有している。これらの点から見て、「T」あるいは「Y」字形のものから「m」字形に変化したと考えられる。

滝ノ森B遺跡例の第3図2は耳以外の表現がないが、半月形の隆帯を貼り付ける点は鳥内遺跡例にもみられ、顎から耳を一連で表現する滝ノ森B遺跡例の第3図1も、耳の箇所は半月形になっている。

目は鳥内遺跡例と徳定A遺跡例が沈線区画の中に横方向の短沈線を描いているが、滝ノ森B遺跡例の第3図1と上野尻遺跡例には見られない。8は、口部分にも横方向の短沈線があるが、1と6には見られない点も共通する。また、上野尻遺跡例と徳定A遺跡例は口部分に「C」字形の区画がある点は共通する。

また、目・口の表現がある資料は口縁部に顔が表現されているのに対し、眉と鼻又は耳のみの滝ノ森B遺跡第3図2と川原町口遺跡例では頸部に表現されているという特徴も認められる。

一ノ堰B遺跡出土資料と比べてみると、第1図1の隆帯は、「m」字形の隆帯が頸部に貼り付けられている点で、川原町口遺跡例と共通する。第1図2も隆帯の貼り付け方が1に近く、眉と鼻を表現したものの可能性もある。次に、第1図3～6のような半月形の隆帯は、滝ノ森B遺跡例の第3図2の表現に近く、これが左右両方あることから耳を表現している可能性がある。

これらの点から、一ノ堰B遺跡出土の土器片に見られる隆帯は、中期中葉の二ツ釜式期における人面表現あるいは人面表現から変化した装飾の一部だと考える。

これらの出土事例を先行研究の設楽の分類に従ってみていきたい。設楽は人面付土器をJ、A、B、C、Wの5つに分類したが(設楽・石川2017)、後に人面付土器Wを人面付土器Bに再編しなおし、人面付土器Aに含まれていた栃木県出流原遺跡出土例に代表される口を大きく開けた表現のものや、耳や鼻などの一部のみを表現したものを人面付土器Pに分類している。(設楽2019)。この中で、福島県出土事例は、人面付土器Jと人面付土器A、人面付土器Pに該当する。まず、人面付土器Jは、甕形土器や深鉢形土器の口縁部に黥面土偶の顔面部を付けたものとされ、縄文時代晩期終末頃に位置づけられている。県内出土資料では墓料遺跡出土の第3図5が該当する可能性が高い。墓料遺跡の再葬墓からは、縄文時代晩期終末にあたる大洞A'式の土器と弥生時代前期初頭の土器と一緒に出土している。第3図5は採集資料のため再葬墓に伴っていたかは不明だが、再葬墓が形成しはじめられた頃の資料と推定される。

人面付土器Aは、「壺形土器の口縁部に隆線によって顎を表現し、それと口縁で区画された中に目・鼻・口を貼り付け、側面に耳を貼り付ける例を典型とする」とされ、滝ノ森B遺跡出土の第3図1と鳥内遺跡例が該当する。

一方で、滝ノ森B遺跡第3図2や、川原町口遺跡例は、顔の一部の表現のみであることから、人面付土器Pに該当する。一ノ堰B遺跡例は全体の表現がわからないが、川原町口遺跡例との共通点から、人面付土器Pに該当すると考えておきたい。

## (2)人面付土器・土偶形容器の出土遺構

人面付土器・土偶形容器は再葬墓と関連の強い遺物として知られるが、一方でこれを絶対視できないという指摘もある(石川1987b)。福島県では、現状の資料からは、再葬墓は中期前葉頃までは継続し、これ以降に消失し、中期中葉の南御山2式期に土坑墓が出現するといわれている(石川2009)。

今回取り上げた人面付土器及び土偶形容器の中で、再葬墓から出土したことが明確な事例はなく、鳥内遺跡、滝ノ森B遺跡第3図2のように他遺構に伴う可能性があるもの、川原町口遺跡のような土坑墓に伴う事例がある。

まず、鳥内遺跡例は、前述したように配石遺構に

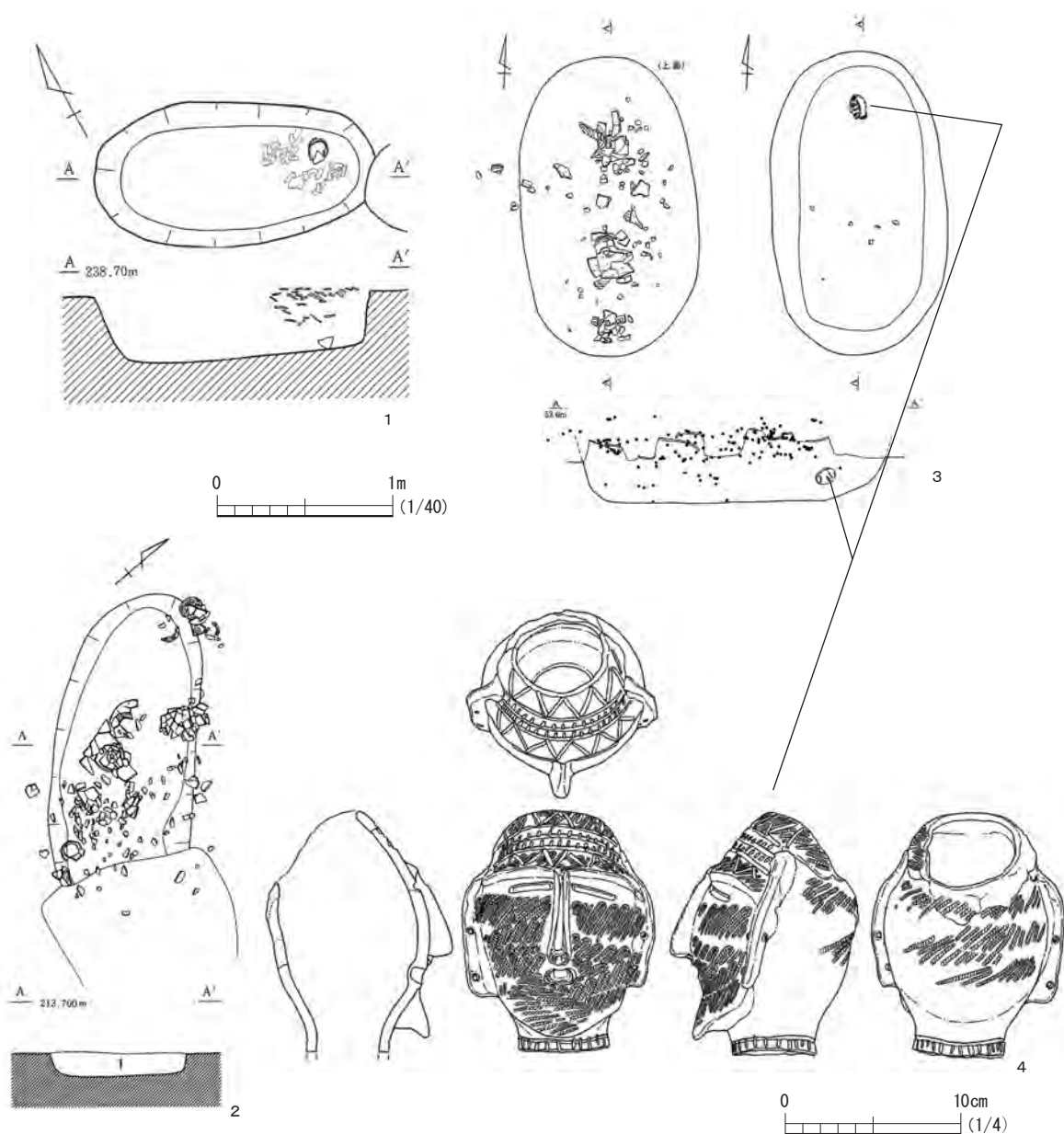


伴うもので、再葬墓よりも新しい時期のものと考えられる。この遺構では、破砕された土器や管玉が伴うことから、「陣場・一ノ堰B型土坑墓」に通じるところがあり、「再葬制から再葬しない土坑墓へと移行する際の過渡期の墓制」として位置付けられる可能性が指摘されている（角田 2006）。

滝ノ森B遺跡の第3図2の出土地点でも、遺構の覆土上層の腐食土から多くの破砕された土器が出土している。その出土状況は写真が掲載されており、形の残った土器は倒立しているか、横倒しの状態で遺構内から出土したことが記載されている（江藤ほか 1967）。遺物の出土状況の記載から見て、遺構の

上面に破砕された土器を伴うことから、再葬墓とは異なる遺構であった可能性を考慮しておくべきと考える。また、第3図2は胴部が残っていない資料だが、報告では胴部と推定される箇所が、遺構上面の腐食土中や遺構内から細片となって出土したことにも触れられている（江藤ほか 1967）。鳥内遺跡例も胴部は確認されていない点が共通し、この2例では意図的に頭部が表現された箇所と胴部とを分けた可能性がある。

土坑墓に人面付土器が伴う川原町口遺跡例では、中期の南御山2式期～川原町口式期の土坑墓が29基見つかっている。その内、人面付土器はYSK18と



1. 一ノ堰B遺跡78号土坑 2. 川原町口遺跡YSK18  
3. 大塚古墳群内遺跡SK-16 4. 大塚古墳群内遺跡SK-16出土人面付土器

第4図 人面付土器が出土した土坑墓

される土坑墓から出土した。土坑上面は破碎された土器で覆われていて、陣場・一ノ堰B型土坑墓に分類できる（第4図2）。人面付土器は、前述のように南御山2式期のものと考えられる一方で、この他の出土土器は、ミガキが沈線間のみに限られ、沈線の施文が一本描きであることから、二ツ釜式期のものと考えられる。そのため、土坑墓自体は二ツ釜式期のものと推定される。県内では今のところ土坑墓に人面付土器が伴う確実な事例は他に確認されていないが、隣県の栃木県に類例がある。

栃木県栃木市大塚古墳群内遺跡では、15基の弥生時代の土坑が検出されている。その内の12基が墓と考えられる（亀田2001）。土坑墓と土器棺墓が確認されていて、土坑墓は円形のものと長楕円形のものがある。土坑の堆積土上面からは、破碎された土器が集積した状態で検出されていて、陣場・一ノ堰B型土坑墓に分類できる。これらの土坑墓のうち、SK-16から、人面付土器が出土した（第4図3）。人面付土器は、頭部のみが堆積土の中層付近から出土し、胴部は土坑内からは発見されていない。

人面付土器（第4図4）は、立体的に顔が表現がされたもので、耳・眉・鼻は粘土を貼り付け、目と口は孔をあけて表現している。また鼻には、刺突によって鼻腔が表現され、両耳にはそれぞれ2つの孔が開けられている。額部分には、横方向の沈線を3条描き、その上下に縄文を施した後に、鋸歯文を描く。また、沈線間には刺突がなされている。頬から顎にかけては密に縄文を施し、後頭部には疎らに縄文を施文している。首には横方向の沈線を2条描き、その間に縦長の刺突がされている。

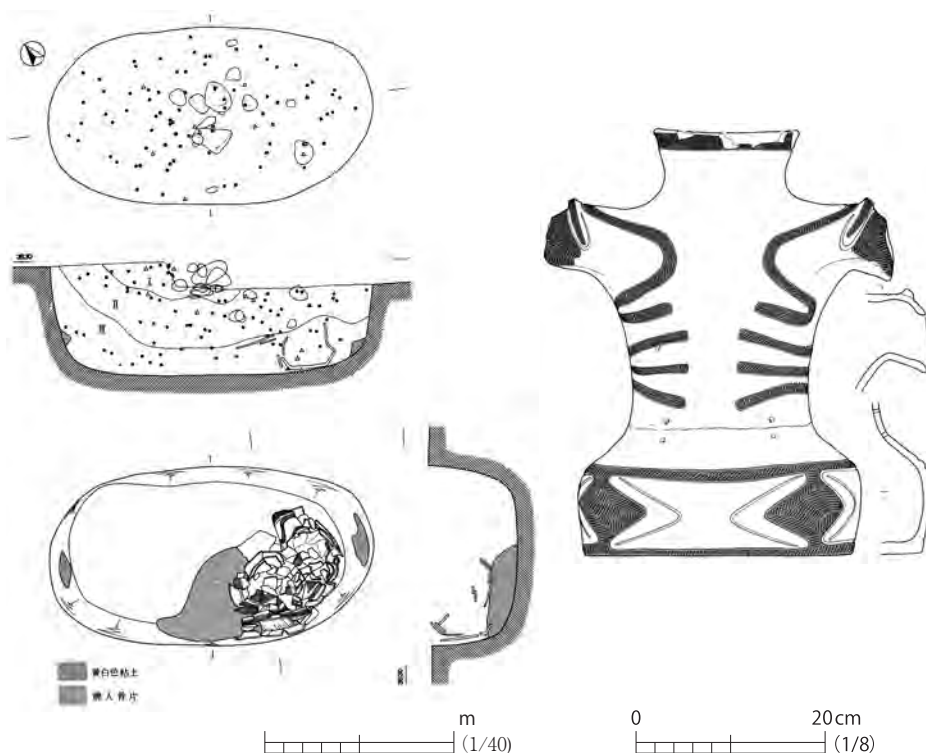
大塚遺跡から出土した土器は、重フラスコ文、鋸歯文等の文様がみられ、壺の口縁部が

肥厚しているものがあることから、御新田式期のものと考えられている。御新田式には二ツ釜式、川原町口式の土器が伴うことが指摘されている（石川1996）。この土坑や周囲の土坑墓に沈線が1本描きの二ツ釜式併行期と考えられる東北南部系の土器も伴う。

また、頭部のみが出土し、胴部が確認できない出土状況は、鳥内遺跡例や滝ノ森B遺跡例と類似する。この事例も、意図的に顔が表現された箇所と胴部とを分けて、顔の部分だけを土坑墓に埋納したのと考えられる。

以上3例が、県内及び隣県で確認できている土坑墓に人面付土器が伴う事例である。出土遺構の時期はいずれも二ツ釜式併行と推定でき、一ノ堰B遺跡と同時期において福島・栃木県域に、破碎された人面付土器が伴う土坑墓が存在することがわかる。

一方、これらの事例よりも古い時期と考えられる土坑墓に土偶形容器が伴う事例がある。新潟県新発田市村尻遺跡では再葬墓と土坑墓が同じ墓域内で確認された（関ほか1982）。確認された遺構は、再葬墓が9基、土坑墓が2基である。土坑墓である12号土坑は、弥生時代中期初頭から前葉頃の土坑とみられている（第5図）。この土坑では、一度遺体を埋葬した土坑を、二次葬に再利用した可能性が考えら



第5図 村山遺跡の土坑と土偶形容器



れていて、土坑墓と再葬墓の性格を併せ持つ可能性がある。この土坑の底面からは、顔の表現がない土偶形容器が見つかったほか、その下からは副葬品と考えられる石器が検出された。さらに、底面からは焼人骨も検出されたほか、加工された人骨も出土している。焼人骨は土坑墓の主體的となる遺体とは別に埋葬されたものであると考えられている。

この土坑からは、ほかに甕1点が出土しているが、報文中の検討では底面に置かれたものではなく、土坑を一定程度埋めた後にその上部に置いたものと考えられている。村尻遺跡の土偶形容器は割れた状況で出土していることに注意しておきたい。これは意図的に破碎されたものか、埋納後に土の圧力で割れたものなのかは判断できないが、土偶形容器には意図的な打撃痕が見られるとされている(石川1982)。仮に、この痕跡が埋納前に意図的に破碎したものであった場合、この土偶形容器は納骨器としては使用されていなかった可能性もある。

## 4 おわりに

本稿では、一ノ堰B遺跡の人面付土器を紹介した。これまで同遺跡出土遺物の中に、人面付土器があることは報告されておらず、紹介できた意義は大きいと考える。

また、福島県及び隣県の栃木県においては、再葬墓の終焉後にも人面付土器が製作され、葬送に用いられたことが確認できた。一ノ堰B遺跡例からは、二ツ釜式期まで人面付土器が残ることも確認できた。県内及び隣県での人面付土器の出土状況を見ると、顔が表現された箇所と胴部とを意図的に分けて、頭部のみを残したと考えられる事例も共通してみることができる。土器に人面あるいはそれから変化した装飾を付すことや、顔を表現した箇所と同胴部とをわける行為をした意味については今後の検討課題と考える。

## 【引用参考文献】

- 石川日出志1982「村尻遺跡出土のヒト形土器」『村尻遺跡Ⅰ』新発田市教育委員会
- 石川日出志1987a「人面付土器」『季刊考古学』第19号 雄山閣
- 石川日出志1987b「土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究』8 雄山閣
- 石川日出志1996「東日本弥生中期広域編年の概略」『YAY!』弥生土器を語る会20回到達記念論文集 弥生土器を語る会
- 石川日出志2009「弥生時代壺再葬墓の終焉」『考古学集刊』第5号 明治大学文学部考古学研究室
- 石田明夫2002『墓料遺跡 平成13年度墓料遺跡範囲確認調査報告書』会津若松市文化財調査報告書第78号 会津若松市教育委員会
- 江藤吉雄・目黒吉明・穂積勇蔵1967「福島県表郷村滝ノ森遺跡調査報告」『福島考古』第8号 福島県考古学会
- 小此木忠七郎1930『福島県発見石器時代土偶図版解説』史蹟名勝天然記念物調査報告4 福島県
- 亀田幸久2001『大塚古墳群内遺跡・塚原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第244集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ県生涯学習文化財団
- 木本元治2005「上野尻遺跡」『西会津町史』別巻3 考古資料 西会津町史刊行委員会
- 黒沢浩1997「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル』№416 ニュー・サイエンス社
- 設楽博己・石川岳彦2017『弥生時代人物造形品の研究』同成社
- 設楽博己2019「弥生時代における人面付土器の分類をめぐって」『泉坂下遺跡と再葬墓研究の最前線』季刊考古学別冊29 雄山閣
- 鈴木貞夫・原則文1977『墓料 福島県会津若松市一箕町墓料遺跡調査概要』会津若松市教育委員会
- 末永成清・竹田裕子・鈴木隆康・猪狩みち子・矢島敬之2016『久世原館跡5・番匠地遺跡4』いわき市埋蔵文化財調査報告第173冊 いわき市教育委員会・公益財団法人いわき市教育文化事業団
- 関雅之・田中耕作・石川日出志・阿部朝衛・国島聡・増子正三・葛西功・田中敬子・山口敏1982『村尻遺跡Ⅰ』新発田市教育委員会
- 角田学2006「鳥内遺跡における弥生時代中期前葉期の様相」『史峰』第34号 新進考古学同人会
- 芳賀英一1988「福島県に於ける弥生時代墓制の展開」『東日本の弥生墓制—再葬墓と方形周溝墓—』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会
- 福島県教育委員会1981『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第92集
- 福島県教育委員会1988『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅵ』福島県文化財調査報告書第191集
- 堀金靖1994『川原町口遺跡』会津若松市教育委員会
- 目黒吉明・柴田俊彰・芳賀英一・梅宮茂・中村嘉男・小豆畑毅・高岡正之・金子浩昌・日下部善己・渡邊一雄・本間宏・吉田秀享・今野徹・石本弘・松本茂・石井宏1988『鳥内遺跡』石川町埋蔵文化財調査報告書第16集 石川町教育委員会
- 吉田秀享2013「滝ノ森B遺跡」『表郷村史』第2巻 資料編 表郷村史編さん委員会

## 【図版出典】

- 第1図 筆者実測・トレース
- 第2図 福島県教育委員会1988に一部加筆
- 第3図 1・2：吉田2013、3：目黒ほか1998、4・5：石田2002、6：木本2005、7：末永ほか2016、8：福島県教育委員会1981、9：堀金1994
- 第4図 1：福島県教育委員会1988、2：堀金1994、3・4：亀田2001
- 第5図 関ほか1982

# 塩沢上原A・B遺跡出土の三角柱状土製品

河西 久子

## 要 旨

三角柱状土製品は縄文時代中期～後期の北陸・越後地方を中心に分布がみられる土製品である。当館収蔵の二本松市塩沢上原A遺跡出土の管状土製品と報告されている土製品及び同市塩沢上原B遺跡出土の土製品については、かねてより三角柱状土製品であると指摘がなされている。観察の結果、両土製品は三角柱状土製品の要件を満たすと判断したため、今回三角柱状土製品として、改めて実測図を作成し、観察所見を記した。詳細な観察の結果、特に穿孔法に関して新たな知見を得ることができた。

## キーワード

三角柱状土製品 縄文時代 塩沢上原A・B遺跡

## 1 はじめに

三角柱状土製品とは、三角塼形土製品とも呼ばれている縄文時代中期～後期の北陸・越後地方を中心に分布がみられる土製品で、用途は明らかになっていない。

古くは大正13年に『諏訪史』のなかで鳥居龍蔵によって紹介されている(鳥居1924)。その後、八幡一郎によって、初めての論考が発表され、「三角塼形」<sup>註1</sup>という名称が与えられた(八幡1928)。昭和の戦前期には近藤勘次郎、藤森栄一の論考(近藤・藤森1937)等、幾つか考察がみられた。出土例の増加した昭和50年代に至って、小林康男や小島俊彰によって集成がなされている(小林1980、小島1983)。その集成の中で小島は、「置くべき面を意図して作られたものが多い」、「置くことのできる三角形のつつ状のものが三角塼形土製品の基本」と指摘している。また、県内においては、大竹憲治による集成で今回報告する塩沢上原B遺跡を含む8例が報告されている(大竹1992)。

今回、当館収蔵資料を点検する過程で、二本松市塩沢上原A遺跡と同市塩沢上原B遺跡からそれぞれ出土した2点の三角柱状土製品を詳細に観察する機会を得た。これらの資料は、発掘調査報告書に掲載されている資料であるが、三角柱状土製品の名称で報告されていない、あるいは記述そのものがない。そのため、今回再実測を行い、改めて観察所見を記すこととした。

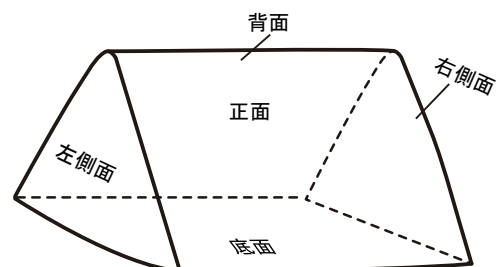
## 2 塩沢上原A・B遺跡について

今回紹介する三角柱状土製品が出土した塩沢上原A・B遺跡は、安達太良山麓から延びる台地上に立地する。両遺跡はおよそ50mと近接した位置関係にある。

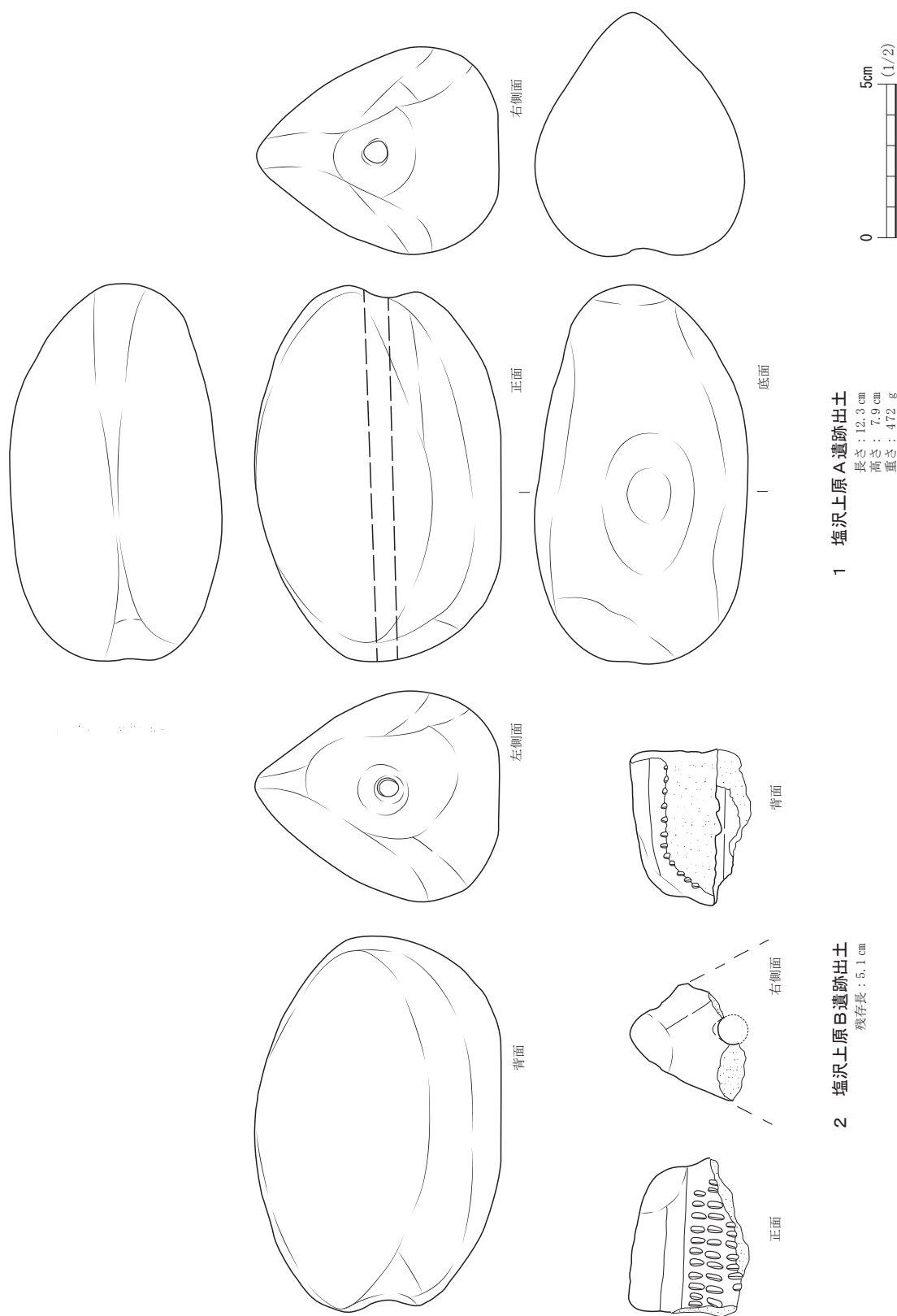
東北自動車道建設に先立ち昭和46(1971)年から発掘調査が実施され、縄文時代中期後葉を主体とした複式炉を有する集落遺跡であることが確認された。その成果は『東北自動車道遺跡調査報告』において報告されている(福島県教育委員会1975)。その後、塩沢上原A遺跡については、昭和59(1984)年に福島県立博物館による学術調査が行われた(福島県教育委員会1985)。その後も二本松市教育委員会が主体となり、宅地造成に伴う試掘調査や道路拡幅に伴う発掘調査が行われている。

## 3 資料の特徴

第2図1は、塩沢上原A遺跡Ⅱ区第1号住居跡から出土したものである。報告では、「管状土製品」とされており、「大型の錘とも考えられる」とも記述されている。しかし、先述した小島俊彰の論に従えば、本資料は、丸みはあるが、三角形のつつ状を



第1図 各部位の名称



1 塩沢上原A遺跡出土  
長さ：12.3 cm  
高さ：7.9 cm  
重さ：472 g

2 塩沢上原B遺跡出土  
残存長：5.1 cm

第2図 塩沢上原A・B遺跡出土三角柱状土製品（1）





1 塩沢上原A遺跡出土

2 塩沢上原B遺跡出土

穿孔部拡大写真

写真1 塩沢上原A・B遺跡出土三角柱状土製品(2)

呈している上、後述するように安定して置くことができる面を有しており、三角柱状土製品の要件を充たしているといえる。

まず本資料には、中央にくぼみを有している1面がある。くぼみの周囲は平坦で、この面を下にして置くことを意識したと想定されるつくりとなっている。各部位の名称は小林の論考を参考にして、この面を底面として置いた状態から第1図のように呼称する<sup>註2</sup>。正面形は、不整楕円形で断面は隅丸三角形を呈している。長さ12.3cm・高さ7.9cm・重量は472gを測る。孔は、両側面の中央からほぼ水平に穿たれている。孔の直径は左側面が約0.7cm、右側面は約0.5cmで大きさに違いがみられる。孔の周囲には若干摩耗がみられる。焼成は良好で正面及び背面はにぶい橙色、底面は灰褐色である。また、正面と背面には黒斑がみられ、底面を下にして置いた状態で焼成したことが推測される。文様は施されていないが、底面以外の面は丁寧に磨かれている。

第2図2は、塩沢上原B遺跡から出土した三角柱状土製品の破片である。ただし、出土地について記録がないため詳細は不明である。残存長は5.1cmで、正面形は中央に向かって緩やかな丸みを持つ。孔の直径は約0.8cmで、側面の孔の周囲には、高さ約0.4cmほどの盛り上がりがある。穿孔時に使用した工具により粘土がよったために生じた盛り上がりであろうか。破断面から孔の状態を観察すると、穿孔の際に使用した工具によってついたと考えられる擦痕がみられる。また、孔の出入口付近には穿孔後になるなどして、孔の内面を整えた痕跡がみられる。表面の色調は明橙褐色で、破断面は灰黄褐色である。へら状の工具で右方向から突き込んで付けられた刺突文が等間隔で配されている。施文後には各面とも磨きが行われている。また、刺突文の上方には直線的な浅いくぼみが確認できる。

#### 4 まとめ

今回の資料の年代について、第2図1は、縄文時代中期末葉（大木10式期）の竪穴住居跡の堆積土から出土している。堆積土からの出土であるため、この住居跡に伴うとは断定できないが、当該遺跡の年代幅である縄文時代中期前葉から中期末葉に収まるものだと考えている。第2図2は、出土地点や出

土状況が不明で、文様の特徴からも年代を推測することは難しいが、遺跡の年代を考慮して現段階では、縄文時代中期末葉（大木10式期）頃の可能性があると考えている。

今回、2点の三角柱状土製品を紹介した。このうち塩沢上原A遺跡出土の例は、使用法に関しては、孔周囲の摩耗痕は使用の痕跡であると推測される。例えば、紐などを通していた可能性もあろう。

塩沢上原B遺跡出土例の孔の観察からは、穿孔時の工具によって生じたと考えられる粘土の盛り上がりや、擦痕などから、成形した後に棒状の工具を突き込んで穿孔していることがわかり、穿孔法復元に新たな所見を加えることができた。

塩沢上原A遺跡出土の例のように当初は三角柱状土製品として報告されていなくとも、再検討を行っていくことで、当該土製品と判断されるものがまだ存在していると考えている。今後は県内の他の事例も検討し、本報告のように、痕跡から類推される使用法の考察を行うことで、新たな所見が得られるものと考えている。

本稿執筆にあたって、元福島県文化振興財団遺跡調査部の佐藤啓氏に多くの教示を得た。末筆ながら感謝申し上げます。

#### 【註】

- 註1 面が三角形で横に長い立方体のこと。なお、「塙」と「柱」は同じ意味をもつが、本稿では常用漢字の「柱」という字を使用した。
- 註2 作図の際に置いた方向を便宜的に正面と背面に分けて表現した。

#### 【引用参考文献】

- 大竹憲治1992「所謂・三角塙形土製品小考―矢大臣遺跡の資料を中心として―」『矢大臣(新田)遺跡』福島県小野町教育委員会
- 小島俊彰1983「三角塙形土製品」『縄文文化の研究9』雄山閣
- 小林康男1980「三角塙形土製品考」『長野県考古学会誌』37号 長野県考古学会
- 近藤勘次郎・藤森栄一1937「越後中期縄文文化馬高期に於ける土製装身具の発生について」『考古学』第8巻第10号
- 鳥居龍藏1924『諏訪史』信濃教育会諏訪部会
- 福島県教育委員会1975『東北自動車道遺跡調査報告』
- 福島県教育委員会1985『84 塩沢上原A遺跡発掘調査概報』
- 八幡一郎1928「立体土製品」『考古学研究』第2巻第3号

# ふくしまのおひなさまをつくろう

## ―県内文化財を題材とした体験学習への取り組み―

青木 愛子

### 要 旨

福島県文化財センター白河館は文化財の収蔵・展示・保管の機能だけでなく、文化財の保護と活用、そして教育普及の役割も担っている。開館以来、収蔵資料や福島県内の文化財をテーマにした体験学習を来館者に提供している。

只見川流域で伝統的に行われてきた「雛流し」において用いられる紙雛づくりを、令和5年度いつでもできる体験学習月替わりメニュー「ふくしまのおひなさまをつくろう」として取り入れた事例を紹介する。

### キーワード

年中行事 体験活動 重要無形民俗文化財 雛流し 教育普及 文化財活用

## 1 はじめに

福島県文化財センター白河館では開館以来、教育普及を目的として、福島県の当館収蔵品をはじめとする考古資料や年中行事等の民俗などの文化財を活用した体験学習を提供してきた。常設の体験スペースである体験活動室では、個人来館者向けプログラムである「いつでもできる体験学習」として「勾玉づくり」や「火おこしに挑戦」があり、その他に「月替わりメニュー」を提供している。

今回紹介する「ふくしまのおひなさまをつくろう」も「月替わりメニュー」のひとつとして実施した。この体験学習メニューは、「只見川流域の雛流し」に用いる人形を参考に雛人形を作成する体験である。ここではその導入の経緯と体験のようすについて報告する。

## 2 只見川流域の雛流し

「ふくしまのおひなさまをつくろう」のモデルとした「雛流し」は、福島県西部会津地方の只見川流域において伝統的に行われてきた行事である。特に三島町に残るものは、平成11(1999)年に福島県の重要無形民俗文化財である「三島の年中行事」の一つとして追加されている。以下、「雛流し」について説明する。

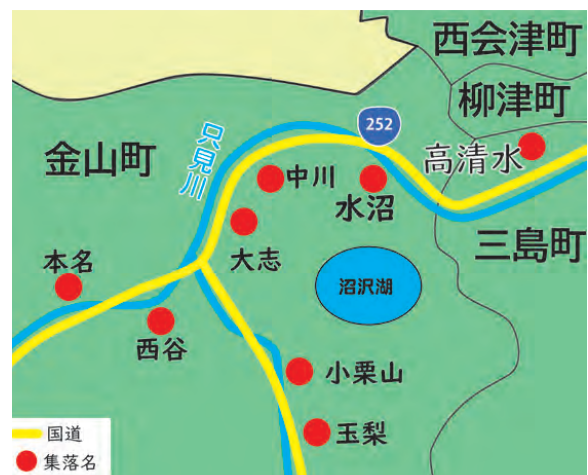
### (1) 雛流し

#### ①福島県の雛流し

只見川流域で広まった「雛流し」は、桃の節供（節句）に女の子の健やかな成長と、家族の無病息災と長寿を願い、千代紙などでつくった手づくりの紙雛を3月3日に床の間や座敷に飾り、翌日只見川へ流す行事である。この伝統行事は金山町水沼地区をはじめ中川・大志・西谷・本名・小栗山・玉梨、三島



第1図 只見川の位置



第2図 雛流しが行われていた集落



町高清水地区で行われていたことが確認されている(第1・2図)<sup>註1</sup>。

現在は三島町高清水地区で行われているのみであるが、金山町水沼地区では少なくとも平成16(2004)年までは行われていたとされる。

三島町高清水地区の雛流しは高度経済成長期の昭和30(1950)年代に宮下発電所が建設され、雛を流す場所がなくなり、一度途絶えたが、時を経て昭和60(1985)年頃、三島町内の年中行事保護活動のもとに復活し、現在に至るまで続いている。

## ②雛流しとひなまつり

一般的に「ひなまつり」は3月3日に雛人形や雛道具を飾り、それに桃の花や白酒を添えて、女の子の無事な成長を願う年中行事である。

「雛流し」は現在の「雛飾り」の古い姿ともいわれている。全国的にみると京都府、岡山県、鳥取県、東北では山形県で行われている。中には福島県のように重要無形民俗文化財に指定されているところもある<sup>註2</sup>。福島県内での起源は不明で、文献として記録が残っていない。

「ひなまつり」は、平安時代、紙でつくった人形(ひとがた)をさすり心身の穢れを移して川に流す風習(雛流し)と、貴族の女の子たちの「ひいな遊び」という人形遊びが結びつき、ひな人形を飾るお祭りになったといわれる。

雛人形は遠い淡島神社(淡島様)<sup>註3</sup>まで行くと伝えられ、この雛人形に女性たちの災いや病気を移して流すものとされてきた。流し雛は淡島神社への代参の役割を担っていたと推測される。

江戸時代以降には、「ひなまつり」は年中行事として広まり、各家庭に紙雛や人形雛を飾って成長を祝う、現在の「ひなまつり」へとつながった。

## (2) 行事の概要

現在も続いている三島町高清水地区のものと近年まで行われていた金山町水沼地区のものについては、まとまった記録がある(福島県教育委員会2005)<sup>註4</sup>。

両地区とも3月の節供前から紙雛をつくりはじめる。各家庭の女性の数だけ紙雛をつくり、3月3日に床の間や座敷に紙雛や菱餅、甘酒を飾る(写真1・2)。そして、翌日只見川へ紙雛を流す。

## ①三島町高清水地区(写真3～5)

3月3日に紙雛を床の間に飾る際、男児がいる場合は紙雛の脇に張り子の天神様(会津天神)や天神様の掛軸を掛けて、男の子の成長も一緒に祈る。3月4日に地区の子どもが木箱を持って地区内をまわり、各家庭の紙雛を回収し、地区全部の紙雛をまとめて只見川に流していた。

しかし、近年、地区内在住の子どもがおらず、高清水婦人会や地区に縁のある子どもが回収や流す役を担っている。

なお、三島町教育委員会によれば、2025年は久しぶりに旧来通りのかたちで地区内在住の子どもが紙雛の回収や流す役を行う予定とのことである。



写真1 床の間に飾る様子(三島町)



写真2 床の間に飾る様子(金山町)



写真 3 雛を回収する様子 (2004 年)



写真 4 雛を回収する様子 (2024 年)

#### ②金山町水沼地区(写真6)

高清水地区と異なるのは、各家庭の紙雛を回収するのではなく、3月4日に各家庭でつくった紙雛をその家庭の女性が持参して集まる点である。また、川辺ではなく、橋上から只見川へと投げ入れていた。

#### (3) 紙雛の材料と作り方

「只見川流域の雛流し」に使う紙雛は、三島町高清水地区と金山町水沼地区の両地区とも材料及びつくり方がほぼ共通しているため、以下に材料及びつくり方についてまとめた。

##### [材料]

- ・胴体部分、着物、帯：千代紙や包装紙
- ・頭部：障子紙、綿、白糸
- ・髪：黒紙(障子紙を黒く塗ったもの、黒和紙)

- ・髪飾り：千代紙、待ち針

##### [つくり方]

- 1) 頭部は、障子紙に綿を詰めて丸めてつくった顔と障子紙を折ってつくった首を白糸で結ぶ。髪は短冊状に切った黒紙で髷(まげ)を結び、頭部と縫い合わせる。
- 2) 胴体部分をきれいな千代紙や和紙で着物のように袖を切る。水沼地区では紙に折り目をつけて切り抜く。
- 3) 頭部を2)の着物の形にした胴体部分と結合し帯をつけて完成。

##### (4) 紙雛の特徴

両地区の特徴を以下の①・②にまとめた。

#### ①三島町高清水地区(写真7・8)

紙雛は各家庭の女性の年頃に合わせてつくられていた。

- ・既婚者 丸髷、着物は短い袖、控えめな柄
- ・未婚者 島田髷、着物は振り袖、可愛い柄
- ・子ども おかつぱ頭

帯は、太鼓結びや文庫結び、ちょうちょ結びと様々である。



写真 5 只見川に流す様子 (三島町)



写真 6 只見川に流す様子 (金山町)





写真7 三島町紙雛



写真8 三島町紙雛の種類（左：髪型 右：帯）

## ②金山町水沼地区(写真9～11)

髪飾りに待ち針を使用している雛が多く見られる(写真10)。これは「裁縫上手になりますように」と待ち針に願いを込めていたといわれている<sup>註5</sup>。

紙雛と共に供えていた菱餅を小さく切って和紙に包み、たすきがけにして紙雛に背負わせて3月4日に流す(写真11)。この餅は前述した遠方の淡島様へ行くための食糧という説もある。なお、全体的な大きさは水沼地区の方が若干大きく、高清水地区の



写真9 金山町紙雛



写真10 金山町紙雛（待ち針付き紙雛）

ものは丈が長く細身である。

## 3 体験学習への導入

当館では例年、体験活動室月替わりメニューにて年中行事の「おひなさまづくり」を行っている。

令和5年度の体験学習内容を検討した際に、福島県の伝統的なお雛様である「只見川流域の雛流し」をモチーフとしてはどうかとの提案があった。そこで筆者を含む当館職員が資料収集に当たった。

まず、『福島県の祭り・行事—福島県祭り・行事調査報告書』制作の一環で、「只見川流域の雛流し」取材していた大山孝正氏<sup>註6</sup>にご協力いただいた。

次に三島町教育委員会より同町高清水地区の雛流しの概要と現状のようすを、また福島県立博物館よ





写真 11 金山町紙雛（餅を背負う紙雛）

り金山町水沼地区や他地区での「雛流し」の一連の流れや紙雛の特徴をご教示いただいた。最終的に上述した取材内容を参考にメニュー制作を行った。

以下に今回のメニュー制作にあたり留意した点などを紹介する。

#### （１）体験の方向性

今回の体験学習において作成する紙雛は、金山町水沼地区のものをベースとしつつ、大山氏提供の資料をはじめ、各所の資料を参考にして、水沼・高清水両地区の特徴を取り入れたものとした(写真12)。

考案に当たり、特に気をつけたことは、当館の体験活動室での体験者は大半が幼稚園児～小学生であることから、子どもが作業しやすいつくり方にあることである。加えてなるべく元のつくり方に忠実に体験してもらうことに注力した。

「つくりやすいこと」と「なるべく元のつくり方に忠実に体験してもらうこと」、この２点は時に相反してしまう。つくりやすさだけを優先してしまうと、体験者へモチーフとなったモノの本来のつくり方などが伝わらない。

「なるべく元のつくり方に忠実に体験してもらうこと」はメニュー考案の上で、単なる工作体験で終わってしまうことを防ぐための大切な根底意識であ

ると思う。

「まほろんで体験学習をする意味は何か」と常に考え、「歴史学習をする場である」という共通認識のもとでメニュー考案に取り組んできた。

これは、当館の体験活動室メニュー開発に関わってきた職員の中で、開館当初より代々大切に受け継がれてきた考え方である。

#### （２）体験内容の検討

また、本物をそのまま再現するにはいくつか懸念点があった。

一点目は頭部のつくり方である。試作した時点で、頭部の製作には細かい作業が多く、子どもには難しいと判断された。

例えば髪の毛をつくる場所、首と髪の毛を糸で縫い合わせる場所等である。そのため、頭部については職員が事前に制作しておくことにした。また髪に使用する紙を和紙よりクレープ紙にして質感を出す工夫をした。

二点目は髪飾りについてである。当初、髪留め兼髪飾りとして待ち針を使用しようとしていたが、試作を重ねる中で、低年齢の体験者が怪我をする可能性が職員間で指摘された。そのため、待ち針は用いずに、あらかじめ職員が髪部分をホチキスで固定しておくという方法を取った(写真13)。

三点目は胴体部分である。水沼地区の本来の制作方法(紙に折り目をつけて切り抜く)は、低年齢の体験者にわかりにくいと感じ、型紙を利用して作成することにした(写真14)。

一番の課題は体験時間であった。体験時間が30分を超えると子どもたちの集中力が切れる恐れがあるため、なるべく短時間で完成できるように留意した。すなわち、上記の部品に加え、あらかじめ帯に両面テープをつけておくなど職員による事前作成部分を増やすことで、時間の問題を解決した。

## 4 体験学習のようす

体験学習の実施にあたり、体験者に「雛流し」の行事のようすを知ってもらうことも重視した。

そのため、福島県立博物館制作のDVD『只見川流域の雛流し』<sup>註7</sup>の要点を編集した短編(5分)の映像を視聴後、おひなさまづくりを体験するという流れにした(写真15)。



写真 12 令和5年度のおひなさま 表／裏



写真 15 動画視聴の様子



写真 13 紙雛後頭部（左：試作時 右：提供時）

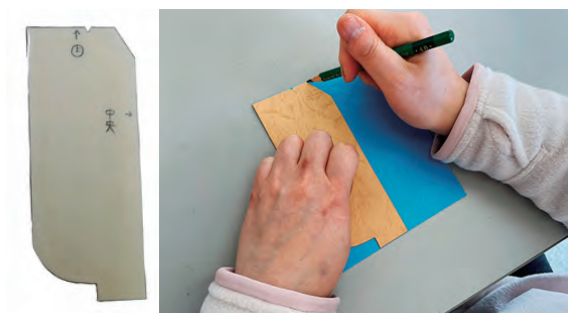


写真 14 型紙を利用して作成

#### （１）体験活動室での体験

体験者はまず、職員からつくり方の説明を聞く。職員の説明の補助材料として、視覚的にもわかるようにつくり方シートを設置した(第3図)。これは他の体験メニューにも利用している方法である。基本的に体験者本人に作業を行ってもらい、不明点があった際には職員が補助した。

体験の流れは、以下の通りである。

- 1) 画用紙に型紙をあて、はさみで着物の形に切る(写真16、第3図①～④)
- 2) あらかじめ制作済みの頭部に着物を巻く(第3図⑤)
- 3) 2)の背中に両面テープを貼る(写真17、第3図⑥)
- 4) 1)に貼り付ける(第3図⑦)
- 5) 頭部に襟を貼り付ける(第3図⑧)
- 6) 帯揚げや帯、帯のリボンを貼り付つける(写真18、第3図⑨～⑪)



写真 16 型紙に合わせて線を引く

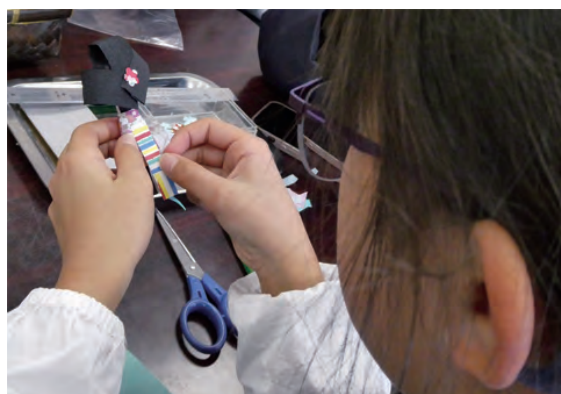


写真 17 背中に両面テープを貼る



写真 18 帯揚げや帯を貼り付ける





第3図 体験活動室用つくり方シート

6) 髪飾りをつけて完成(第3図⑫)

(2) 体験学習後

#### ①館内

常設展示室にある映像展示コーナーにて、体験活動室で流していた福島県立博物館制作のDVD『只見川流域の雛流し』を全編(約20分)視聴できるようにした。「おひなさまづくり」を体験していない来館者に対しても映像によって「雛流し」を知る機会を提供した(写真19)。

#### ②館外

「ご家庭でもふくしまのおひなさまをつくってもらえるように」という思いのもと作成した「持ち帰り用つくり方シート」(第4図)を、体験終了後におひなさまと一緒に持ち帰ってもらった(写真20)。体験者からは「お家でもつくれるね」「学童クラブで、みんなでつくれそう」と好評であった。

## 5 おわりに

体験活動室での体験学習に「只見川流域の雛流し」をモチーフに用いたことを通して、筆者が感じたことをいくつか述べたい。

#### (1) 学習効果

学習効果としては、当館の体験や映像で行事自体を知り、自らの手でつくることで「雛流し」について理解が深まることが挙げられる。また、「持ち帰り用つくり方シート」を持ち帰った体験者については、自宅でもう一度、おひなさまをつくることで、自分が理解した「おひなさま」を新たな発想で体現できる良い機会になると思われる。

更に、「流し雛」本来のつくり方を簡略化して提供したことで、幅広い年齢層が体験しやすくなったと考えている。

今回「流し雛づくり」を体験学習に導入する段階で改めて感じたことは、地元で代々伝わる年中行事を各家庭において体験する機会が減ってきているため、学校や当館のような施設での機会提供の必要性が高まっているのではないかとということである。

当館によく訪れる来館者の中には、月替わり体験メニューの中でも年中行事の体験を目当てにやってくる来館者も少なくない。「まほろんは気軽に年中行事を体験できる場所」と認識している保護者もある。「おひなさまづくり」のほかは、「凧づくり」、「お正月飾りづくり」、「こいのぼりづくり」、「七夕かざ







写真 19 映像展示コーナーでのDVD放映



写真 20 持ち帰り用つくり方シートの説明の様子



写真 21 令和6年度のおひなさま 表／裏

りづくり」などを当館では実施しているが、今後も継続していければと考えている。

体験活動室では、各メニューの体験前には必ず職員が解説をしている。それにより体験するメニューにまつわる年中行事、また考古学にかかわる体験学習の場合はその遺物や遺跡について理解を深め、知る機会を提供している。

その中で体験者が印象に残ったことを更に調べることで、他の家族や友人に「伝える」ことで学習の一環になると思う。

## (2) 文化財活用

体験学習を通じて、福島県の伝統的な年中行事を

来館者へ伝えることも、福島県の文化施設である当館の大切な役割である。

無形民俗文化財には伝統的な年中行事と密接な関係にあるものも多く、来館者からも比較的身近な存在であろう。今回のように、体験と同時に映像を通して「雛流し」の光景を見せることで、来館者が自分たちの住む福島県の伝統的な文化を追体験し、「知る」ことになる。「知る」ことから、さらに学ぶ機会を持ち、ひいては文化財を守ることに繋がっていくのではないかなと思う<sup>註8</sup>。

特に「只見川流域の雛流し」のように、住民の努力のもと存続されている行事の場合、県内の他の地域へ周知することで、保護運動の一助になるのではないかな。また、今回のような体験学習への導入は、無形民俗文化財の活用への一つのアプローチとなるとも考えている。

## (3) 課題と今後の展望

実際に体験活動室での「ふくしまのおひなさまをつくろう」を実施した後、職員から出た課題を以下にまとめた。

- ・見様見真似でわからない中、手探り状態ではじめた。「本物に忠実に」との思いでメニュー考案をしたものの、ふりかえるとまだ本物に近づけなかった部分がある。

- ・メニューを考案する職員が、実際に三島町で今もつくっている方から直接レクチャーを受ける、もしくは一緒にワークショップを開催することで不明点が解決し、更に本物に近づくのでは、と感じた。

- ・きちんと理解した上で再度簡略化できると良い。理解した上で他者へ伝えることが無形文化財を他へつなげることになるのではないかな。

- ・メニュー考案への資料調査の時間がもう少し必要と感じた。

令和6年度も「ふくしまのおひなさまをつくろう」を体験活動室月替りメニューにて実施した。課題は全て解決されたわけではないが、若干の改良を加えて行った。

令和5年度と同様、紙雛をつくってもらふ体験であるが、今回は金山町水沼地区のお餅を背負った紙雛をモチーフとした(写真21)。また、自由な発想を重視し、着物の柄を体験者の好きなように描いてもらうこととした。その結果、各体験者ならではの



オリジナリティあふれるかわいなおひなさまが完成した。

また、体験活動室メニュー実施と並行して、常設展示室にて「只見川流域の雛流し」の展示、及び映像展示コーナーにて映像提供を行った。

今後も引き続き、福島県の文化財を伝えるツールとして、体験活動室月替りメニューにて「ふくしまのおひなさま」を提供していけたらと思う。

なお、本稿執筆に当たり、資料集成等にご尽力いただいた川合正裕氏(三島町教育委員会生涯学習課三島町交流センター山びこ所長)、大山孝正氏(株式会社文化遺産情報研究所)、山口拓氏、大里正樹氏、西尾祥子氏(福島県立博物館)に末筆ながら感謝申し上げます。

### 【註】

- 註1 福島県教育委員会2005『福島県の祭り・行事ー福島県祭り・行事調査報告書』福島県文化財調査報告書第425集 P90～91
- 註2 雛流しとして現在も続いている雛流しとしては、以下の事例がある。  
京都府京都市「下鴨神社の流し雛」  
岡山県笠岡市「北木島の流し雛」市指定重要無形民俗文化財  
鳥取県「用瀬(もちがせ)のひなおくり」県指定重要無形民俗文化財  
山形県西川町「玉貴の雛流し」  
(※地元企業「玉貴」が節句文化の継承のために1997年から寒江川で行っている。)
- 註3 淡島神社(淡島様)には女性の病を治す、安産のご利益があるという伝承がある。淡島神社は全国にあるが、流し雛はみな総本社の紀伊国(和歌山県)や阿波国(徳島県)へたどり着くと伝えられる。
- 註4 写真1～3・6についても註1文献より引用した。
- 註5 三島町高清水地区でも以前は針をつける例があった。
- 註6 元当館職員(民俗専門)。
- 註7 福島県立博物館2005
- 註8 無形民俗文化財の映像資料の果たす役割は非常に大きいと感じた。

### 【引用参考文献】

福島県教育委員会2005『福島県の祭り・行事ー福島県祭り・行事調査報告書』福島県文化財調査報告書第425集  
福島県立博物館2005 DVD『只見川流域の雛流し』  
福島県立博物館1990『14回実技講座「流し雛を作ろう」リーフレット』

### 【図版出典】

第2図 福島県立博物館2005を一部編集、転載  
写真1～3・6 福島県教育委員会2005より転載  
写真4～5 三島町教育委員会提供  
写真7～10 福島県立博物館蔵  
写真11 福島県教育委員会2005から転載





---

福島県文化財センター白河館  
研究紀要 第23号

令和7年3月26日発行

編集・発行 公益財団法人福島県文化振興財団  
福島県文化財センター白河館  
〒961-0835 福島県白河市白坂一里段 86  
TEL 0248-21-0700 FAX 0248-21-1075

---